メルヴィル作『クラレル』／第一部　エルサレム

『クラレル』は、一八七六年、『白鯨』の作者メルヴィルが五十七歳の年に出版した一萬八千行を超える長詩で、「エルサレム」、「荒野」、「聖サバ修道院」、「ベツレヘム」の四部からなる。一八五七年の中東旅行の印象を基に、ほぼ十年を費して完成した作品である。

この作品は長大であるのみならず、甚だ難解であつて、これを讀み通さうとするには尋常ならざる覺悟を要するとは、英語を母國語とするメルヴィル研究家ですら屢々口にする所である。難解のよつて來るゆゑんは幾つもあるが、それはともかく、アメリカのある學者が書いてゐるやうに、晩年になつて氣力の衰へを示した同時代のエマソンやホイットマンと異り、メルヴィルは「最後まで嚴しく複雜な思索に耐へた」のだが、その根底には、『クラレル』最大の主題たる「信仰と懷疑のディレンマ」といふ問題があつた。友人ホーソンが指摘したやうに、「信じる事も出來ず、さりとて、懷疑に安んじる事も出來なかつた」メルヴィルは、妻や親戚に正氣を疑はれながら、出版の當も無く『クラレル』を書き續け、その「ディレンマ」を克服せんとしたのであり、さういふメルヴィルの精神の強靱に、西洋精神とはかくあるものかとの思ひを私は禁じ得ない。譯出を思ひ立つたゆゑんであるが、現在までの所、第一部「エルサレム」の飜譯のみが完成してゐる。以下にその目次を掲げるが、底本としては、ウォルター・E・ベザンソンの編纂したヘンドリックス・

ハウス版『クラレル』及びノースウェスタン・ニューベリー版『クラレル』を用ゐた。

第一章　旅宿にて　4
第二章　アブドン　18
第三章　聖墳墓　30
第四章　十字軍　47
第五章　クラレル　50
第六章　種族と宗派　69
第七章　城壁の彼方　73
第八章　信仰の人　81
第九章　聖者と學生　88
第十章　漫歩　92
第十一章　下のギホン　101
第十二章　チェリオ　108
第十三章　アーチ　120
第十四章　谷間にて　131
第十五章　尖塔の下にて　142
第十六章　嘆きの壁　150
第十七章　ネイサン　166
第十八章　夜　192
第十九章　成就　200
第二十章　灰の谷間　204
第二十一章　陋巷　219
第二十二章　隠遁者の住まひ　213
第二十三章　路地裏　223
第二十四章　嘲弄　230
第二十五章　小屋　238
第二十六章　シオン門　247
第二十七章　母と娘　254
第二十八章　墓と泉　262
第二十九章　隠遁者　274
第三十章　受難の場所　279
第三十一章　ロルフ　289
第三十二章　ラーマについて　312
第三十三章　石塊のそばで　317
第三十四章　歩みをとどめて　326
第三十五章　アルクルフとアダムナン　333
第三十六章　塔　343
第三十七章　素描　349
第三十八章　雀　358
第三十九章　クラレルとルツ　362
第四十章　塚　366
第四十一章　城壁の上で　373
第四十二章　便り　385
第四十三章　葬列　392
第四十四章　出発　397

＊＊＊

第一章／旅宿にて

古びた石造りの建物の一室、
過ぎ去りし時の名殘りを留める天井の低い部屋だが、
のろ[1]が塗り直されたばかりのためか、
岩に穴を穿つて作られた新しい墓穴のやうに見える。
そこで膝に肘を載せ手で額を支へ、横向きに座つて身じろぎもせず、
學生が一人物思ひに耽つてゐる。
　奥行の深い小窓から射し込んで來る光線は、
聖なる町の一日の——公現祭[2]の日の一日の終りを告げてゐる。
包を解いた荷物が學生の傍に置いてある。

1〔のろ〕水漆喰。石灰水に胡粉や糊を混合した溶液。壁や天井などの上塗りに用ゐる。
2〔公現祭〕西暦一月六日。東方の三博士のベツレヘム來訪を記念するクリスト教の祝日。

その上にも學生の身體の上にも埃が積つてゐる。
旅の埃だ。やがて學生は面を上げる。
整つた容貌だが、顔色は蒼白く、眼と皺を寄せた額とを除けば、
殆ど女性のやうにすら見える。
やがて彼は立ち上り、室内を往つたり來たりしてゐたかと思ふと、
ふと立ち止つて獨り言つ。
「學ばうとしてやつて來た俺だが、
俺を迎へたものは豫期してゐたものとは違つてゐた。
神學よ、汝はかくも盲目なのか？
超自然と飽く迄無縁な、この荒涼たる鐘の音は何なのか？
この地ではシロアム[3]の神託がひそやかに聞えて來る筈ではなかつたのか？
恩寵を奪はれた擧句の果に、

3〔シロアム〕エルサレム南東部の地名。クリストの奇跡によつて、その地にある池の水で盲人が目を開いたといふ。舊約聖書「ヨハネ傳」第九章第一參照。

この聖なる地でかかる待伏に出遭はうとは！
つい昨日、俺はヤッファ[4]の沖合の澄んだ青い海の上にゐたが、
あの時はこんな風ではなかつた。
叫び声や水しぶきの中を上陸した時にも、
俺の心はこんな風ではなかつた。
旅装を整へ馬に跨り、
アーチ型の門をくぐり抜け、
城壁のむかうにまばゆいくらゐに麗しい花園を目にした時にも、
決してこんな風ではなかつた。
　俺達は平原を横斷した。午後の事だ。
シャロンの平原[5]を渡る風は、
俺の故郷の穩やかな初秋の頃を思はせるやうに、

4〔ヤッファ〕イスラエル西部の海港。十九世紀には、イスラエルに於けるエルサレム巡禮の起點であつた。
5〔シャロンの平原〕イスラエルのテル・アヴィヴからハイファの南に至る沿岸平原。

何と優しく恵み深げに感じられた事か！
そしてあれは、さうだ、通りすがりによく目にしたあの紅の芥子の花こそは、
かのシャロンの薔薇[6]であつたのか？
白い帆のはためく町、ラムラ[7]は、
夕日を受けて輝いてゐた。
やがて、日の暮れ行く景色を、
町外れに聳える美しい塔の上から俺は見た。
彼方の海に目を遣れば、燃えるが如くに沒して行く太陽、
陸地に目を轉じれば、紫の帳に包まれて、
延々と伸び行くエフライム[8]の城壁。

6〔シャロンの薔薇〕舊約聖書「雅歌」第二章第一節に言及される「シャロンの野花」を云ふ。（「われはシャロンの野花　谷の百合花なり」）
7〔ラムラ〕シャロン平原の小都市。
8〔エフライム〕エルサレムから北に延びる山脈の名。

數多の傳説の眠る山々よ！
しかるに、目指す地に近附くにつれて、
何と大いなる變化が生じるに至つたか。
　今朝、出立の折、俺が目にしたのは、
引潮の海を背に銃や槍が立ち竝んでゐる光景だつた。
盜賊の住處の前を通り過ぎる時、俺達は馬の足音を忍ばせながら進んだ。
寒々とした拂曉の何とも侘しい前進だつた。
險しい岩山に挾まれた通路には、眞晝の灼熱の陽射が降り注ぎ、
岩に當つてそれが反射する有樣は、
かの炎の如き異教徒達の姿を想起せしめずにはおかなかつた。
彼等はその獰猛な手でアフリカの熱い砂礫を、
十字軍の王ルイ[9]に雨あられの如く浴びせ掛け、

9〔ルイ〕十三世紀末、十字軍を率ゐてカルタゴを攻めたルイ九世。

從ふ將卒の士氣を擊ち碎いたのであつた。
そして、遂に、目指す地の空高く、
極地を取り卷く氷の要塞の如くに、
白く、あくまでも白く聳え立つてゐた塔の數々、エルサレムよ！」
　再び彼は手で額を支へうなだれる。
が、不意に驚いたやうに立ち上る。
「何たる事だ、サレム[10]がサマルカンド[11]でない事くらゐ、
俺は辨へてゐた筈ではなかつたのか。
それはなんら驚くに値せぬ事ではないか。
それなのに、初めて目の邊りにした途端、
かくも意氣消沈して仕舞ふとは。

10〔サレム〕エルサレムの古い呼稱。
11〔サマルカンド〕中央アジアの古代都市。紀元前四世紀にはアレクサンダー大王が占據し、十四世紀にはモンゴルの征服者ティムールがここを都とした。

こんな俺の魂をどうでも洗ひ淨めてやらなければならぬ。
砂漠の精妙な大氣で書物から得た幻想を追ひ拂ひ、
今こそ自然の押し寄せる力の中から生命を貰ひ受けるのだ。
それに、今や俺には解つて來た、
先頃ラテンの國々を旅してゐた折、
俺を苦しめてやまず、いかにも祕密めいて思はれた、
或る種の暗示的想念の眞の意味合といふものが。
ああ、心の奥底で形作られる想念の數々！
それはあたかも、遙か彼方の海底から隆起して來る珊瑚礁のやうなものだ。
姿も見せず音も立てずに、海中をうねうねと這ひ回つてゐるその姿に、
俺達は殆ど氣附く事がない、——見ろ、暗礁だ——と叫んだ時にはもう遲い。
船は碎けて白波を被り、俺達は不幸のどん底に突き落とされる事となる。
けれども、この地で迷夢から醒めた俺の目に、
時間といふ大海原は何と廣大な景觀を呈するに至つたか！
實際、俺は若い、が、アジアは年を取つてゐる。

書物は總てを語つてゐない。
　そして、書物の語つてゐる事柄は全て、
高慢な心より生れ出でた淺薄な御喋りに過ぎない。
それが、あの深刻な顔附をした男が、
ヤッファの町の道端で俺に話した事だつた。
エルサレムから戻つて來たばかりだといふ俺の同國人のその男は、
俺の口にした何かの言葉を切掛に、突如たうたうと喋り出したものだが、
その言葉の意味がやうやく俺にも解つて來た。
奴の云つた事を思ひ出して見よう。
　吾が新世界の世俗的知性は、餘りにも怜利に過ぎて、
ユダヤの非世俗的で敬虔な雰圍氣に乏しく、
パレスティナを正當に判斷する資格に缺ける、と云はざるを得ない。
頑なな地方的心性を拂拭せよ。
貧弱で獨り善がりな流儀なんぞに囚れるな。
深淵を回避しても嵐から逃れられはせぬ。

そんな類の事をあの男は云ひ、その他にもまだ何か云つてゐた。
信ずるに足る明晰な説とは思へなかつた。だが、今になつてみると、
奴の云つてゐたそれとは大いに性質を異にするとしても、
俺にこびりついてゐる精神の狹隘を、やはり俺は認めざるを得ぬのであらうか？
心の安らぎを根こそぎにされる思ひだ！」

そんな思ひで學生はゐた。彼は生來眞摯な心の持主であつた。
鬱蒼たる木立に圍まれた學園で、
處女神ウェスタ[12]さながらに久しく孤絶せる生活を送つてゐたのが、
やうやく解き放たれて人界に立ち交らふ事となり、
遂にこの地で、眞實の天才と――敵か身方かはともかく――
相まみえる事になつたのみならず、己が眼で彼はしかと見たのであつた、
かつては空想の織りなす輝かしい恩寵の光の下で、

12〔ウェスタ〕ローマ神話の處女神。爐と爐の火の神。

ただ夢見てゐるに過ぎなかつた聖なる地の眞の姿を。
　彼の思ひは更に過ぎ去つた昔に向ふ。
今とは異る心を持つてゐた昔に。やがて彼は呟く。
「俺は近頃、天に祈りを捧げる事をまるでやらぬが、
そんな事で、信仰から光が消え失せて仕舞ふものなのか？」
ふと彼は跪き、唇を開かうとする。
だが、どうしても言葉が出ない。言葉が音聲にならうとしない。
何となく彼は屋上に登る。折しも太陽が沒する所で、
石の床には未だぬくみが殘つてゐる。
手摺りの笠石にもたれながら、彼、クラレルは沈黙の視線を投じる。
城壁に圍まれた山上の町、
その郊外には前方にも後方にも家影一つ無い。
城壁は險しい斜面に築かれてゐる。
そこまで攻め登るには攻城用の移動櫓が、
象が運ぶやうな櫓が無くては叶ふまい。

何とも壯大な光景だ。
彼は今アクラ[13]の北方の地域にゐた。
周圍の山々の中に一際尤なる山がある。
その頂の立派な姿に比べると、
高地に聳えるこの町ですら見劣りがする。——オリーヴ山[14]だ。
薄暮の闇が全景を覆ふ。
見下ろす彼の目に坂をなして立ち竝ぶ家々の姿が映る。
平たいのやら丸いのやら、屋根の格好はまちまちだが、
煙突の無いそれらの屋根は皆灰色の石で出來てゐる。——まるで屋根の荒野だ。
生活の氣配は全く感じられない。煙も昇らず物音もしない。
ただかすかに遠い雜音が聞えて來るが、それも半ば掻き消されて仕舞つてゐる。

13〔アクラ〕エルサレム北西部の地名。
14〔オリーヴ山〕エルサレムの東にある小丘。クリストはこの地でローマ人に引き渡された。新約聖書「マタイ傳」第二十六章第三十節參照。

宿はヒゼキヤ[15]の池の隣りにあつた。
一段低い處にある中庭には、沈黙と隱遁の雰圍氣が漂つてゐる。
庭の四圍を取り卷く石壁は、急な斜面に土臺が据ゑられてゐるのだが、
その土臺と斜面の土との境目がはつきりせず、
まるで自然に出來上つたもののやうに見える。
　三層甲板船の船尾灯が、
眼下の滑らかな船跡に眺め入つてゐる樣子にも似て、
宿の小さな格子窓が、
池の暗いつややかな水面に後ろ向きの視線を投じてゐる。
夕暮の物憂い風が、
地面のあちこちの割目から覗いてゐる乾いた雜草をそよがせる。
それらの雜草は岩山から蔦をなして這ひ出して來て、

15〔ヒゼキヤの池〕紀元前七世紀頃、ユダヤ王ヒゼキヤがアッシリア軍の包圍に備へ、エルサレム城内に水を確保すべく造成した溜池。

太古の龜裂を覆つたのだ。
そしてそれらの上に、
大海原を見下ろす燈臺の如くに、
コプト修道院[16]が聳え立つてゐる。
　朽ちかけた石壁に殘るアーチ型の門、
固く閉ざされた窓、堅牢な石造りの正門、
通り過ぎる人影もない柱廊、
全てが押し黙つてゐる。
キャッツキル[17]山中の湖は、
農家や乾草の山をはるかに見下ろす高地にあり、
使ふ人もなく苔むした納屋や朽ち果てた丸木橋が、
寂寥感を強めてゐる。が、その湖ですら、

16〔コプト修道院〕クリスト單性論を唱へ、ローマ・カトリック教會から離脱し、異端とされたエジプト人の國民教會、即ち、コプト教會の修道院。
17〔キャッツキル山〕米國ニュー・ヨーク州東部の山脈。

生ける人々の住まふ街中にある、
この死せる池程荒涼たる様子はしてゐない。
クラレルが呪縛を脱するには、この地は相應しくないのかも知れぬ。
彼に取り憑いた奇怪な思ひは、高じるばかりだからである。
けれども、夕暮のおぼろな明りも消え失せた。
彼は屋上を降り、中庭に足を向ける。

第二章／アブドン

アーチの要石から吊り下つてゐるランプが、
石の戸口のまぐさ石[1]に嵌め込まれた細身のガラス瓶に、
斜めに光線を當ててゐる。
クリスト教徒が笑ひ物にした例のガラス瓶[2]だ。
中にはタルムード[3]の聖句が、すなはち護符が納められてゐる。

1〔まぐさ石〕窓もしくは出入口の上に水平に渡した石。

2〔クリスト教徒が笑ひ物にしたガラス瓶〕このガラス瓶の中にはユダヤ教徒の羊皮紙の護符が収められてをり、その一面には舊約聖書「申命記」中の聖句が、他の面にはShaddai（全能者）といふ文字が記されてゐる。聖句の教への實現を願つて、ユダヤ人はこれを家の戸口に取り附ける譯だが、ユダヤ人の經營する旅館に宿泊したクリスト教徒が、それを見て嘲笑する事があつたといふ。

3〔タルムード〕ユダヤ人の生活・宗教・道に纏はる法律を集大成したもの。

戸口に黑いユダヤ人が座つてゐる。宿の主人のアブドンである。
インディアン・ブルーの長い衣をサフラン色の莊重な顎髭が覆ひ、
その上をランプの光が去來する。
　心惑ひ思ひ亂れ、
語り合へる相手に心の慰めを見出さんとして、
クラレルは中庭を通つて近附いて行く。
主人はまだ氣附かない。何かの思ひに心を奪はれてゐるらしい。
革の卷物が手から垂れ落ちてゐるが、
讀みさしの一節に考へを巡らしてでもゐるのであらうか。
　ぢきに、驚いた樣子を示すでもなく、
この孤獨な男は己れよりも更に孤獨な客の存在に氣附き、會釈する。
二人の間に對話が生じ、話題が移り行く裡に、
やがて主人は嚴肅な調子で語り出す。
彼こそは、――言葉を額面通りに受け取つて構はぬとするなら――
かの謎めいた人々の、即ち、今に至るも多くの人々が探索の手を休めずにゐる、

かのイスラエルの十部族、[4] 時間の森の中に見失はれた子供達、
戻らざる十部族の、末裔の一人なのだといふ。
　しかり、この黒いユダヤ人は、云ひ渋る風もなく、
確言したのであつた。十部族の生き殘りは古代のインドに身を匿したが、
その中に、律法學者を伴つて遠くコーチン[5]に定住した人々がゐた。
彼はそこで生まれて育つたが、彼の血族の者達は、
眞摯な忠誠心を失はず、未だにモーゼの律法を固く守つてゐるといふ。
　コーチン、コーチンとな、
（クラレルは考へ込む）確かに俺は聞いた事がある、

4〔イスラエルの十部族〕聖書によれば、カナンの地はヤコブの十二子の名に因む十二部族（アセル、ナフタリ、ベニヤミン、セブルン、イッサカル、マナセ、エフライム、ガド、ダン、ルベン、シメオン）の間で分割されたが、バビロン捕囚の後、ユダヤ、ベニヤミン以外の十部族が歴史から姿を消したといふ。

5〔コーチン〕インド南西部に近い海港。ポルトガル人がインドに於ける最初のヨーロッパ人要塞をここに築いた。

黒いユダヤ人の事とか、往古よりの信条や古めかしい習俗の事とかを。
が、エズラ[6]は言つた、十部族はアザレス[7]の地で暮した、と。——
更に東といふ事になる。可能性はある。
　けれども、あの山羊革の卷物を、
彼が讀んでゐるあの聖賢の書を見るがいい。
あれは世に云ふインド版モーゼの五書[8]。
ともあれ（この行方知れずの古への部族に關しては、
學者の間で諸説入り亂れてゐる）、
更に謎めいて思へるのは、
ユダやベンヤミンの一族が如何にして生き永らへたのか、——

6〔エズラ〕紀元前六世紀末のユダヤの指導者。
7〔アザレス〕聖書外典「エズラ第二書」第十三章第四十五節に言及される地名。
8〔モーゼの五書〕舊約聖書の初めの五書。「創世記」、「出エジプト記」、「レヴィ記」、「民數記」、「申命記」を指す。

一切を呑み盡してやまぬ時間といふ大海原に姿を沒し去る事もなく、
如何にして己がアマゾンの水流[9]をかくも遠方まで運び得たのか、といふ事だ。
　クラレルは思ひに沈む。しかし、再び主人が口を開き、
己が波亂の生涯を語る。
隨分昔、彼は交易で一儲けを企み、
ポルトガル生れのユダヤ人商人と一緒に、インドからリスボンに向け出航した。
爾來、多くの海や交易地をさまよつたが、
結局、アムステルダムに住み着く事となつた。
「仲間と一緒に、そこで半生を過した譯だが、
みんな、とても親切にしてくれました。
所が、商賣に失敗してな――大損害。で、わしは思ふやうになつた、
ユダの地に歸りたい、とな、――ただただそればかりを思ふやうになつた。

9〔アマゾンの水流〕アマゾン川は二千キロの長きにわたつて、河口から河水を海に運ぶといふ。

さうさう、お見せしたい物がある」。彼は立ち上り、明りを取つて、
屋内に請じ入れる。「あれを見なされ、
わしのやうな男にとつて、この先、どんな道が殘されてゐるか、——
ほれ、それですわい！」——ずんだ石板が、
壁にまつすぐに立て掛けてある。彫刻を施された粗末な墓石で、
ヘブライ文字で何か書いてある。
「これはモリア[10]の麓に置かうと思ふ——
遠い先の事ではない。日ならずして、
正に時の間に、わしは死ぬ。インドよりシオン[11]の地までやつて來たが、
それはただ、この地で最期を迎へる爲でした。

10〔モリア〕エルサレム東部の丘。その昔、ここにソロモンが神殿を築いた。異境にあるユダヤ人の中には、死期が迫るとモリア山麓のヨシャパテの谷に埋葬されん事を願ひ、イスラエルに戻つて來る者が少くないといふ。

11〔シオン〕ユダヤ民族の祖國、イスラエルの地。

あとは最後の家移りを殘すのみ！」
主人は溜息を吐きながら石版に眺め入る。
高くかざしたランプの明りが、
得體の知れぬ夜の暗がりの靜けさを際立たしめる。
――死せる土地の夜！
　クラレルの心の中を老人の言葉が重苦しく驅け巡り、
重苦しい追憶の絲を紡ぎ出す。
なほもユダヤ人に目を注ぎながら、
彼はまた取り留めもない思ひに耽ける。――實に不思議だ、
肌の色は生粹のヒンズーさながらに淺く、
皺ばんだ顏面はヘブライの血筋を裏切り示してゐる。
更に謎めいてゐるのは、この古老が長衣に附けてゐるく縁取られた經札だ――
それに、革の卷物とか、戸口のガラス瓶とかもまた、
神秘の雰圍氣を助長せずにはおかない。
　二人は別れを告げる。クラレルは己れの部屋に、

墓穴の如き小室に戻る。
そして――かの魔性の力の攻撃を粉砕せんとて、
せめて攪亂し妨害せんとて――
オリーヴ油のランプに灯を點し、
鞄の汚れを拂ひ落し――
つい最近、急いで求めた鞄だ――
それを開け、些々たる持物の整理に慌しく時を費さんとする。無益な慰め！
しかく動搖せる心を抱へつつ、見るともなく視線を漂はせてゐると、
ふと彼の目は、鞄の懸子の紙の内張りに記された、
JUDAEA[12]なる言葉に行き當る。
鞄の内側の造りは、安上りに、
全て印刷物で仕上げられてゐた。

12〔JUDAA〕「ユダの土地」のギリシャ＝ローマ式の呼稱。

色褪せた文字に好奇心をそそられて、
彼はその先を讀んでみる、それは、
一枚の粗末な紙に印刷された、短いが、
完結した一編の詩であつた。

「世界」は呼ばはる――
「聖地より戻りし最後の者よ、
汝の土産は何か？　シケム[13]の葡萄か？
エデンを取り巻くタボール[14]の山は、
あでやかな花冠を齎してくれるとか。
吾は欲す、汝の手にうましき物のあらん事を。
はて、汝の口遊むはソロモンの歌、

13〔シケム〕エルサレムの北三十四マイルの所にある、パレスティナで最も肥沃で美しい町の一つ。
14〔タボール〕シケムの更に北方にある山。山の斜面には樹木が青々と生ひ茂つてゐるといふ。

さては、汝の持ち歸りしはシャロンの薔薇か」。
「巡禮者」は答へる――
「否、汝が名を擧げしそのいづれも、吾の持ち歸りし物にあらず、
吾が足はユダヤの地のみをさまよひたれば。
なかんづく、吾の足繁く通ひたるは、
クリストの墳墓の地。
この櫻欄の葉こそ――塵にまみれたこの葉こそ――吾が土産、
塵と灰の道をこそ、吾は踏み通りたれば」。

眞實過ぎるお前の土産だ（とクラレルは思ふ）。が、
世界がそれを受け入れようとは、どうしても思はれぬ。
けれども俺は、この俺は、吾が足を勵まし、
お前と同じやうな道を辿り、徒らな旅の終りを迎へたものであらうか？
むしろ、俺は、草藪の中を、人氣の無い草藪の中を、さまよひたい。
俺が前に進めば、草藪は俺の後ろで道を閉ざす。――

思考の重荷よ！　彼はそれを、寝椅子の上に、
己れの身體もろとも放り出す――が、やがて起き上つて、
窓際に歩み寄り、外を覗く。月光が照り渡り、
星が瞬き、オリーヴ山がくつきりとした、
それでゐて、夢見るやうなのどかな姿を見せてゐる。
まるで、暑い眞昼に、山肌を覆ふ松の木が皆ぐつたりしてゐる中で、
一人寂しく聳えてゐるキャタディン山[15]のやうに。
　自然と福音とが衝突する、
と言ふよりも、二重の神秘が火花を散らす。
オリーヴ山か。俺が見てゐるのがオリーヴ山なのか？
あれが、「汝」の踏み歩んだといふ理想の高地なのか？
　立つてゐても横になつてゐても、

15〔キャタディン山〕米國メイン州中央部にある山。

無音のしじまが彼の魂を苛んだ。
が、やがて眠りが、老練な乳母が、
巧みにベッドの傍に忍び寄り、
彼の蒼ざめた手を己が手に優しく包み、
空が明け初める頃まで、彼の傍を離れなかつた。

第三章／聖墳墓[1]

ユピテルはクレタ[2]に眠り、墓所のある峡谷の上空を、
鷲達が飛び翔けてゐるといふ。
しかるに、クリストの墓所は街の雑踏を通り抜けた低地にあり、
戸口のそばには鳩がゐる。好對照といふ他ない。
しかも、人となり給ひしこの神には、
かかる對照を際立たしめる更なる印が刻まれてゐる。
彼は女の腹から生れ、吾等の只中で暮し、吾等と住居を共にし、

1〔聖墳墓〕イエスが復活の時まで埋葬されてゐたと傳へられる聖墓。エルサレム舊市街にある。
2〔クレタ〕クレタ島。ギリシャ南東方、エーゲ海にあるギリシャ領の島。ローマ神界の主神ユピテル（ジュピター、ゼウス）にとつて、この島にあるイディ山は何にもまして神聖な山とされる。ユピテルの墓所はイディ山中にあるとする説もある。

吾等のパンを食した。いかなる侮蔑の念も抱かずして、
みすぼらしく粗末この上ない炉邊を圍み、
罪と歡樂以外の一切を人間と共有した。
さういふクリストへの思ひこそが、幾多の想念を押し退けて、
巡禮者の心を激しく掻き立てるに相違ない。彼等は爭つて、
かの尊い教會に通じるむさ苦しい小道に押し寄せる。
そこには聖墳墓が祀られてあり、
それゆゑ自づとそれが教會の名稱となつてゐる。
　群れをなして立ち竝ぶいかにも古めかしい祭壇だの、
岩穴に設けられた社だのが、聖墳墓のまはりを取り圍んでゐる。
岩と洞窟、目に映るのはそんな類ばかりで、
修道院のやうな嚴めしい回廊が更に陰氣な印象を募らせる。
境内の敷地を用ゐて、
受難の劇のあらましを萬遍無く知らしめんとしたのであらう、
この壯大な教會は、謂れある史跡を捜し出しては、

その全てに曲りくねつた回廊を差し向けてゐる――
周邊の史跡といふ史跡を悉く呑み込んでゐる譯だ――
恐るべき貪欲、しかも何といふ迷宮の世界。
　けれども、かつてそれらは全て別個に存在してゐたのであり、
巡禮者達はイエスの像からまた別のイエスの像へと、
禮拜堂から社殿へと、天幕から天幕へと、
風雨を凌ぐ何物も無いままに訪ね歩いたのであつた。
それが今では屋根を連ねた一つの全體をなしてゐる――
そして今、長い歳月の影響と、
數多の傳説の釀し出す人を呪縛する力とによつて、
全體が再び一種獨得の性格を帶びるに至つてゐる――
憂欝もしくは哀愁がそれであり、思ふに、それは、

今は昔、「いと高き神の祭司」メルキゼデク[3]が、
四人の王に懲罰を加へたアブラム[4]を、
聖なる儀式によつて祝福せんとて、
酒とパンを携へ、當時は原初の森に覆はれてゐたサレムの高處から、
シャヴェの谷[5]に降り來つた時に、
この地が帶びてゐたと言はれる性格と、
甚だ似通つたものなのではあるまいか。
　衣摺れの音が薄暗い空間から、
信者の歩む奥行の深い通路から、聞えて來る。

3〔メルキゼデク〕サレム（エルサレムの古い呼稱）の王にして祭司。舊約聖書「創世記」第十四章第十八節參照。（「サレムの王メルキゼデク、パンと酒を持出せり彼は高き神の祭司なりき」）

4〔アブラム〕古代ヘブライ民族の始祖とされるアブラハムの元の名。アブラムにまつはる「四人の王」云々の逸話については、舊約聖書「創世記」第十四章第十四節～第十八節參照。

5〔シャヴェの谷〕サレム近郊の谷。「王の谷」としても知られる。舊約聖書「創世記」第十四章第十七節參照。

インドの欝蒼たる森の中でも歩むかの如くに、
足取りは忍びやかで時たま妙な途切れ方をする。
遠くにある欄干かアーチ門の邊りから、
歌の調べが鳥の囀りのやうにかすかに聞えて來る。
跪く信者の手にする小さな明りが、螢の光さながらに、
點々とおぼろげな光を放ち、
廣大な身廊の青い闇に柔らかな彩りを施し、
神秘の靄を作り出す。
千年にわたる靄だ、
そしてそれを通してカルヴァリ[6]が見える、涙で曇つた目に映るかの如くに。
　大聖堂の修道院の區域には隱者達がゐる。
參詣者の出入りする晝間は人目につかぬ物陰に隱れてゐるが、

6〔カルヴァリ〕エルサレム近郊の丘。イエスが磔刑に處せられた地。後出の「ゴルゴタ」のラテン名で、「されかうべ」を意味する。

魔力で守られた眞夜中になると姿を現し、
裸足で小さな蝋燭を持ちながら、
圓環状に並べられてゐる祭壇の、
圓の中心に祀られてゐる聖墳墓の邊りを、
己が心の命ずるがままにさまよひ歩き、
祭壇の前に來る毎に大理石の棚にかぐはしい聖油を注ぐ。
中には、聖墳墓をこそ己が心にかなふ祈祷室と思ひなし、
不可思議な慰安を求めて、
ただ一人閉ぢこもる者もゐる。
　修道院には樹蔭の小鳥の巣のやうな小さな庵がある。
眞面目で裕福な信者とか、
異國の嚴めしい客僧とかが、

四旬節[7]の期間、そこで祈願の旅の疲れを休め、
己が聖なる止り木から、
ゴルゴタ[8]の丘だの、固く警護されてゐる聖墳墓だの、
至る所に啓示される神秘だのに尊崇の眼差を向ける。
やがてその魂は、法悦の餘り、
この教會にもう一つの禮拜堂を附け加へる仕儀となる。
　教會堂に仕へる修道士はと云へば、
彼等は堂宇の世話と手入れに餘念無く、そこを己が住處となし、
數週間もの間、門外に出ようともしない。
また、毎朝、布と箒とを手に、
カルヴァリに差し掛けられた階段を登る、

7〔四旬節〕「聖灰水曜日」（「四旬節」期間の初日の水曜日）から復活祭前夜までの、日曜日を除く四十日間。荒野のイエスの試練を記念すべく、斷食や贖罪を行ふ。
8〔ゴルゴタ〕カルヴァリと同じ。註（6）參照。

と云ふのも、そこに積つた埃は、やがて舞ひ降りて、
聖墳墓の上や受難の劇の悲しみを傳へる場所にも、
降り積る事となるからだ。
作為や欺瞞にあらずして、傳承がこの地を統べる――
古く、かつ遍く云ひ傳へられた傳承が。
人々は劇の起つたとされる場所に立ちすくむ――
場所は全て指定されてゐる。ここで、
「あの方」は鞭打たれた。あそこで、
兵士達は「生贄」を木に釘で打ち附けた。嘲りながら、
そこに、ユダヤ人達は立つてゐた。そこで、マリアは眞蒼になつた。
ここで、衣が分かたれた。[9]

取り憑かれた石の演じる奇跡劇――

9〔衣が分かたれた〕新約聖書「マタイ傳」第二十七章第三十五節參照。ローマ総督ピラトの兵卒どもが、イエスを十字架につけてのち、「籤をひきて其の衣をわかち」とある。

見る人をして躊躇せしめ心服せしめる力を備へた、
正に幻影に浮ぶ奇跡劇だ。
されば、それについて何を云はうと——
たとひ信仰に無知なる輩がそれを云はうと、眞劍にならざるを得ず——
浮薄となる事などおよそ不可能に思はれる、
浮薄めいた物云ひですら考へられぬ。
　事實、思ふべし、一體どれほどの數の人々が、
世々代々、祈願の成就を願ひ審判を恐れて、
この地に赴き踏石を擦り減らして來た事か。
己が嘆きと悲しみを——男と女の悲嘆を——訴へにやつて來たのは誰であつたか、
他ならぬ吾等の先祖達ではなかつたか。
いにしへの戒律に責めつけられて、
刺すやうな自責の念に胸を焦し、
身體にからみつき骨を喰ひ破る鐵鎖の苦痛の裡に、
偽り無き言葉を見出したのは、如何なる魂であつたか。

ア・ベケット[10]の刺客達は如何にしてこの地にしがみつき、
悔恨の責苦を吾身に背負ひ、
やがて鞭と斷食とから解放されて、
モリア[11]の山麓でとはの眠りを貪るに至つたか。
その種の例は枚擧に暇が無い。とまれ、しかく根強い紐帶ゆゑに、
眞偽はともかく、歴史の痕跡を今に留める場所として、
人々はこの地に深い敬慕の情を寄せるのである。
それをむやみに咎め立てするのは間違つてゐる、そんな事で、
人々の祈りに込められた熱い思ひが簡單に消し去れる道理がない。
それは完璧な一體感で沸き立つてゐる――
をさな児の如き信仰と、人間の苦難への思ひとを共にするといふ感動で。
けれども、中には、この地にあるものの殆どに心を動かされぬ者もゐる。

10〔ア・ベケット〕トマス・ア・ベケット（一一一八?～一一七〇）英國カンタベリーの大司教。國王ヘンリー二世の教會政策に反對して殺害される。

11〔モリア〕エルサレム東部の丘。

却つて彼等は深い嫌悪や侮蔑の念を抱きつつ、
或は顔に冷笑を浮べつつ、大聖堂に目を注ぐ。
打ちさびれた中庭や裏庭は、
かたりの手口を常套となす行商人や、
護符や十字架の賣子の群で混雜を極めてゐる。
また、祝祭日の喧騒たるや、
市日の旅宿の有様そのままに、
アジア各國の言葉や、
各種の島言葉がけたたましく飛び交ひ、
それがまた様々な國柄の、
風變りな衣裳を纏つた群衆のぞめき聲に、
掻き消されて仕舞ふ。
かかる群衆は商人なりや？　これはカイロの市場、
その大道なりや？　否々、汝、咎むべからず。
それらは單に純朴な自然の性の發現に過ぎぬ。

勝手放題をしてはゐても、誰も不敬の念なんぞ抱いてはをらぬ。
ヨーロッパは悲痛な疑惑に苛まれ、
「父なる神は在すのか?」と問はざるを得ない、
が、これら敬虔な風土の子供達は、そんな疑惑には煩はされず、
祭日には教會に赴き、
無知の幸福を滿喫しつつ、陽氣にその日を送るのだ、
あたかも、壁に閉ざされた遊び場で戯れる身無児の如くに。
一方、人々の中には、この地の陰鬱な雰圍氣に接して、
そこには自然の醸し出す暗影以上の何かが染み込んでゐる、
と見る者もゐるかもしれぬ。さういふ人々が、
聖墳墓の近邊をたつた一人でぶらついてゐると、
やがて、日が暮れかかる——
天使の坐る石の影が、
遠くの方に伸びて行き、
溜息とも嘆聲ともつかぬ音が、

マリアが悲嘆の涙を流した場所の邊りから、
或は、十字架が發見された洞窟の邊りから、木霊のやうに響いて來る。
それともそれは、兵士が槍を突き出したあの場所で、
鼠が立てたかすかな物音ででもあつたのか――
ともあれ、その音に彼等は縮み上る、あたかもかのルドヴィコ[12]が、
物の怪に憑かれた部屋に脅かされた如くに。
汝、繊細な感情に乏しく、それでゐて、
天上天下のありとある事柄に――
己が心の深淵以外の全てに、通曉してゐるらしき者よ。
この地を嘲弄せんとしてゐた汝自身が、
自ら掻き立てた空想の極限の姿に、
驚き怖え兼ねない――實に巧妙かつ不可思議な遣り方で、

12〔ルドヴィコ〕アイルランドの劇作家リチャード・シール作の戯曲『イヴァドニ、もしくは彫像（一八二〇年）に出る悪黨の名。

狡猾にして老いたるこの地は嘲弄に報いるのだ。
けれども、嘲弄したいと思ふ者には、やりたいだけやらせればよい。
嘲弄者の席に坐る汝のまはりに、いづれ、
反發の影が忍び寄り、高慢といふスミルナの肩掛[13]を纏ふ者は、
ペスト患者さながらの窮地に陥る羽目となる。穢らはしい、消え失せろ！
　しかし、人の世を嘆じつつも、
かの疑惑を捨てられぬ者等については奈何？
さういふ者等はこの地では常に、
かの「されかうべ」を意味する處、ゴルゴタからは遠ざかり、
大理石のパンテオンよろしく飾り穴を施された、
シダー[14]の丸屋根が陽光に照り映える光景を眺め遣る事こそ望ましい。

13〔スミルナの肩掛〕元來、十六、十七世紀のオスマン・トルコの宮廷で使用された絨毯や織物の花柄模様を、「スミルナ」織と稱した。十八、十九世紀には稀少なものとして珍重された。
14〔シダー〕各種の cedar（ヒマラヤスギ屬の樹木の總稱）の木材。

視界を曇らせるガラス窓をではなく、廣やかな大空を眺めるのだ。
太陽が顔を出し、星々が通り過ぎる大空を。
されば、それらが光を注ぐ靜かな時刻に、
天の雫は聖なる墳墓に一掬の涙を落すであらう。
　しかもここでは、雄々しい夢想を喚起する往古の傳説にも事缺かない。
大氣も動かず町々も靜まり返る靜寂の時刻に、
ゴドフロアとボードゥアン[15]は各々の墓から――適切にも、
それらは救出された「岩」[16]の間近に作られた――
武具に身を固めて立ち上る。長劍を閃めかせつつ、
二人は自ら戰ひ取つたクリストの墓を一心に警護する。

15〔ゴドフロアとボードゥアン〕ゴドフロア・ブーイヨン（一〇六一？～一一〇〇）第一次十字軍のフランス軍指揮官としてイスラム軍と戰ひ、エルサレムを占據し、一〇九九年、エルサレム王に選ばれ、兄ボードゥアン（一〇五八？～一一一八）と共に、カルヴァリの丘の「十字架寺院」の十字架の下に葬られた。

16〔岩〕聖墳墓教會の「カルヴァリの岩」。

かくの如く空想は働き、輕やかに成功を遂げる。
しかるに、想像力は常に重々しさを失はず、
遠い昔の「金曜日」を思ひ起こし、
かの磔刑の日をよみがへらせようとする——
三人の蒼ざめたマリア[17]の心境を偲びつつ、
受難の劇とそれに續く事の次第を體驗してみようとする。
光の消えた闇の中を、
三人のマリアは歸つて來る。ゴルゴタへの道を辿るべく、
最前、後にして來たその家に。空虛な部屋、
暗欝な宿命の重荷——
打ちひしがれた心、おう、餘りの苦惱の激しさに、
今ではもはや、あの方の約束すら信じられぬ、それなのに、

17〔三人の蒼ざめたマリア〕イエスが十字架につけられた時、その側にゐたと云はれるイエスの母マリア、マグダラのマリア、及び「マタイ傳」第二十七章第六十一節に出る「他のマリア」の三人。（「其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤと墓に向ひで坐しゐたり」）

答へを返さぬあの方に、どうしても呼び掛けずにはゐられない。しかもまた、
恐怖が胸を締め附ける、この先、どんな恐しい事態が持ち受けてゐるのか。
愛と恐怖でより合はされた心が叫ぶ、
「行つて仕舞はれたのか？ あれが終りか？ あの磔が？」
一體、誰が豫見し得たであらうか、かかる絶望から、
空しく畏縮した心から、
華やかな復活祭の印たる、
かの幸ひなる百合の花や讃美歌の數々が出で來たる事を。

第四章／十字軍

救世主の墓を奪還すべく、願を立て、
陣を構へ、軍馬を進めて來た十字軍の騎士共が、
目指す彼方に墓を圍繞する數多の塔の姿を目にするや、
かくも臆する氣色を浮かべたのは何ゆゑか？
何ゆゑ彼等は羽毛を冠した甲を脱ぎ、
綬帶を外し、塵埃の中に跪き、ため息を吐いたのか？[1]
　ヴォルテールの説を引き、要するに、
騎士とは云ひ条實は盗賊同然の手合で――されば、
畏敬の念や喜怒哀樂の感覺とは無縁の輩であつた、

1〔救世主の墓を～ため息を吐いたのか〕イタリアの詩人タッソー（一五四四～一五九五）の敍事詩『救はれたエルサレム』中の敍述に基づく。

などと云つてみた所で説明にはならぬ。
人間は複雑な情調の相續人だからである。それに、かの時代には、
敬虔な信仰が兇暴な悪黨の胸に宿る事も稀ではなかつた。
今でもカラブリア[2]山地の險しい斜面に立つ社の前で——
不實とは言へぬ感動に胸を一杯にして——
盗賊が足を止め祈りを捧げ涙を落す事もある。
假に最大限悪意に解釈したとしても——
騎士達の眼が涙で曇つてゐたといふ主張まで、
單なる繪空事と云ひ切れるであらうか。
　けれども、今日、吾等の時代に、
かのいや増すばかりの様々な幻滅が、
もしもタンクリッド[3]が知つてゐた以上の、

2〔カラブリア〕イタリア南部の地方の名。
3〔タンクリッド〕タンクレアウス（一〇七八?～一一一二）。第一回十字軍で活躍したノルマン人の勇士。

深刻な不安の温床をなしてゐるとするなら、
と云ふのも、岩山で身代りとなつて果てたクリストへの思ひが、
タンクリッドの場合、未だ絶望にまでは至らなかつたからだが、
もしもさうなら、タンクリッド以上に吾々には、
これら數多の忘れ難い塔の前で、
浮き立つ心を制すべく戒心してしかるべき、
重大な理由が存する、といふ事にならざるを得ない。
しかし、何ゆゑそのやうな事を？　そのやうな問題をなぜ今？
それは詰り、あの――如何にも十字軍の騎士にふさはしい――叙事詩が、
就中この地に於て、騎士の身體を飾る勇猛の印を投げ捨ててゐる以上、
そこに吾々は、道理の主張と、
恩寵への期待とを二つながら見出す事となるからだ。

第五章／クラレル

明くる日の朝まだき、
クラレルは寢床を離れ、イエスの墓に赴く。
教會のアーチ型の入口は如何にも古めかしく、
石門を飾る彫刻は、
摩滅が甚しく定かには解せぬが、クラレルはそこに、
「櫻櫚の主日」[1]のクリストの行進の圖を見る。
その日、クリストはベタニヤ[2]の村を發してもう一つの門へと——
かの金色に輝く勝利の門へと歩を進めたのであつた。

1〔棕櫚の主日〕イエスが受難を前にエルサレムに入城した記念日。イエスが通つた路上に群衆が棕櫚の葉を撒いてこれを祝福した故事に因む。

2〔ベタニヤ〕パレスティナの村。エルサレムに近く、オリーヴ山の麓にある。

かかる遺跡の聖廟への入口の装飾としては、
正に持つて來いの圖と云はねばならぬ。
誰しも喜ばしい氣持となつて不思議はない。
　クラレルは門を潛る。
異國の人々が集つて來てゐる。
アジアの灣岸や附近の島々からやつて來た、
ありとあらゆる階層の人々。「公現祭」[3]の柔和な客人達である。
　その昔、過越の祭[4]の喜びを祝ひ、
ユダヤの新年の最初の月を壽ぐべく、
ナザレの人々は神殿に參集したが、
その中にはヨセフとマリアの姿も、そしてまた、
母親の手をしつかりと握るかの「少年」の姿もあつた。同様に、

3〔公現祭〕一月六日、東方の三博士の來訪によつて象徴される、救世主の顯現を記念する祭。
4〔過ぎ來しの祭〕エジプトからの脱出を記念するユダヤ民族の大祭。

この地でもまた、家庭の中に信仰の炎を持ち來たらすべく、
子供連れの夫婦が、より新しい祭儀に加はつたり、
大事な祭壇の前に額づいたりするために、集つて來てゐる。
だが、クラレルは圓蓋の下で立止り、
「聖墳墓」の前に佇む。
開け放たれてゐる扉から、内側で燃えて輝く灯心が見える。
左右六脚づつの古いランプが、
クリストの使徒達のために晝夜を分たず燃えてゐる。
朦朧たる煙のせゐで、
ランプはどんよりとした光しか放つてはゐないが、
熱で温められた小房は見るからに蒸せ返るやうだ。
クラレルは思ひに耽ける、頗る飛躍した思ひに。
「頭から爪先まで、亞麻布で包まれた主の屍體の傍で、

輝ける衣を著たる二人の人が、寢ずの番をしてゐたといふ、[5]が、
これらのランプの燃え方に、そんな燦然たる趣きは無い。
――どう見ても無い、とすれば、主は逃げ去つて仕舞つたのか？
それとも、意識の無いままに横たはつてゐるのか、
ドーリア[6]の神々と共に、意識を持たず、嘆き悲しまれながら？
或はそれとも、新しく清らかに、
大氣中に撒き散らされた聖なる力は、
彼方の圓蓋を通り抜け、陽光の中に流れ出て行つたのか？
主は墓中に埋葬されてゐるのではなく、天と地と海の中に擴散し、
そこを靈の住處となしてゐるのであらうか？

5〔頭から～寢ずの番をしてゐたといふ〕新譯聖書「ルカ傳」第二十四章第一節～第四節の記述に基づく。
（「視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり」）

6〔ドーリア〕紀元前十二世紀頃、ギリシャに侵入しペロポネソスを征服して、ミケーネ文化を破壊した、先史時代ギリシャの四大種族の一。

虚妄なる汎神論だ、いかにも美しい、が、所詮、嘘の皮でしかない！」
彼はそんな風に思ひ、やがて緩漫に當もなく歩き出す。
もつれ合ふ數多の疑團を、解きほぐす術を知らないのだ。
日差を遮る柱の陰で一息ついてゐると、
修道士の姿が眼に止まる。青色の長衣を纏ひ、
ギリシャ風の色の丸帽を被り、
見窄らしい一團を引き連れ、いかにもせはしない様子で、
順序も何も構はずに、
彼方此方と、
手當り次第の場所を引き摺り回してゐる。
今、クラレルが襲はれてゐる、
頗る慴然たる心持は、或は例の、
新奇なものを目にして受ける衝撃の、しからしむる處なのではあるまいか？

ペテロの教會[7]の神秘的な雰圍氣は、
初めて接した新教徒をして、
甚だ憂欝な氣分に陥らしめる事があるといふ。
クラレルにも覺えがある、ローマのラテラノ聖堂[8]の外壁の麓で、
かの「聖なるきざはし」[9]を見上げてゐた時――信者達が、
罪の赦免を獲得すべく、
一段ごとに低い聲で祈りの言葉を呟きつつ、
階段を登つて行く膝の動きを、彼は凝視してゐたものだつた。
否、新奇な經驗なんぞが原因なのではない。
それにまた彼の萎縮した心持は、
修道僧の邪險な態度に起因するのでもない。

7〔ペテロの教會〕バチカンのサン・ピエトロ大聖堂。
8〔ラテラノ聖堂〕ローマ司教としての教皇の大聖堂たる、ラテラノの聖ヨハネ大聖堂。
9〔聖なるきざはし〕ラテラノ聖堂の北側にある、白い大理石の有名な階段。イエスがピラトの裁判の部屋へ行く時、昇つたものと云はれる。

それらとは別個の影響が、クラレルをして混迷に陷らしめ、
より深層の神經を苛立たしめてゐるのだ。
彼は踵をめぐらし、惑へる心を抱きつつ歩を進め、
やがて閑寂な禮拜堂に辿り着く。誰かが禮拜堂の名を口にする。
それによつて呼び起される聖書の短い一節は、
この場の前後の脈絡をより明瞭ならしめるかもしれない。
その一節とはかうである。吾等が主は或る園の中に葬られたが、
緑なす園の中に主は再びその姿を現したと、
マリアが主張してゐるといふのである。[10]
その場所が、もしくはさう主張されてゐる場所こそが、ここなのであり――
緑の木陰は今や石造りの圓筒形天井と化してはゐるが――
それゆゑここは、「出現の禮拜堂」と名附けられたのであつた。

10〔マリアは主張してゐる〕新約聖書「ヨハネ傳」第二十章第十八節參照。（「マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言ひ給ひしと告げたり」）

今、名状し難い心を抱いて、
クラレルが歩み來つたこの當の場所で――
灰色の拂曉の空氣の中に、
蒼白の顔面を前夜の涙で濡らしつつ、
復活せる第二のアダム[11]が佇んでゐたのであつた――
エデンの大地を踏みしめてゐた、かの第一のアダムの淫淵たる姿とは、
正に似ても似つかぬ様子で。しかも、欝蒼たる木立と、
未だ明け切らぬ黎明のほのかな光に包まれたクリストの姿を、
マリアは園守と見誤るのだが、
彼女の女の心は、
深い樹陰に覆はれた埋葬の地にクリストの姿を求めて、

11〔第二のアダム〕イエスの事。new Adam とも云ふ。新約聖書「コリント前書」第十五章第四十五節、第四十七節參照。（「録して始の人アダムは活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは生命をふる靈となれり」、「第一の人は地より出でて土に屬し、第二の人は天より出でたる者なり」）

深更までも休む事を知らず、それでも見出し得ずにゐたのであつた。
正にこの、人々の祈りの込められたこの地で――
クラレルの辿り着いた祀堂の傍で――
一輪の花輪がかぐはしい薫を放つてゐる。心を慰められる光景だが、
そこに屯する見窄らしいギリシャ人達の心は一向に引立たない。
なにしろ、彼方此方と歩き回つた擧句の果に、長い旅路に疲れ切つた心と體を、
城外のこの聖なる地までやうやく運んで來たばかりの連中なのだ。
旅の疲れの甚しさに、もはや跪く姿勢を取る氣力すら無く、
前夜から身體を横たへてゐたのだが、
女や子供達は未だに元氣を回復出來ずにゐる。
そして總ての表情のそれぞれが、
一卷の失望の書物たる事を物語つてゐる。「をんなよ、何ぞ泣く？
誰を尋ぬるか？」[12]――クラレルの胸に、

12〔誰を尋ぬるか？〕新約聖書「ヨハネ傳」第二十章第十五節參照。

ふと、これらの言葉が浮かんで來る。彼はそれを、
眼前の人々に當て篏めてみる。が、それは殆どそのまま、
己れ自身にこそ向けられるべき言葉であつた。彼はその場に佇みながら、
やがて一團の上に降り掛かるかも知れぬ出來事の全てを、
心に思ひ描いてみる。
貧しく疲れ切つた彼等は——
血の氣の無い顏で巡禮船に詰め込まれ、
今、遙かな故鄕を目指し歸航の途に就いてゐる。
眞夜中に至つて凄じい嵐となり——
聖パウロを襲つたやうな嵐だ[13]——死に物狂ひで格闘するが、
如何せん、船を巧みに操る術を知らない。
舳先にしつらへられた社の中で、
絶え間無く燃え續けてゐたランプも今は光を消し——

13〔聖パウロを襲つたやうな嵐〕新約聖書「使徒行傳」第二十七章參照。

最後まで微かな光芒を放つてゐた天の星と共に、闇の中に吸ひ込まれて仕舞ふ。
恐怖が人々の心を支配する。船の針路が變更され、
彼等はツロ[14]に向つて突き進む――位置を目で確める事も出來ぬツロに向つて。
しかもそこは、色の抜け落ちた難破船の數々が岸壁を塞ぎ、
灣曲した船材には海鷲が止り、鋭い鳴声を立ててゐる様な海岸なのだ。
　穏やかな日よりに故郷の島々を船出した折、
彼等は如何に希望に胸を膨らませ、また如何に優しい氣持で、
旅の行末を思ひ遣つた事か。やがて、様々な苦勞を舐めた後、
再び船上の人となつた。だが、疲弊し切つてゐはしても、
悲嘆に暮れてはゐなかつた。なにしろ、シオン[15]の地を己が目で確めたのだ。
彼等は皆その内懐に、椶櫚の葉で包んだ經文を、
護符として大事に仕舞つてゐた。

14〔ツロ〕古代フェニキアの海港。古代の大都會の一つ。紀元前十世紀頃、東西貿易で最も繁榮した。現在のレバノン南部の町スールのある邊りに位置してゐた。
15〔シオン〕ユダヤ民族の祖國。イスラエルの地。

けれども、この人々を、ああ、拂曉の薄明りの中に、
ツロの岸邊に眠るが如くに横たはる人々の様子を見るがいい！
果してそれは唯の眠りなのか？ 否々、それこそは正に死の眠り——
何ものも斷じて掻き亂し得ぬ死の眠りに他ならない。
いつしか夢想は夢想を誘ひ、
やがてクラレルの腦裡に、脊の高いイスラムの女が御輿に乘つて、
ダマスカスの城門を練り出して行く光景が浮かんで來る——
御輿を載せてゐるのは、駱駝の中の王者たる、選り拔かれた駱駝だ。
無數の銀の玉の附いた、絹糸で緣取られた飾り布が、
駱駝の胴體からなだらかに垂れ下り、御輿の中の、
コーランを納めた箱とそれを覆ふスルタンの布の模樣の上には、
謎の文字が縫ひ込まれてゐる。
付き從ふトルコの騎兵の一團の立てる物音が、
クラレルの耳に響いて來る。
荒々しい太鼓の音、叫び聲、銅羅の音。

續いて駱駝の隊列がやつて來る――
その背に跨る族長達の長衣と肩掛け――
そして族長達のそれぞれが、神像よろしく、
淺い顔をして駱駝の上に胡坐をかいて坐つてゐる。
しかもまた、時候も時候とて、彩りも豐かな風景を背に、
イスラムの貴族の騎馬隊が優美にクルヴェット[16]で進んで來る。
偃月刀や長槍が閃き、
草緑色の美しい槍旗が、
（風にそよぐフェイラン[17]の櫻櫚の如く）林立し、
一際高く銀白色の新月旗が翻る。
それに續くはレヴァント[18]の沿岸から集まつて來た、
亂雜で騒然たる群衆だ。

16〔クルヴェット〕馬の騰躍。前脚が地面に著かないうちに、後脚から躍進する優美な跳躍の仕方。
17〔フェライン〕シナイ高原にあるオアシス。
18〔レヴァント〕ギリシャからエジプトまでの地中海東部沿岸諸國地方。

徒歩の者もゐれば、驢馬に跨つてゐる者もゐる。
珍奇ながらくたを振り分けの荷籠に積み込んで、
家族總出で繰り出して來てゐる。富者も乞食も、皆が皆、
アラーの加護をいとも無邪氣に信じ切り、
豫言者の墓と聖都とに、
心からなる崇敬を寄せ、
今まさに巡禮の旅に勇んで赴かんとしてゐるのだ。
　けれども、道のりは甚だ遠い。やがて彼等は、
緑なす廣々とした郊外に到る。それを通過し終へぬ裡に、
さして遠からぬ行手の野に天幕の集團が見えて來る。
いかにものどかで心を惹き附けられる光景だ。
子供が踊り上つて喜びに震へる聲で叫ぶ。
「メッカだ。お母さん、見て、メッカだよ！」
　けれども、まづ母親が思ふのは、

かの「シムーム」[19]が疾風の如く突き進む曠野の事だ。
そこでは死人達の白いあばらの隙間から、
細かい砂がこぼれ落ち、その先にぼんやりと、
あたかも行手を指し示すかの如くに、
延々と横たはる駱駝の白い骨が見える。
一部のみ砂に埋もれた人間の骨――
それは友も無く斃れた人々の殘骸であり、
彼等は最後の責務を果たすべく、己が手で己が身體に、
砂を振りかけんとしたのだが、遂に果たせず事切れたのであつた。
恐るべき砂漠、その恐しさは、聖書に言ふ「大なる畏しき曠野」[20]、

19〔シムーム〕アラビアや北アフリカの沙漠地方で砂を卷いて吹く熱風。
20〔大なる畏しき曠野〕舊約聖書「申命記」第一章第十九節、第八章第十五節參照。エジプトを脱出したイスラエルの民が、彷徨するうちに通つたシナイ半島北部の荒地。十九世紀には「エル・ティ」（次行）といふアラブ名で知られてゐた。

即ちかの「エル・ティ」[21]すら凌駕するものと云はねばならぬ。
聖都と墓を目にする前に、
人々の多くは倒れ、命を落す定めにある、
それなのに彼等は、日没の刻限が迫るや、
時を違へず祈祷の用意をなし、擦り切れた膝敷を砂上に廣げ、
メッカの石の方向に向き直る。
ミイラよろしくひからびた大地に、
斜めに不吉な影を落しつつ。
彼等も通り過ぎて行く。その姿も消える。さて、次に近附いて來るのは？
今度は黄褐色の農民の群だ――インドの大地を、
繁殖と埋葬の地たるインドの大地を、
年毎にうねりつつ進む人間の波。
ターバンの大波が平原を浸し、

21〔エル・ティ〕註（20）参照。

ブラーマ[22]を祀る靈驗あらたかな神殿に――
コンポステラ[23]もしくは褐色のロレト[24]の聖堂の類に押し寄せる。
そこでは罪の赦しが云ひ渡され、悲しみも忘れ去られる。
けれども、大半は悪疫の餌食となり、苦しみ衰へ、
土氣色になつて花咲く水邊に倒れ伏し――
停止して、いなごと眠りを共にするか、
或は息絶えて、なんぴとも覗き込み得ぬ場所に纏めて葬り去られる仕儀となる。
　それらの幻影も消え失せる。やがて遠くから風に乘つて、
幾時代も昔の物音が聞えて來る。
支那の僻遠の城塞から續々と繰り出して行く人々の群、
かの「モンゴル人の敵」とも[25]、

22〔ブラーマ〕ヴィシュヌ、シバと共に、ヒンズー教の三大神の一。創造を司る神。
23〔コンポステラ〕使徒ヤコブの墓所と云はれるスペインの有名な巡禮地。
24〔ロレト〕聖母マリア信仰で知られる大聖堂のある、イタリアの有名な巡禮地。
25〔モンゴル人の敵〕釋迦の事。

「インド人の救ひ主」とも稱せられた、
ゴータマ佛陀の社殿や遺物の前にひれ伏すべく、
ヒマラヤの山嶺を越え行かんとしてゐるのだ。一體いかなる奥深い衝動が、
かかる行為へと驅り立たしめたのか？
有為轉變こそ世の習ひでありながら、
驚くべくかつ畏るべきは、
宗教宗派の世を通じて變らざる相互交感の姿であつて、
互ひに斥け合ひいがみ合ひしてゐるかのやうに見えて——
實はいづれも高揚せる思念や卑遜なる夢想の虜となつてゐる。
　そんな考へに耽つてゐるクラレルの姿に、
やつれたギリシャの婦人達が目を留める。お若い方、
吾等と同じ疲勞を感じてをられるやうだが？　巡禮への想ひに迷ひが生じ、
故里が戀しくなつて來たのでは？ やはり汝もこの旅に倦いたのか？——
　イヴならではの惻隱の情といふ奴だが、
見當違ひも甚しい。が、それも道理、かの複雜極まる情念が、

これらの純朴かつ正直な人々の心中に、
どうして芽生える事があらうか？　荒れ狂ふ嵐に翻弄される不安が、
目くるめく虚構の深海に己を見失ふ精神の戰慄が、
どうして理解し得るであらうか？

第六章／種族と宗派

クラレルは踵を返して歩み去らうとする。が、ふと歩みを止めて立ち止まる。
競ひ合ふ様々な宗派の祈祷の聲が、
ヨルダンの森の洞窟のやうなそこかしこの禮拜堂から、
幾通りもの調子の旋律をなして聞えて來たからだ。
それらの聲は圓蓋をどよもし、
忍苦の色を浮かべる「聖墳墓」の一帶に鳴り響き、
通路といふ通路を突き進む。
グルジャ人にアルメニア人、
マロン教徒[1]に血氣盛んなギリシャ人、
それぞれの禮拜の聲にカトリック教會のパイプ・オルガンの音が混り合ひ、

1〔マロン教徒〕レバノンに多いカトリック教會の一派。

更にまた淺いアビシニア人が頬と頬とを摺り寄せながら、
シンバルを荒々しく打ち鳴らす。
全音響がさながら一つの大潮流のごとく驀進し、
互ひに互ひの主張を競ひ合ふ。
　片言でも知り得たならば、空想の力を頼りにクラレルにも、
彼等の主張への理解の端緒なりとも掴む事が出來たであらうか？　とまれ、
旋律は全て呪詛の叫びを放つてゐるやうにクラレルには思はれた。
對象はクラレルその人に他ならない。おう、穢れた心よ、
おう、不信心な巡禮者よ、立ち去るがいい！
「信仰」の地の神聖を穢してはならぬ。
汝の心底は見えてゐる。吾々が偽りの神を祭り上げ、
出鱈目な神話を捏造し、その下らなさたるや、
ユピテルに纏はる戯言同然、いや、なほ悪い、
イスラムの畜群どもの嘘八百さながらだと、さう云ひたいのであらう。
吾々は汝を知つてゐる、そこに黙して佇んでゐる汝といふ男の正體を。

立ち去れ――立ち去るのだ！　超自然をさまで空虚と思ふのなら、
「自然」の王國を試すがいい。
キドロン[2]のき谷を經てロトの海[3]にさまよひ行け。
セイル山[4]を越えエドム[5]を通つて進むのだ。
そこでジャッカルと共に蹲り――
蠍の慰めを冀ふがいい！
以上は空想のなせる業、思ひ亂れた空想が、
自らも半ばしか信じてをらぬ非難の織物を織り上げたのだ。

2〔キドロン〕パレスティナ中部、エルサレム東方にあるヨルダンの峽谷。そこから發する小川は死海に注ぐ。
3〔ロトの海〕死海の事。ユダヤ民族の始祖アブラハムの甥ロトは死海のほとりの都市ソドムに住んだ。
4〔セイル山〕死海南方の山。
5〔エドム〕死海とアカバ灣との間の古代の地域。舊約聖書「エゼキエル書」第三十五節第十章に「セイル山よ汝荒地とならんエドムもすべて然るべし」とある。

クラレルは出口に近附く。合唱の聲音が大きくなる。
追ひ拂はれたる者のごとくに彼は出て行く。
　けれども、歩み去りながらも彼は思はざるを得ない。
しばしばこの地に生じる諍ひを、
聖地を繞る爭ひや、
慈悲の心とは遠く隔たる妬み嫉みの數々の例を。
正にいがみ合ふ遺族さながらの為體、とするなら、
人間同士の確執こそが、「あの方」が遺した遺産であつたのか？

第七章／城壁の彼方

往來に出ると沈黙が一帶を領してゐる、
まるで「自然」の孤獨な靜寂を模するかのごとくに。
家々の窓は數が少い上に格子の奥深く隱れてをり、
しかも人間の頭上を遙かに越える高所に設けられてゐるために、
外から覗き込む事も聽き耳を立てる事も叶はぬばかりか、
自らを内側に嚴重に閉ぢ込めてゐる、
かの不可解なる罪と無垢の姿について、
漠然と推し測る事すら許されない。
がつしりした石壁のくぼみの奥に戸口がある。
隣家の戸口との間は大きく隔たり、
薄汚れてずんだ有様はバスティーユの牢門を思はしめる。
何一つ動かない。ただ時折、影法師が往來を横切り、

手に持つ鍵を音も無く鍵穴に差し込み、
家の中に消えて行く。
朽ちて砕けた岩石の上で、
萎れて埃にまみれたヒソップ[1]が、
乾いた空氣に煽られてゆつくりと搖れてゐる。
昔、或る大いなる豫言者[2]は、
眞理の到來を豫告する頌歌[3]の中で、
新郎・新婦の聲なんぢの中に聞えざるべしと語つたが、
今、眼前に見る光景こそは、
さうして語られた通りの光景なのかもしれぬ。

1〔ヒソップ〕昔、ユダヤ人が拂ひの儀式にその枝を用ゐたと云はれる。薄荷の一種。舊譯聖書「出エジプト記」第十二章第二十二節他參照。
2〔或る大いなる豫言者〕新約聖書「默示録」第十八章參照。
3〔眞理の到來を豫告する頌歌〕「默示録」第十八章參照。

もの云はぬ壁や小道――
なほも重苦しい雰圍氣を漂はせつつ、
虚しくも傲岸に聳え立つ塔の數々、
クラレルの苦惱する心はそれらに激しく苛立つたが、
やがて彼はヤッハ門[4]に向ひ、そこを抜け、
足の赴くままに、ほの暗い道を歩いて行く。
道筋に人家は一軒もない、あるのは、人間の最後の住處たる、
かの細長い窮屈な家々ばかり。そこにはトルコ人が眠つてゐた。
けれども、クラレルは關心を示さない。
彼は或る考へに没頭してゐた。
「イエスはユダヤ人として生涯を過した。それなら、このユダヤの地に、
彼の命の息は未だ滅びずに殘つてゐるのであらうか？　まさか、そんな事が。
それにしても、この地こそは一番はつきり解る場所なのではあるまいか、

4〔ヤッハ門〕エルサレムの西側にある門。

確たるものは何一つ存在しないのかどうかといふ事が」。
と、突然、彼は思ひつく。
「さうか、これはエマオ[5]に行く道だ」。
忽ち彼の腦裏に『ルカ傳』の一節[6]がよみがへる。
あれは心の迷へる二人の弟子が、
正に今の俺と同じやうに、この道を歩いてゐる時の事だつた、
二人は甦つた主の姿を見（その時は未だ主と氣づかなかつたが）、
主の明快な言葉を聽いて、心の内が激しく燃え上つたといふ。
その一節にクラレルは異様な共感を覺え、
心の内にかう叫ぶのであつた——
ああ、俺にも、この俺にも、そんな出逢ひがないものか。
見知らぬ賢者が俺の前に現れて、

5〔エマオ〕エルサレムとヤッハの中間にある町。
6『ルカ傳』の一節〕新約聖書「ルカ傳」第二十四章第十三節～三十五節參照。

俺の表情から、
俺の歩みを妨げる言葉にならぬ想念の數々を讀み取り、
俺に質問し、説明し證明し、
擧句の果に、俺の心を愛の炎で燃え上がらせてくれる――
ああ、そんな夢のやうな出來事が、今、起つてくれたら！
　クラレルは面を上げる、すると、彼の目にぼんやりと、
あたかも彼の願ひに應へんとでもするかのごとくに、
一人の男が近くのなだらかな丘の頂を越えて、
靜かにゆつくりと近づいて來る姿が映る。
男は更に近づいて來て、
澄み切つた青空を背にくつきりとその姿を現す。
そして――シリア風の魅力を湛へたその姿に――
クラレルはあたかも男が靜かに澄んだ大氣に包まれながら、
天上から立ち現れて來たやうな、
そんな錯覺を抱くのであつた。

男は深い皺に歳月の重荷の跡が刻まれてゐる、といつた類の老人ではない、
素朴な心が老ひの波によつて淨められ、
高められてゐる、そんな印象を與へる老人である。
虚しく精力を費しながらも、彼の心は目に見えぬ穩やかな信仰に――
パウロのいはゆる「見ぬ物を眞實とする」[7]信仰に、
しつかりと支へられてゐるやうに思はれた。
杖は持たず、ただ片手に、
一册の書物を携へてゐた。
クラレルと目が合ふと、穩和な眼差の中にかすかな驚きを浮べながら、
氣持の良い挨拶をした。
が、相手の落ち着かぬ表情に氣づくや、突然の出逢ひであるにも拘らず、
しかも相手の意中を忖度せんとするよりも先に、

7〔見ぬ物を眞實とする〕新約聖書「ヘブル記」第十一章第十一節に「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり」とある。

心配と不安の念を面に表しながらかう云つた。
「クリストにおける若き友よ、如何なる思ひに惱まされて、
そんな暗澹たる顔附をしてゐるのか？　手引がなくては叶はぬ場所を、
手引もなしにさまよつてゐるのか？　もしもさうなら、私が手引を進呈しよう、
さあ、友よ、お取りなさい、この書物を」。
　クラレルは呆氣に取られながら、
男から書物へと視線を移す。如何にも古びてゐて、
風雪の歴史をまざまざと物語る書物――
あたかも、昔、失望の裡に沈める蒼白の詩人[8]によつて、
朽ちるがままに打ち捨てられたかの卷物を思はしめる。
リビヤに赴かんとする旅人に、彼はかう命じたといふ、

8〔失望の裡に沈める蒼白の詩人〕ジョン・キーツの事。死の床でキーツはスコットランド人探險家ジョゼフ・リチーに、『エンディミオーン』をサハラ砂漠で投げ捨ててくれと云つたといふ。

投げ捨ててしまへ、そんなものは、廃滅こそがふさはしい卷物だ、
さうだ、そこに打ち捨てて、朽ちるがままに任せるがいい。
　クラレルが答を返さうとするより早く、
見知らぬ男は再び書物を差し出した、
書物の正體が解つた、聖書であつた。
クラレルは男の側に近寄つて訊ねた、
「一體あなたは？」
「罪人ネヘミヤ」。

第八章／信仰の人

罪人とな？――ユダヤ人街の路地裏に久しく滯留してゐるといふ、
老いたる聖者はさう云つた。
彼はかの信仰に和する念甚だ篤く、
その昔、ナラガンセット灣岸[1]の居宅を去り、
爾來、そこには一度も戻らず、
死を間近に控へた歳月を、
打ちひしがれた無私の心から屡々生じる、
熱狂家の生き方に委ね、
さうして心に平安を見出してゐた。
　過ぎし日の彼の煩悶など誰も本當に知る事は出來ないし、

1〔ナラガンセット灣〕米ロードアイランド州ナラガンセット灣。

それは容易に推し量れるものでもない。
が、それについて思ひを巡らしてみるのも無駄ではない。
と云ふのも、隱者だの漂泊者だのといつた連中は、
己が心中の苦しみやそれに纏はる思ひ出などを、
秘して見せまいとするのが通例だから。とは云へ、さういふ苦しみがあればこそ、
人の世のありとある苦惱への常ならぬ感覺を彼等が養ふに到つた以上、
それら秘せられた苦惱について、當の彼等より巧みに説明するなどといふ事は、
それを分ち持たぬ吾々の良くなし得る事ではあるまいが。
とまれ、何の為に？　何を願つて？　何處に赴かんとしたのであつたか？
聖ヨハネの語りしかの緑柱石の門[2]の他に、
期待の門は何處にあつたか？
それが開くと、奥からクリストが進み出で、
本來の權威を恢復し、

2〔緑柱石の門〕新約聖書「黙示録」第二十一章第十節～二十七節參照。

地上は再び樂園になるといふのだが。
豫言の言葉を彼ネヘミヤは知つてゐた。
シオンの地は恢復され、ユダヤの民はクリスト教に改宗し、
この地に復歸し、汗と涙もて荒地を耕し、
しかる後にクリストが再臨する、といふのである。
既存の教團から免状などを貰つた譯ではない。
案を練る時も行動する時も一人、
しかも見込みの薄い方法に全てを賭けて、
小冊子を配りつつあちこちをさまよひ歩いたのだ。その小冊子には、
昔、ユダヤの律法學者が、かのタルソス[3]の人パウロの遍歴の地たる中東に於て、
その眞なる事を立證した聖句が納められてゐた。
かかる心根こそは聖者のそれと讃へられて然るべきであらうが、
さういふ敬虔を辱しめる不當な夾雜物もあつた。

3〔タルソ〕トルコ南部の都市。聖パウロの生地。

スミルナ[4]の市場で（ヤツハの岩棚[5]へ赴く船を待ちながら、
そこに滞留してゐた折）ネヘミヤが人混みの中を通つた時、
クリスト教徒は彼にうるさく附き纏ひ、
悪たれ共は群なして彼を取り圍み、嬲りものにし、
彼の抱へる小冊子は、あたかもかの「五旬節の日」[6]の「火炎の舌」[7]さながらに、
てんでにはためきながら宙を舞ひ踊つたのである。
　クリストの第二の盛時を卜したといふ、
かの敬虔なる見幻者の書物を彼は熟讀玩味し、

4〔スミルナ〕小アジアの港市。
5〔ヤツハの岩棚〕スミルナの町の端から海へ延びる岩棚の名稱。
6〔五旬節の日〕ユダヤ教徒の逾越の祝ひの二日目から數へて五十日目。モーゼがシナイ山で立法を授けられた日として祝ふ。
7〔火炎の舌〕新約聖書「使徒行傳」第二章第一節～十三節參照。（「五旬節の日となり、彼らみな一處に集ひ居りしに、烈しき風の吹きたるごとき響、にはかに天より起りて、その坐する所の家に滿ち、また火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人のうへに止まる」。）

己が石版の上で、
神秘にして崇高なる期日を算出せんとし、
遂に「一時と二時と半時とを經るまで」[8]の謎を解明し得たのみならず、
更なる啓示をも得たのであつた。
だが、さういふ彼は老いさらばへた身を衆目にさらしつつ、
弱々しげに他人のそばに歩み寄り、
晝夜の時刻を幾度となく尋ねる老人でもあつた。
けれども、彼は如何にして暮し、何を糧となしてゐたのか、
その事については、鴉と天使[9]の他は殆ど誰も、
何一つ知りはしなかつた。彼の祖末な着衣は、

8〔「一時と二時と半時とを經るまで」〕舊約聖書「ダニエル書」第七章第二十五節參照。（「かれまた時と法とを變へんことを望まん聖徒は一時と二時と半時を經るまで彼の手に付されてあらん」。）

9〔鴉と天使〕舊約聖書「列王紀略上」第十七章第二節～六節參照。アハブ王の時代、エホバが預言者エリヤに云ふ、「爾此より往て東に赴きヨルダンの前にあるケリテ川に身を匿せ。爾其川の水を飲むべし我鴉に命じて彼處にて爾を養はしむと」。）

正に奇跡としか思へなかつた。
砂漠をモーゼと共に巡り歩いた、
かの流浪の一團の衣服もかくや、と思はれるばかり。
彼等は四十年間といふもの、すなはち、新緑が地上を彩り、
新しい羽毛が鳥の装ひを變へるのが四十度も繰り返された間に、
たつた一着の衣しか身に附けなかつたといふ。
しかし、彼が故國を離れて以來、着た切り雀のその衣服は、
無骨な田舎者の手になるもので、色こそすつかり抜け落ちてゐたが、
まだまだ露や日差を遮る用をなすのであつた。
　この無害な放浪者の、
小振りで柔和な顔附や、灰色の着衣などは、
ラテン、アルメニア、ギリシャ、ユダヤの人々には馴染みであつた。
彼等はネヘミヤの裡に土としての人間を見出したのだ。
トルコ人はそれ以上の理解を示した。道を通して差し上げるがいい、
あの方はアラーの嘉し給ふ聖なる御方、

サントン即ちイスラムの聖者なのだから。
かくて彼に輕侮の矢を放つほど偏狹な者は一人としてゐなかつた。
それも道理、拗ね者の手合が何を云はうと、また、何を云ひ得ようと、
人間は宗派の纏ふあらゆる形式を通じて、
罪なき者には崇敬の念を寄せるのだ。
さういふ次第で、危險な目に遭ふ事も無ければ、人に狙はれるといふ事も無く、
勇猛なターバンの間を縫つて、彼の帽子は自在に歩き回つたのである。

第九章／聖者と學生

「さあ、お取りなさい、クリストに於ける友よ」、さう云つて、
彼はまたその書物を差し出した。その間、
夢見るやうな老人の虚ろな眼は、
何やら浮かび漂ふ幻影を眺めてゐた。
（或は空にたゆたふ天の縁邊でも眺めてゐたのか。）
あたかも彼は現し世の人間の姿を見ずに、
霞の如き靈の群像の姿のみを見、
クラレルもその一個の成員に過ぎぬ、とでも考へてゐるかのやうだつた。
「これを讀んでみるといい。旅歩きをしてゐる者には、
とても親切な手引です。これ以上のものはない。
信仰が導く場所は、
この中に必ず記されてゐる、他の事柄と一緒にな。

これを讀めば、ベウラ[1]の野に至る道も、
新しきエルサレムに至る道も解るのだ」。
「知つてゐます」とクラレルは云つた。「その手引の事は、私も」。
さう云つて、しばし苦い氣持で考へ込み、
やがて老人の方に向き直ると、驚きかつ怪しみながら、
老人の様子を再び仔細に觀察した。
混亂した様子で、老人は額に皺を寄せた。
「してみると、あなたは巡禮者なのか？」
いとも素朴な質問、が、それがクラレルの心に、

1〔ベウラ〕イスラエルの輝かしい未來を象徴する地名。舊約聖書「イザヤ書」第六十二章第四節參照。（「人ふたたび汝をすてられたる者といはず再びなんぢの地をあれたる者といはじ却りてなんぢをヘフジバ（わが悦ぶところ）ととなへなんぢの地をベウラ（配偶）ととなふべし」。）

素朴な聖者なんぞの窺ひ知り得ぬ想念を醸し出した。
神の御召しを逃れて來た吾身を顧み、
彼は自らにかう問ひ掛けた。今の俺は、錯亂した心に驅り立てられて、
聖なる教義を學んでゐた昔の俺から、
遙か遠くに來て仕舞つたのであらうか？
きつぱりと彼は答へた。
「私はただの旅行者――それだけの者です」。
「それなら、ついて來るがいい、良い道連れだ。
サレムの地理なら、私は良く知つてゐる。
案内して差し上げよう、これを手引に」。
過つ事などあり得ない手引であると、請け合はうとでもするかのやうに、
老人はその書物をしつかりと手に持つた。
「さあ、來るがいい。私は放浪の旅に出る度に、
いや全く、仕事に精を出す場所ではどこでも、
それがサレムの路地裏であらうが、

遠く離れた薄暗い渓谷の谷底であらうが、
決まつて誰か通りすがりの者に遭ふ。
だが、あなたには、私は遣はされたのだ。されば、漂白の旅を共にし、
愛の巡禮袋を分かち合はうではないか」。
　輝かしさなど微盡もない老人の姿だつたが、
聖者さながらの謎めいた様子に學生は心を奪はれ、
その原始的な信仰への尊敬や、
親切な言葉への感謝の念などもあつたし、
それにまた、全ての道を知つてゐる老人は、
意氣沮喪してゐる自分を助けてくれるに相違ないと、
そんな風にも考へて、老人の誘ひに從ひ、
先刻の思ひへのかすかな慰めを見出したのであつた。

第十章／漫歩

日々は飛ぶ様に過ぎて行く。歴史に名高い大地を二人はさまよふ——
夥しい數の呪はれた遺跡の地、
そこでは、數多の廢墟が重なり合ひ、篏り合ひ、被さり合つて、
重疊たる廢墟の層をなしてをり、
そのそれぞれが、何時の世の、何を記念し、誰と關はりのある遺跡なのか、
それを識別する事も覺束無い。
ホスピタル騎士團[1]の修道院は、
再建される事もなく廢墟の中に無慘な姿を曝してゐるし、
その下にはファーティマの宮殿[2]が粉々になつて横たはり、

1〔ホスピタル騎士團〕第一次十字軍時代にエルサレムで起つたヨハネ騎士團。當初、傷病者の加療を目的としたため、さう呼ばれる。

2〔ファーティマ〕モハメッドの娘の一人。イスラム教徒の間で範とすべき女性とされる。

更にその下にはヘロデ[3]の支配の崩壊の跡がある――
しかもその下にはマカバイ[4]の建てた神殿があり、
それもまたダビデ王の榮光の記念の跡に建てられた。
そしてダビデもまた、エブス人オルナン[5]の打場や、
遙か昔の狩人達の宿營地の跡に王宮を建てたのであつた。
正に、「氷河の海」の幾層もの水位の跡を今に留める、
グレン・ロイ溪谷[6]の地層もかくや、と思はれるばかり――
喜悦から遠ざけられたこの廢墟の地には、

3〔ヘロデ〕（紀元前七三?～四）ユダヤの王。新約聖書「マタイ傳」第二章參照。
4〔マカバイ〕紀元前二世紀のユダヤの愛國者。シリア王の支配からユダヤ教團の政治的宗教的自立を勝ち取る。
5〔エブス人オルナン〕エルサレムの地にあつた古代都市エブスに住むカナン人をエブス人といつた。オルナンについては、舊約聖書「歴代史略下」第三章第一節參照。（「ソロモン、エルサレムのモリア山にエホバの家を建てることを始む彼處はその父ダビデにエホバの顯れたまひし所にて即ちエブス人オルナンの打場の中にダビデが備へし處なり」。）
6〔グレン・ロイ谿谷〕スコットランド北西部の谿谷。

緑したたるオアシスなんぞ見出し得べくもない。
モリアの山の頂にはアラーを祀る神殿があり、
庭園を彩る樹木や芝生を、
近傍の家屋の屋上から眺める事が出來る。
が、山麓には偏狹な顏附のいモーリタニア[7]人衞兵がゐて、
近附く者に嚴しい監視の目を向けてゐる。それにしても、
土くれと廢墟以外に、クリストの支配を示す生ける印は、
何ひとつ殘らなかつたのであらうか？
二人にはさうとしか思へなかつたであらう、
かつてはボードゥワンの神聖な領土を飾る寶石でもあつた、
かの崩れかけた社、かの「悲しみの聖母[8]」の御堂の中にゐた時には。

7〔モーリタニア〕アフリカ北西部の古王国。現モロッコ及びアルジェリアの一部。
8〔「悲しみの聖母」の御堂〕ノートル・ダム・デ・ドゥレール。イエスが十字架に掛けられた時、マリアが立つてゐたとされる場所にある小さな禮拜堂。

だが、オペルのつづら折の坂[9]を降り切るとすぐ、
小綺麗な場所に二人は出た。
小さな水路で潤されてゐるその場所は、
ソロモン王の庭園と名附けられてゐるのだが、
今はカリフラワー畑になつてゐて、
市民の臺所の必要を滿たしてゐる。
二人が遠くからこの場所にやつて來ると、
聖者が低い聲でこんな言葉を繰返した。
「アドニヤ、アドニヤ――
ゾヘレテの躓きの石」[10]熱にでも浮かされてゐるのかとクラレルは思つたが、
さうではなかつた。
ネヘミヤは聖書の或章を指し示し、

9〔オペルのつづら折〕エルサレム南東端、城壁の外側にある坂。
10〔「アドニヤ、アドニヤ――ゾヘレテの躓きの石」〕以下の九行は舊約聖書「列王紀略上」第一章の記述に基く。アドニヤはダビデ王の子、ソロモンの兄。ダビデの後の王位をソロモンと爭つて敗れる。

そこに記されてゐる物語を説明した。
遙か昔、野望の虜となつた或王子が、
詰りこのアドニヤが、ゾヘレテと名附けられた石の傍で、
己が陰謀に加擔する者等を招いて宴會を催した。が、
その時、ソロモンが王となる事を告知する喇叭の音が鳴り響いた。
アドニヤは愕然とし、顏面蒼白となり、
一座の者もみな激しく狼狽したといふ。
　深い谷底を思はせる様な低地から、
二人がまた險しい坂を斜めに登つて行くと、
祕密めいた雰圍氣の漂ふ汚らしい高臺に出た。
狹く、ひつそりとしてゐて、頗る殺風景な野原。
師が低い聲で云つた。「朝早くここに來ると、
ある印が見える」。クラレルは傍に寄つて、
「どんな印が?」と訊いた。ため息を吐きながら師は答へた。
「朝の神聖な視線を恥ぢて、

野原は朱に染まるのだ、餘りに恥づかしうてな」。
　聖者の異様な空想とその態度に驚いて、
クラレルは暫く彼を見守つてゐた。
やがて鈍い赤味を帶びた土が彼の目に入り、
しかも何やら薄汚れた物に氣附くと、
心は忌はしい氣持で一杯になつた。
朽ちかけた納骨堂が寂しくそこに建つてゐた。
半ば地に埋れ、天井は陷沒し、壁には龜裂が走つてゐる。
そして、クラレルは知つた——誰であれ、見間違ひ様があるまい——
ここそは、かの「血の畑」、修羅の巷アケルダマ[11]なのだ、と。
　日の暮れる頃、オリーヴ山の傍を、
傳説と史實とをごた混ぜにして、

11〔アケルダマ〕エルサレム付近の地名。ユダがイエスを裏切つて得た金で求めた土地。ユダがそこで無慘な死を遂げたので、「血の畑」と稱される。

愚かしげな空想に耽りつつ、聖者は歩いた。
いつもの取留めのない口調で、
いかにも懐かしげに話をした、
イエス様は夜をオリーヴ山でお過しになつた、
一日の終りを告げる羊の鈴が低く寂しく鳴る頃――
イエス様と愛弟子の――さう、ヨハネがな。
　イエス様は黄金門[12]の邊りをしよつちゆうお通りになつた。
そこから下の方を見ると、シャヴェの溪谷があつて、
その遙か先にはベタニヤの鄙びた村落があつた――
珍しい浮彫りの模様が、
門の二つのアーチを飾つてゐた。
その門を通つて、胸に重荷を祕めながら、イエス様は入城なさつた――

12〔黄金門〕イエスが驢馬に乗つて入城したとされる門。新約聖書「マタイ傳」第二十一章第一節～第十一節参照。

その門のある場所で、もしくはその近くで――
イエス様がお歩きになる道の左右に棕櫚の葉が敷かれ、
大きく搖れる棕櫚の木々の下で、
愛らしい歡呼の聲を上げながら、
娘達が折取つた棕櫚の枝を打振つた――
棕櫚の葉を踏み、頭にそれをかざして、「あの方」は進まれた、
しかし行手には、何と似ても似つかぬ冠が待受けてゐた事か！
やがてその門はイスラム教徒の手で封じられた。
イスラムの豫言者の不吉な豫言、
即ち、武裝したクリスト教徒の一團が、さんざしの花輪で頭を飾り、
大聲で贊美歌を歌ひつつ門を襲擊するであらうといふ、
その豫言の成就を恐れての事だつた。
封じられた門の傍で、黄金色の日差しの下、
草臥れてうつ向き加減になり、うんざりしながら、
クラレルは何度も、

師がイエスの再臨の期日を算定するのを聞かされた。
正に夢だ、そして、夢でしかないから、
それは感覺を鈍らせ――曖昧模瑚たるものとなり、つひには忘れ去られた。
誰もが良く知るありふれた動機と違つて、
何か爲體の知れぬ衝動に突き動かされて、
聖者は語つた、が、
結論なんぞある譯ではなかつた。半分ほど話をすると、
話題から離れて仕舞ひ、こくりこくりやり出して、首を垂れ居眠りをし――
はつとして身を起し、喋り出し――ため息を洩らして、話を止めるのであつた。

第十一章／下のギホン[1]

忘卻の川レテ[2]が齎すにも似たこの夢見る様な心持が、
いつまでも續くのであつたなら、クラレルにも幸ひであつたらう。
だが、様々な出來事が持上り、それは消えてなくなつた。
或時、二人はギホンの「上の池」と濕地帶とを去つて、
更に深い谷間に降りて行き、
岩壁に穿たれた多くの物云はぬ小房の傍を、
虚ろな死の砦の傍を、さまよひ歩いた。
一つの入口に、
淺緑色の柔らかい芝生が敷いてあり、

1〔下のギホン〕エルサレム西方、ヒムノンの谷にある古代の二つの貯水池、「上のギホン」と「下のギホン」の一つ。ここでソロモンが聖油を塗られた。舊約聖書「列王紀略上」第一章第三十二節～四十節參照。

2〔レテ〕（ギリシャ・ローマ神話）黄泉國にあり、亡靈がその水を飲むと自分の過去を全て忘れるといふ。

その上に見知らぬ男がひつそりとたたずみ、
低い聲で呟いた――「どうしても心が定まらぬ！
心疲れた者を、お前は招き寄せるのか――語れ、
かくも優しい魅力に滿ちたお前、墓よ。
しかし、そこは安らぎを與へてくれる場所ではない」。
　男は二人の姿を見なかつた。
男の邪魔をせぬ樣に通り過ぎた二人は、やがて、
惡鬼に憑かれた三人の男[3]に出會つた。
哀れなこの三人は、昔と同じく、
荒野を隅から隅までさまよつてゐた。
その陰鬱で物狂はしげな表情は、昔、イエスに立去る樣に懇願した時と同じく、
「我は汝と何のかかはりあらん」と叫んでゐた。
　その中の二人は近附かれる事を厭つたが、一人はじつと座り込み、

3〔惡鬼に憑かれた三人の男〕新約聖書「ルカ傳」第八章第二十六節～三十六節參照。

非道な仕打を受けた過去を思ひ、
痛々しい記憶に心を奪はれてゐた。
地面をひたすら見詰めてゐたかと思ふと、それを止め、
心の靄を貫いて現れる天の太陽に掴みかからんとするかの如き素振りを見せた。
憤怒と苦痛で、
彼の心は引裂かれてゐる様だつた。
ひきつつた顔で天を睨み、
やがてまた、陰鬱な氣分に落込んだ。
　恐ろしい考へがクラレルを襲つた。
「イエスがここに來て、しかも、こんな場所で、
何世紀も昔に、哀れなゲラサ人[4]に出會つたといふのは本當なのか？
しかし――
見るがいい！」

4〔ゲラサ人〕古代パレスティナの町ゲラサの住民。

が、そこに再びかの見知らぬ男が姿を現し、
近くにゐる者達に氣附かずに、
坂をゆつくり降りて來て、
クラレルの姿を認め、相手が精神上の同胞である事を即座に悟つた——
少なくともその態度は、それと悟つた事を明確に示してゐた。
男は若く、
三日月形の額をしてゐたが、——哀れにも、
身體が奇形だつた。彼は一言も物を云はず、
胸の奥底では話し掛けたいと思ひながら、
自分からは口を開けない人間の様に、
あやふやな態度でそこいらをうろついてゐた。
次第に落ち著かない氣持になつたクラレルが、
相手の存在を認めた事を態度に現さうとするより早く、
見知らぬ男は唇をきゆつと結び、
踵を巡らして立去つた。

二人が沈默裡に顏を見合せてゐたのは、ほんの一瞬の事だつた。
けれども、恐らくは、
多くの言葉をやり取りする以上の何かが、
二人の間で取り交された。
　クラレルは内心密かに呟いた。
他人とこんなに心が通ひ合つた事はない、
話しかければよかつた、
ぜひ、もう一度、會ひたいものだ。
しかし――決意といふものが往々にして、
人の氣質に支配されるものだとするなら――
ここで彼は己れの心を欺いてゐたのかもしれない。
　やがて、クラレルはネヘミヤと共に、
來た時と同じ道を再び通つて谷底を拔け出し、

ダビデの塔[5]のそばの城壁の外側に立つた。
胸壁の落す影は、
朝にはヒンノム[6]の谷をく覆ふのだが、
今は夕方の空氣を吸ひに人々が集つて、
若く誇らしげなトルコ人の貴族の様子を眺めてゐた。
珊瑚の様に紅いトルコ帽子と腰帶を身に附け、
跨る馬も、艶の良い、
燃える様な色をした栗毛の駿馬だつた。
彼は夕日に映える斜面を驅け上り、それから大きく向きを變へ、
暗い谷間に猛然と驅け下つた。
鍛冶場に飛散る火花さながら、鋼鐵の蹄が猛烈な火花を散らした。
ネヘミヤですら、いかにも老人らしい、ぼんやりした關心の示し方ではあつたが、

5〔ダビデの塔〕エルサレム西端、ヤッハ門の側にある塔。
6〔ヒンノムの谷〕エルサレル南方の谷。

眼前の光景に惹き附けられ、
若い貴族の流星の如き颯爽たる姿に見とれてゐた。
が、彼はすぐに氣を取直し、正面に聳える山に視線を移し、
振返つて云つた。「ご覧、
太陽がモレク[7]の谷の彼方に沈まうとすると、
雲がかかつて、太陽の輝きを覆ひ隠してしまふ。
けれども、數時間もすれば、
太陽はもつと良い場所から昇つて來て、美しく輝くだらう。
さうなのだ、クリストに於ける友よ、朝の空に、
太陽はオリーヴ山を越えて戻つて來る。
それを吾々は出迎へよう。よいかな？
では、そろそろ戻るとしようか。

7〔モレク〕子供を人身御供にして祭つたセム族の神。昔、ユダヤ人はヒンノムの谷の南東橋の地トフェトでモレクに子供を捧げた。舊約聖書「列王紀略下」第二十三章第十節參照。

第十二章／チェリオ

が、二人を約束の場所で出會はせる前に――
脈絡をはつきりさせるために――
ここで話の織物に横絲を通して置かう。
　テラ・サンタ[1]の壁の内側に
（この地のカソリック教徒はフランシスコ修道院を
テラ・サンタと呼び慣はしてゐる）、
たまたま逗留してゐる一人旅の若者がゐた。
ローマの生れで、
樞機卿の推薦の信書を携へてゐたので、
司教を兼ねる修道院長が面倒を見る事となつた。

1〔テラ・サンタ〕エルサレムにあるローマ・カソリック系修道院。

若者は毎日修道院の中を歩き回り、人々と何げない接觸を重ねるうちに、
好悪の入り雜つた反應を引出すに至つた。
修道士達は皆、最も地位の低い者でさへ、
若者の非常な禮儀正しさを認めざるを得なかつた。
とは云へ、彼には他人行儀な印象もあつて、
反發を招く程ではないにしても、それが幾分人を遠ざける結果となつた。
多くの史跡や樣々な場所を、
彼は疲れも見せずに巡り歩いた。だが、
この地で商賣をしてゐる腰紐を締めた案内人や、
貴族の家令の姿を見ると、いつでも道を避けようとした。
貴族の家令といふのは、東洋の町を勇しく闊歩してゐて、
金玉を冠した職杖でそれと知られ、
劍をたばさみ、金色のレースを纏ひ、
行列の先觸れとなつて先頭を歩む連中であつた。
　しかし、この若者には、剃髪した人々の全てに苛立ちと、

不審や懸念を起させる事情があつた。
彼は禮拜に出席はしたものの、
單なる客として、
仕來りに從ふ客としてでしかなく、内なる信仰の熱情を、
個人としての信仰の思ひを、何ら表に現さなかつた。
修道院長は心優しい人物だつたから、
内心かう呟いた。可愛さうな若者よ、
人生の苦惱をお前は充分味はつてゐる。
非難はすまい。堅く締めた蔓の結び目さながらの、
大きな瘤を背中に背負つて、
お前の精神はねじけ、歪んでゐるのだ。しかし、
つひにはクリストが、過去の汚點を拭ひ去つて下さらう。
　實際、
外面によつて内面が示されるものである以上、
修道院長の思量に根拠がない譯ではなかつた。

美しい頭部が佝僂の胴體の上に載つてゐたのだ、
アブサロムの麗しい頭髪[2]がイソップの背中の瘤を飾つてでもゐるかの様に。
矜恃を捨てまいとして防禦を固めた、
その重苦しい瞳の奥底に、
歪んだ肉體の内側で音立てて軋る、
あらゆる苦難への鋭い感受性が讀み取れた。
だが、實は修道士の目に映じた事柄以上に、
深刻な問題に若者は懊惱してゐた。
それを明らかにする爲に、以下、急ぎ足で説明しよう。
　公民としての名譽ある地位を、
彼に與へる事を兄弟達は望んでゐた。
彼の地位を十分なくらゐ高からしめる事が。

2〔アブサロムの麗しい頭髪〕舊約聖書「サムエル後記」第十四章第二十五節～二十六節參照。

兄弟達の關心だつた。
彼等は彼を殆ど理解してはゐなかつたが、血肉としては愛してゐた。
世俗的幸福こそが彼の爲に兄弟達が冀つたものだつた。
所が、彼の方ではそんなものは低く見て、
何物にも忠誠を誓はず、自由を妨げられる事なく我道を進み、
思ひの儘に勉學の生活を續け、
眞摯な心の赴く儘に行動して、
我等の時代の焦點をなす問題の、
激烈な影響を回避しようともしなかつた。
それどころか、寧ろ、過度なまでに、しかもいかにもイタリア人らしいやり方で、
全身に影響を浴びようとした。
ローマの傳統を無と看做す一方で、
それに代る宗派の支配を認めようともしなかつたのだ。
けれども、救命ボートを備へぬ船に乗つてゐて、
萬一浸水したら、船もろともに沈没するしかない。

あの日、
聖ピエトロ聖堂のバルコニーで、
ローマ教皇が手を高くかざし、
ローマと世界とを祝福した、
正にあの日、
彼は伸し掛かる宿命の重壓を知つた。この俺を、
大きくうねる群衆の頭の海の、一つの波でしかないこの俺を、
貴方は祝福するのか。が、神の祝福などが、どうしてあり得ようか？
幸薄い俺は身體を動かす喜びを剥奪され、
のびやかな心を許されず、
あちこちの廣場では嘲弄の的でしかない。更に苛酷な運命は、
佝僂は決して愛されないといふ事だ。
決して愛されはしない！　ベアトリーチェよ——ビーチェよ——ああ、
かつては甘く優しく響いた愛稱だつたが、今では何と違つた響で俺の耳朶を打つ事か！
お前はからかつただけだつたのか。早熟な友達に混じつて、

茶目ないたずらをしただけだつたのか。
いやいや、あれはお前がもつと若く、
女としての成熟を始める前の事だつた。
　女の愛も、抱擁も、求愛の言葉も投げ捨てた以上、
何が俺に殘つたか。ペンか。
だが、そんなものは、拔け落ちた鳥の羽根同然、實に儚いものでしかない。
誤謬を流布する場合を除けば、
何の役にも立ちはしない。
俺の血族の者達は——彼等を咎めようとは思はぬが——
家族への奉仕なんぞといふ、
ありきたりの役割を俺に演じさせようとして、
俺には無緣な夢を——實現する筈もない計畫を抱いてゐる。
　この世界には心底失望した。だが、憧憬の念まで捨ててはゐない。
さうだ、どうにかして、何か違ふ世界を發見したい、
それが俺の切なる願ひだ。が、どこに？

教義の中にか？　そんな處にない事は先刻承知だ。
で、それが結論で、その先にはもう一歩も進めないのか？
否定があるばかりで、それ以上は何もないのか？
こちら側には、暗と空虚があるばかりで、
人跡未踏の肥沃な大地はどこにも存在しないのか？
「何か違ふ世界」か。さうだ、かの「新世界」とやらがある――
ああ、悲しくも皮肉な話ではないか！
　かの處女地とやらは、新たに創造された人間の爲に指定された場所なのだと、
人々は證言する。最後の希望にして、
最後の贈り物なのだと、人々は主張する。
實に素晴らしい！　太陽が西から昇るとでも云ひたいらしい。
髭を生やした老齢の數世紀は既に先導者としての使命を終へ、
今や、髭も生え揃はぬ若い世紀の天下なのだといふ譯か。
馬鹿げた話だ。お前の未來は餘りにも崇高過ぎる。
「過去」は、「過去」こそは、時の半分を、

しかも證明濟みの半分を占めてゐる。――汝、古へのパンテオン[3]よ、
汝を繞つて二千年の歳月が流れた。
が、ローマにあつて汝は、
汝自身よりも古きものの中に叡智を求めよと、
この俺に命じた。では、さうするとしよう。
ラティウム[4]の豫言者より年老いてゐて、
東洋の土となつてこの地に運ばれたといふ預言者は、
地面の下から何を語つてゐるのか。地表からずつと深い處に、
ユダヤの地の土が埋められてをり――
それはその上に立つサンタ・クローチェ寺院[5]の土臺を聖化して、

3〔パンテオン〕ローマの圓蓋の萬神殿。紀元前二七年、アグリッパが建立し、紀元一二〇年、ハドリアヌスが改築し、六〇九年以降は教會として用ゐられた。

4〔ラティウム〕ローマの南東にあつた古代部族國家群。ローマとラテン同盟を結ぶが、紀元前五世紀頃、ローマに吸収される。

5〔サンタ・クローチェ寺院〕ローマのサンタ・クローチェ・イン・ジェルサレメ教會。

神の祝福を祈るためであつたが――それは、昔、
故國に向ふ十字軍將兵が、
船隊に乘せてヤッファから運んで來た土だ。
帝王にふさはしいかの巨大な楕圓、即ち、トラヤヌス帝[6]の大廣間は、
ユダヤ人が作つたものだ。ティトゥス帝[7]記念門は、
せり持ちを飾るローマ軍の戰勝行進の圖の中に、
ユダヤ人を征服した皇帝の姿を傳へてゐる。
しかも、異教徒の猥雜な勝利の圖の直中に、
歷史に訴へんとて、
ローマ兵の擔ぐ「七つの枝のついた燭臺」[8]が描かれてゐる。
で、それがどうだといふのか？　無論、

6〔トラヤヌス帝〕（紀元五三？～八一）、ローマ皇帝（九八～一一七）、五賢帝の一人。
7〔ティトゥス帝〕（紀元四〇？～八一）、ローマ皇帝（七九～八一）
8〔七つの枝のついた燭臺〕ティトゥス帝がエルサレムを占領した折の略奪品。

全ては俺の奇拔な考へでしかないかもしれぬ、が、
それらの記念碑が俺を教育し、魅惑し、不思議な力で壓倒する。
何やら、俺を招き寄せる呼掛けの聲が、
パレスティナの地から俺の耳に聞えて來る樣に思はれる。
さうだ、俺はかの祭司長の國が見たい。
神祕の力がかくも強力に支配してゐて、
教皇のローマをすら、
己が屬領もしくは植民地たらしめてゐるかの國が。
ユダのミイラを包む布はすつかり解きほどかれたか？
それをちぎつて、人々は護符にするといふではないか！
　だが、慣れ親しんだ「過去」から遠く隔る、
見知らぬ場所の與へる影響を、
誰が正しく豫見出來るであらうか？
どうしても豫期せぬ出來事が起るものだ。
それをチェリオは實證した。シオンの地の片隅で、

彼の氣質はその地の性格と混じり合つて、
酸とアルカリの化合よろしく、
新奇な成分を作りだしたのである。

第十三章／アーチ[1]

よくある事だ、
一雙の船が嵐の中に打捨てられ、救ひを求め青い光を打上げる、
が、それに應へるのは、やはり同じ嵐に卷込まれてのたうち回る、
もう一雙の船の放つ狼火の輝きでしかない、といふ事が。

先に述べたギホンでの出逢ひがあつたのは、
あたかもチェリオが、
新たな懷疑の槍に胸を衝かれてゐる時の事だつた。

1〔アーチ〕エッケ・ホモ・アーチ。ここでローマ総督ピラトが「エッケ・ホモ」（この人を見よ）と叫んで、イエスを群衆に示したとされる。（新約聖書「ヨハネ傳」第十九章第五節參照）オリーヴ山からゴルゴタに至る狹い道、ヴィア・ドロロッサ沿ひの行列祈ｰ所の一つ。

そしてその時、クラレルもまた、
かの惡鬼に憑かれた者達の、
耐へ難い苦惱に重苦しい思ひを味はつてゐた。
それゆゑ、チェリオが進み出た時、
二人の目と目が會つて、
互ひの意中を探り合つたのも不思議ではない。
その出逢ひの後、
イタリア人の方は夕暮が近づいたので、
城門に戻り、急いで門を潛つた。
胸中の思ひを必死に斷ち切らうとでもするかの様に、
非常な急ぎ足で彼は歩いた。
東の方向に向ひ、町を通り抜け、
物寂しいヴィア・クルキス[2]に至り、

2〔ヴィア・クルキス〕メルヴィルはヴィア・ドロロッサをかう呼ぶ。

そこで、ある物に注意を引きつけられ、足を止めた。
　永い歳月、風雨に曝され損耗した、
エッケ・ホモといふ名のアーチ[3]が、
陰鬱な小路の上にのしかかる様に聳えてゐた。
かの無邪氣な信仰の物語が眞實ならば、
ピラトは正にそこから、狼の如き群衆に、
「神の仔羊」の存在を知らしめたのだ。
そしてチェリオは――その光景を思ひ浮べ、
心に火をつけられた様な氣持になり――
惑亂しつつ、しかも心底魅惑されつつ、その場に佇んだ。
　聖者を捉へる恍惚や、
良心の苦惱などを、彼が感じてゐた譯ではない。
彼は空中に亡靈の姿を見てゐた。

3〔エッケ・ホモといふ名のアーチ〕註（9）參照。

青ざめた靜かな顔、紫の長衣、茨の冠を。
そして心中に叫んだ――**この人を見よ！**[4]
この心の重荷は正に「あの人」のせゐだ。
のどかな時候に、
彼は方々の野を歩み、花々に心浮き立ちながら、
曇りなき天上の日々の事を告げ知らせた。
しかも、ああ、何と説得力のある言葉で、
人々をして天上の安らぎを冀はしめた事か――が、最後の審判の日が、
未だ到來しない今、その言葉を吐いた唇は固く閉じられた儘だ――
けれども、彼がもはや虹を見る視力さへ失ひ、
死の影に覆はれて絶叫した時、
絶望の闇が大きく廣がつた――わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし？[5]

4

5〔わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし〕新約聖書「マタイ傳」第二十七章第四十六節參照。

神を責めるとは！　が、吾々も責めよう。
吾々は汝を責める。餘りの苦惱の激しさに、
悲哀を感じる心が締めつけられて、吾々は殘酷になつた。
汝の出現以前には、
天上の家や邸についての約束などは――
吾々の爲にあるのだといふ父なる神の家についての約束などは、
一度も與へられた事はなかつた。
人の心はそんなものを請ひ求めず、滿ち足りて暮してゐた――
人生に不滿はあつても、それは當り前の事だと思つてゐた。
運命が吾々の爲に進路を變へる事があるなどとは思はなかつた。
自然の掟の支配に人々は從つてゐた。
本能と運命とが齟齬を來す狀態など、
理性は認めなかつたのである。
しかるに、汝は、――ああ、見よ、自ら苦惱に青ざめ、
斷末魔の苦しみで世界を痙攣せしめた彼を見よ、――

さうだ、「この人」を見よ。
夢への嫌悪を引出す夢を、
創始したとは云はないまでも、それを約束した彼を。
　さういふ汝から、どうしても離れられぬ者もゐる。
汝の愛は汝に纏はる傳承と固く結びついてゐる。
彼等はそれを切離して、汝から自由になる事が出來ない。
頭腦は拒否する。が、拒否が強ければ強いほど、それだけ一層、
心情は受入れようとする——何を？　汝の愛を？
ユダヤの僧侶達の證言が眞實ならば、
汝は鮫を作出して置きながら、鳩を作つたと主張してゐる事になる。
　自然と汝とを吾々は空しく捜し求める。
ソロモンの廊で、「何時まで我らの心を惑はしむるか？」[6]とて、

6〔何時まで我らの心を惑はしむるか？〕新約聖書「ヨハネ傳」第十章第二十三節～二十四節。（「イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたまふに、ユダヤ人ら之を取圍みて言ふ、『何時まで我らの心を惑はしむるか、汝キリストならば明白に告げよ』」）

ユダヤ人達がイエスに迫つたのも無理はない。
全く、何時まで？　――既に十八世紀もの歳月が過ぎた――
謎は深まり、逃げ口上のみが増える。
そして結局、吾々は終に汝を見出す事はないのか？
如何なる弧絶が汝の孤獨を深めてゐるのか？
汝の孤獨な境遇は汝の教へと兩立し得ない、
それを汝以外の吾々全てが知つてゐる。汝に近づけば、
吾々の依つて立つ地盤は全て崩れる。歴史は、
そこに、橋のない深淵が横たはる事を示してゐる。
使徒達の全盛の時が終つてすぐ、
記録に殘らぬ時が過ぎ行く間に、
何らかの偶然もしくは作爲ゆゑに、橋は崩壞して仕舞つたのか？
それは目的にかなふ事だつたのか？
かくも柔和にして善良で、
天上の愛に充ち滿ちた心が、如何なる呪術の力によつて、

悪意に滿ちた様々な教義に變貌し、
神聖な汝を守護者として求めつつ、
害蟲よろしく爭ひ合ふ輩を生み出す事になつたのか？
　それゆゑ、この先何度も、
汝、「苦惱せる顏」は血を流す事になるに相違ない。
しかり、汝は、いつまでも、
メデューサの盾[7]よろしく、
美と恐怖とで、
高貴な人々を麻痺せしめ――
打ちのめし、宙づりにし、惑亂に突き落し、前進を妨げ――
とどの詰り、鞭打たれた汝が鞭打つ者となるのだ。
「未來」が如何に低俗なものにならうとも、

7〔メデューサの楯〕（ギリシャ神話）三人姉妹の怪物ゴルゴンの一人。ペルセウスに殺され、その首は女神アテネの楯に取りつけられた。それを見ると、人は石に化したといふ。

彼等は汝を氣にかけ、汝の姿に驚嘆する――
汝の純白、汝の紅、汝の美、汝の悲劇に。

胸の裡が引裂かれる様な氣持になつて、チェリオは踵をめぐらした。
元來た道を引返してゐる事にも氣づかず、
不安な氣持で歩いてゐると、二人の男に出遭つた。
修道士と平信徒の二人連れで、一人は信條に服する者、
もう一人は新參者の情熱を持つ者。
この土地に來たばかりの頗る敬虔な顔附の平信徒に、
修道士が案内役を務め、
遺跡を見せて回つてゐた。「ここだ」、と彼は叫んで、
路傍の石の前で立ち止つた。
「ここで、かの卑劣なユダヤ人が、
イエスを罵倒したのです、
うめき聲を擧げながら、十字架の重みで身體を折曲げてゐるイエスを。

爾來、その許し難い惡行ゆゑに、かの卑劣漢は、
最期の審判の日まで、さまよひ續けてゐるのです」。
　チェリオははつとしてその場所を眺め、
思はず、たぢろいだ――俺がそのユダヤ人なのか？
急に彼は向きを變へて歩き出し、
「茨の道」[8]を下り、
「最初の殉教者」[9]の門に至り、
そこを出て、ヨシャパテの谷[10]に降りて行つた。

8〔茨の道〕茨の冠を被らせられて、イエスが歩んだ道。
9〔「最初の殉教者」の門〕聖ステパノ門の事。
10〔ヨシャパテの谷〕エホバが民を裁く、終末的審判の場所とされる谷。舊約聖書「ヨエル書」第三章第二節及び十二節を參照。

城壁の麓のゆるやかな斜面をなす土手の上に、
背の高い墓石が竝び、夕日を受けてそれらが落す影の傍を、
チェリオは滑る様に歩いて行く。
今や太陽は大きく傾き、殆ど沈みかけてゐる。
門衛が警告の鐘を鳴らす。
日没と共に門は閉り、夜間は立入り禁止となる。
だが、チェリオの耳には聞えない、もしくは、彼は鐘の音を全く無視した。

第十四章／谷間にて

サヴォナローラ[1]の敬虔なる熱情が、
薪の束が燃上るまで消滅する事がなかつたのだとするなら、
或はまた、「悲哀」に打ちのめされたレオパルディ[2]が、
「懐疑」に悶える若き聖ステパノ[3]とも云ふべきレオパルディが、
殉教者として書物の一頁を割くに價する人物なのだとするなら、
即ち、この二人の中に、激しい情熱が存在を主張してゐるのだとするなら、
彼らの同類たるチェリオを咎めても始らぬし、まして、

1〔サヴォナローラ〕（紀元一四五二年～九八年）イタリアのドミニコ會修道士。宗教改革を企てるが、異端者として火刑に處せられる。

2〔レオパルディ〕（紀元一七九八～一八三七）イタリアの抒情詩人。透徹せるペシミズムの裡に、存在の無と世界の悲哀とを歌ふ。

3〔聖ステパノ〕最初のクリスト教殉教者。新約聖書「使徒行傳」第六～七章參照。

アッティカ人の冷静やサクソン人の沈著などは二人も持ち合はせてゐないのだから、
それらをチェリオに求めても無駄な事だ。
　宵闇が死せる谷間を覆ふ頃、
イタリア人は再び城門に戻つて來たが、
門は既に閉じられてゐて、門衛の姿もない。
日没と共に生命の印が消え失せる、
東洋の町の異様な靜寂が一帶を領してゐた。
鉄の鋲や締金でよろはれた木製の門の前に、
一人、闇の中、チェリオは佇む。
これは何かを象徴する光景なのか？　それならばそれでよい。
俺にはまだやすらへる港がある、そこへ行くとしよう。
　ケデロンの谷に沿ふ道を歩いて行くと、次第に谷の底が深くなり、
道が段々狹くなり、勾配も急になり、
やがて、狹隘で峻險な峠に至る。
山側の壁面に三基の墓がある。

斷崖からまるごと切出された立方體の墓。
一つは他と切離され孤立して立ち、
もう一つは、石の柱を、
ペトラ[4]の遺跡の石の列さながらに、
前方に突出た前廊もしくはバルコニーの上に竝べ、そこから、
虚ろな谷間を、これまた虚ろな様子で見おろしてゐる。
町の間近にありながら、なんとも生氣に缺けた光景だ。
チェリオが住處としてゐるのが、ここであつた。
傳承によれば、ここは昔、
使徒ヤコブ[5]が、鞭を手に追跡するレヴィ人や頑迷な輩から逃れ、
隠れ潛んだ場所であつた。
　時間はゆつくりと過ぎて行き、

4〔ペトラ〕ヨルダン南西部の古都。雜色の成層岩で作られた、古代隊商都市遺跡がある。
5〔使徒ヤコブ〕イエスの十二使徒の一人。

流れ雲が互ひに混り合ふ様に、
谷の壁面は周圍の宵闇と混り合つた。
しかし、見るがいい――タイミル[6]の沖合で、
オーロラの光の飛沫を浴びて、
眞紅の色に染つた氷山の様に――高く聳える岩山が、
くつきりと夜空に浮んでゐる。
　チェリオは足早に歩み、幾らか廣い場所に出る。
すると、彼方の高い門から、
松明の光の列が流れ出した。夢見る町から流れ出て、
溶岩よろしくうねりつつ進み、
谷間を赤く染めながら下つて來る。
彼の友人の修道士達が、
闇に迷ふ者に救ひの手を差伸べるべく、

6〔タイミル〕北極海にのびるシベリア地方の半島。

正に今、光を手に、高所から下つて來たのであらうか？
事實、それは僧侶の列だつた。だが、その様子はどうであつたか？
屍衣にくるんだ十字架を蝋燭の明りで照し、
皆が手に松明を持ち、
いベールを被つた信徒達が、
ガウンを帶で結んだ修道士の列に混じつて歩いてゐる。
よく見ると、
正しくそれはテラ・サンタの行列であつた。
一行は次第に近づいて來る。修道院長の姿もあり、
他にチェリオの知つてゐる人々の顔も見える。
慰めの儀式に赴く所であつた。
喪服を纏ひ、
默然として修道士と共に歩んでゐる人々の、
苦惱を癒し、
傷の痛みを和らげる爲の儀式に。

チェリオは身體を縮め行列の爲に道を開け、
殿の修道士が通過してから、
外套で身體を隱して行列の後を歩き出した。
闇は濃さを增してゐた。
ケドロンの谷を一行は渡つた。正にこの樣にして——
確かめ樣もない事だが、傳説の通りだとするなら——
十二使徒の殘された者達も、悲嘆に暮れつつ、
夜、この谷を通つて、聖母マリアの遺體を、
墓地まで運んだのであらう。修道士や會葬者達も、
マリアの墓と云はれる場所の前で立ち止り、
短い歌を歌ひ、
それから立上がつて前へ進み、
ゲッセマネの園の傍らの土埃の中に跪いた。

一人が「苦しみの酒杯」[7]の事を語つて、かう云つた。
「我らが救ひ主よ、正にこの場で、
天使達が助けの手を差伸べられ、
あなたの頭を支へ、あなたの閉ぢた目と痺れた青白い頬に、
口づけをなさると、あなたは立上がられたのでした。
ですから、どうかあなたも側においでになつて、これらの者達をお助け下さい」。
會葬者達がすすり泣いた。
チェリオの目からも涙がこぼれ落ちた。だが、内心、彼は思つた——
何と情けない、作り話なんぞに心を動かされるとは。
松明の光の列は、
オリーヴ山をゆつくりと登り、
聖なる場所に着く度に、神に捧げる歌を歌ひ、

7〔「苦しみの酒杯」〕新約聖書「マタイ傳」第二十六章第三十九節參照。（「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ」。）

一つ處に長居をせず、先に進み、
ベタニヤ[8]に向かつた――石ころだらけの小道を通り、
ラザロ[9]の名が附けられた狹い住居に、
と云ふよりも、穴藏さながらの洞窟に入つた。
松明の光で赤く照らされた暗い壁に、
一行の影が落ちる。
奇跡の主たる「あの方」の、
「我は復活（よみがへり）なり、生命（いのち）なり」[10]との言葉を、

8〔ベタニヤ〕エルサレム近郊、オリーヴ山麓の村。新約聖書「マタイ傳」第二十一章第十七節、「ヨハネ傳」第十一章第一節參照

9〔ラザロ〕ベタニアのマリアとマルタの弟。イエスの友人で、イエスの奇跡により死から甦る。「ベタニアのラザロ」と呼ばれる。新約聖書「ヨハネ傳」第十一章第十一節～四十四節、第十二章第一節～十八節參照。

10〔「我は復活なり、生命なり」〕新約聖書「ヨハネ傳」第十一章第二十五節參照。（「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか」。）

廣く知らしむるべく、
修道院長が聖書の中から、
死んで甦つたかの男の物語を讀んで聞かせた。
ラザロは手足を屍衣でくるまれてゐたが、
突然、立上がつた——電氣に擊たれたかの樣にな。
屍衣を解いて貰つて、家に歸ると、
大勢の人々が姿を見にやつて來た。
彼を死者の國から甦へらせたイエス樣の爲に、
やがて、爽やかな夕べに、
宴が設けられたが、
そこには、村の農夫や若い娘達もやつて來たといふ事だ。
院長の話が終ると、一行は見事な聲で歌つた。
「おお、死よ、汝の刺（はり）は何處にかある？　おお、墓よ、
汝の勝（かち）は何處にかある？　歌聲は鳴り響き、
そして止んだ。すると、洞窟の外から、

こんな聲が聞えた。「だが、彼は再び死んでしまつたのか？
天國からも地獄からも、
彼はまだ戻つて來てはゐない。
ゴルゴタの傍には、空の墓――そして、
ここには、空ろな部屋。これでいいのか？
甦らせた者と甦つた者とが、一つの運命を分ち持ち、
いづれも今は消えて仕舞つた」。
　魚が跳ね上がる兆など少しも見えない、
眞夜中の靜かな山中の湖で、
突如、魚が跳ね上がり、波が立ち、その事に波自らが驚いて、
水の環を作り元の靜かな水面に戻らうとする事がある。
今のチェリオが正にそんな風だつた。
向う見ずな唇から飛出た己が言葉を、自ら聞いて彼は驚き、
誰にも姿を見られぬ裡に、急いでその場を離れ、
山と谷を再び越え、

休まず歩き續け、つひに聖ステパノ門に至り、
その前の塚の上に座つて、開門を待つた。
　やがて、かぐはしく爽やかな大氣が、
優しく吹く風となつて、
朝の到來を告げ知らせ、次いで方向を轉じ、
西の方へも告知してから、その附近をさまよつた。
「東の空」は驚いて、輕く身を震はし、
茜色となり、やがて、華やかな馬衣や肩掛けや槍に飾られた、
スルタンの隊列の前衞よろしく、堂々たる姿を現した。
　それに續くは、壯麗な太陽、
ユダの高地の都を圍む城壁の上に、
待ち焦れてゐる人々の前を、
遥かペルシャの空から威風堂々と進んで來る。

第十五章／尖塔の下にて

「見よ、山上に燦として輝く旭光を。
今や、待ち焦れる思ひは募る。
だが、所詮、儚く空しい見世物でしかない。
『自然』の意圖を捉へんとするや――
決つて、上邊の飾附にたぶらかされる事になる！
「太陽が昇つた。おお、汝、至高の天球、
オリーヴ山を汝は昇る――
その丘と、いにしへより名高い禮拜堂の上を。
しかるに、汝の光の何と疎々しい事か！
畏れ敬ふ心など起しうべくもない。
丸屋根も山頂も、滑る様に歩む汝の光に觸れられて、
色調を變じ、斑模様になるだけの事だ。

汝はクリストを知るや？　夢を信じるや？」
　チェリオは塚の上に座した儘、
さう獨りごちた。が、その時、
門が勢ひよく開いて朝を迎へ入れ、
クラレルとその案内人のネヘミヤが歩み出た。
二人は城壁から曙光を拜してゐたのだ。
彼等が交す言葉を耳にして、
チェリオは振返り、立上つた。挨拶しようとしたのであつたか？
　だが、雙方が近づいて挨拶を交す前に、
近くのオマール[1]の廣場に聳える尖塔から、
祈？時報係の聲が響き渡り、
イスラムの早朝の祈りの時刻を告げ知らせた――

1〔オマール〕エルサレムはソロモンの神殿の地に立つモスク。

定刻には遲れてゐたが、それもその筈、
時報係は老人で、
老人は道を急がない。聲は城壁を傳ひ、
城壁の下に横たはる深い谷を渡り、
遙かエンロゲル[2]に向つて降り、鋭い聲で人々の注意を喚起した。
シロアムの池はその聲を聞いてなほ、
虚ろな洞穴の中で、無頓著に漣を立ててゐられるのか？
シオンの山には何も聞えないのか？ けれども、ターバンを卷いた男達は、
夜明け前に聞こえる筈だつたその甲高い呼び聲に、
一齊に頭を垂れ、胸に兩手を置いたり、兩腕をまつすぐ上に擧げたりした。
その間、イスラムの先觸れはただ一人、
大理石の檣頭に立ち、

2〔エンロゲル〕ヒンノムの谷とヨシャパテの谷とが接合する地點にある泉。

兩手で手摺をおさへ、
視力の失せた目をうやうやしく上空に向け、
三日月が十字架を驅逐した、
一面の荒野を見渡してゐた。
盲ひた者以外には、
この仕事は許されぬ決りになつてゐる。
なぜなら、どの町でもトルコ人の家屋が守りを固めてゐるのは、
街路に對してのみであり、
高い場所に立つ者は、
彼等の家屋の中に潜む祕め事に、
詮索の目を向けようと思へば、
幾らでも向ける事が出來たからだ。
　けれども、クラレルとチェリオがそこに佇んでゐた時、
クラレルの態度に變化を起さしめたものは何であつたか？
そしてまた、それに應じてチェリオの表情がどの樣に變つたか？

二人は絶頂感を分ち持つ事が出來るのか？
信と不信との相反する兩極からこの場に至つたこの二人の精神は、
互ひに摩擦なく近づく事が出來るのか？
懷疑の宿命ゆゑに、
二人は一致する事になるのであらうか？
――天上から轟くかの如くに、
高い尖塔から呼掛ける、
異教徒の祈？時刻を告知する聲に引留められて、
今、かうして、一つの境界に足を止めてゐるこの二人が？
もしも所謂絶對の神が、今、ここに存在してゐるのに、
それを無視する人々が何等罰を受ける事がないとするなら、

嫉む神[3]などといふ云ひ種は嘘の皮でしかない、といふ事になる。
汝らはその様な事を考へてゐるのか？　事實、さうだとしても、
その様な考へを目で傳へる事が出來るのか？
目だけで？　かくも素早く、かくも精妙に？
けれども、チェリオは己が相手を知つた。
そして再び、最前、下のギホンで出遭つた時と同じ様に、
その邊りをうろつきながら、有無を云はせぬ様な態度で、
クラレルの反應を待ち受けた。
だが、經驗に乏しく、内氣で、確信が持てなかつたクラレルは、
突然、否か應かと挑まれて、
またもや躊躇する態度を示した。

3〔嫉む神〕舊約聖書「出エジプト記」第二十章第五節參照。（「我エホバは嫉む神なれば我を憎む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代におよぼし・・・」）

すると、誇高き一方は、
内心の苦惱を表に現すかの様な――
相手が後に思ひ出すに堪へない表情をして、
その場を立去つた。
　ああ、學生よ、へまな事をしたものだ！
切ない思ひで近づいて來たのに――むざと機會を逃して仕舞つた。
　數日後、失敗を償ふ爲に、
後悔したクラレルが面會を求めに行くと、
相手の名前と、次の事だけが解つた――
チェリオは修道院を既に去り、
行方を知る者は誰もゐない、といふ事だけが。
　その時、突如、
夢の様な徽がクラレルに訪れた。
朝の光が増す中を、どんどん小さくなりながら、遙かな彼方に遠ざかつて行く、
あの斑點は何なのか？

それは、昨夜、大波が汝らを引き離した時、
聲を限りに汝らが呼び掛けた、あの船の帆影なのか？
だが、先に進まう。行手は無邊際の海原だ。

第十六章　嘆きの壁

モリア山より延々と續く、崩れ落ちた古への廢墟の下を、
ケデロン[1]が秘やかに流れてゐるのであらうか？
地下からその音が聞えて來ると、農夫達は證言する。
神殿の下に横たはる、水路で結ばれた沼や大廣間の様な貯水池の中で、
靜かに眠つてゐるのは、
如何なる往古の記憶なのか？　遠く、そしてまた深い場所に、
如何なる暗渠や仕切られた井戸や壁が潜んでゐるのか。
そして地底深く、それらを下から支へる多くの土臺は、

1〔ケデロン川〕ケデロンの谷（パレスティナ中部、エルサレム東部のヨルダンの峽谷）に發する小川。東流して死海に注ぐ。舊約聖書「サムエル後書」第十五章第二十三節、及び新約聖書「ヨハネ傳」第十八章第一節參照。

如何にも謎めいて暗鬱な印象を與へる為に、
我々はかう問はざるを得ない——それらは「正しきもの」の礎へであつたのか？
それとも、「正しからざるもの」に仕へるものであつたのか？
　昔、嗾けられて熱り立つ農民達が、
苦境に立つエルサレムを地下から襲ひ、
まんまと占據した事があつた。
彼らの通つた通路こそは往古の下水道だつた。
久しく塵芥の山に隱されて、
誰もが忘れてゐた地下道を彼らは利用し、
外側の谷の入口から潛り込み、
知られざる地下の丸天井の部屋に至り、
町の眞ん中の寂しい場所の、
附近に瓦礫の散亂する出口から踊り出たのだ。
　彷徨ひ行くがよい、城壁の中を、
サボテンの立つ數多の空地を。

住む者もをらず、見つめる視線も呼びかける聲音も存在しない空地を――
船影も見えない海域の、淺瀬に一人佇む時さながらの、
何とも荒涼たる寂寥感だ。或はまた、日沒の靜な頃合に耳を傾けてみるがよい、
中庭で手回しの碾き臼が立てる、
鈍く、如何にも所帶染みた音に。
そこに人々は好んで集まり、
温和な顏つきの母親が物思ひに耽り、
その膝元で幼い男兒が片言を喋つてゐる。
さういふ情景の下に、深淵が――
覗き込まうとする者など滅多にゐない暗い石切場が、そこに横たはつてゐる。
その石切場から高く聳える多くの都市が出現した。
大いなる都がその上に次々に建設され、
次々に消滅して行つた。廢墟は打碎かれて塵となり、
まき散らされて、今、くるくると風に舞つてゐる。
　この種の思念に襲はれたら、

安直な説明など役には立たぬ。
クラレルがそれを實證してゐた。彼は益々、
己が思念の世界に迷ひ込んで行つた。
巡禮者達が足を止めるどこかの場所で、
姿を隱して仕舞つた例の見知らぬ男と、
いま一度會つて言葉を交したいと願ひつつ、
彼は彷徨し續けた。
　當ても無く、
二人は死に瀕した町を通り抜け、
數人のエドム人[2]が荒れ果てた一隅に露營して、
食事をしてゐる場所にやつて來た。
一日、逗留してゐるだけの連中で、

2〔エドム人〕エドム（エサウの別名）の子孫。死海の南方に住んでゐた。舊約聖書「民數紀略」第二十章第十四節～第二十一節參照。

顔色はく、ツロ[3]の岩場に羽根を休める、
猛禽の類に似てゐなくもない。
クラレルがその光景を眺めてゐると、
聖者は耳許で、
その場に如何にも相應しい聖書の言葉を繰返してゐたが――
すると、ふと、谷間から解き放たれでもしたかの様に、
合唱の聲音が聞えて來た。
それと同時に、何と、見よ、
沼地に咲く百合の花よろしく、
何ともそぐはぬ風情だつたが、石の小道から、
低い圓蓋に覆はれた穢らしい小道から、
頭には何も被らず、亞麻布の長衣を纏つた乙女達が、
母親や白髪の老人達と一緒に、

3 〔ツロ〕古代フェニキアの海港。

ゆつくり姿を現した。乙女達は開いた本を手に持ち、
つき添ふ者がそのページを覗き込んでゐる。
合唱しつつ、うねりながら、行列は進んだ。
歌つてゐるのに、樂しげではなかつた。
實を云へば、いとも悄然たる有様だつた――
少なくとも、男達はさう見えた。汚れた衣服を纏ひ、
二列になつて歩くのだが、その細長い行列は、
小鳥の様な聲で優しく歌ふ、
乙女達の姿が混つてゐなかつたならば、
鎖に繫がれた奴隷の行列のやうに見えたであらう。
　けれども、ネヘミヤが行列について手がかりを與へてくれた。
「おお、誤り導かれた哀れなユダヤ人達よ」、嘆息しつつ彼は云つた、
「汝らは自らの死者達の間で挽歌を歌つてゐるに過ぎない。――
が、それはともかく、ここはユダヤ人地區で、

しかも今日は金曜日、詰り『嘆きの日』[4]なのだから、
この人達はこれから神殿へ行くのであらう。
我々もついて行つてみるとしようか」。二人がついて行くと、
地面が低く沈んだ庭の様な場所にやつて來た。
埃や屑が風に舞ひ、薄暗く、
見るからに不愉快で、
普通の旅人なら決して近づかない場所だ。一方の側に、
がつしりした巨大な石壁が聳えてゐて、そこが行止りになつてゐる——
石が幾重にも積み上げられて、アララット山さながらだ。
斜角をつけて削られた極く幅廣の石が土臺をなし、
その一つ一つがソロモンの神殿の由緒ある石だといふが（この地に運ばれなければ塵と化してゐただらう）、

4〔嘆きの日〕毎週金曜日、ユダヤ人は「嘆きの壁」の前に集まつて、聖なる都の荒廢を嘆き、その恢復を祈る。

今はイスラム教徒の廣場を守る城壁の石として、
利用されてゐる。そこで、
萬人の主たるトルコ人の許可を得て、様々な部族の人々が、
物云はぬ石壁の背後に惨めな姿で這つて行き、
寄り掛り、跪き、
無情にも城門から締め出された哀れな乞食さながらに、嘆き、泣き、
溜息をつき、呻き聲を上げて叫ぶのだ。
どうか、昔のやうに、もう一度！　俺達は待つてゐる、いつまでも！
さうして彼らは冀つてやまない、この同じ大地に、
昔日の有様を何とか取り戻したいと。その昔、高い列柱が周圍を圍み、
冠石が重ねられた柱廊の前を、
レヴィ人[5]の一行が歩んだものだ。

5〔レヴィ人〕ヤコブの第三子レヴィの子孫。レヴィ族。イスラエル十二支族の一つで、祭儀を司る。「レヴィ人」は特に、ユダヤの神殿で祭司を補佐した者を云ふ。

マントの縁を飾る夥しい銀の鈴が
（眞珠の鎖のやうに優美で小さな銀の鈴が）
階音を奏でる中――
レヴィ人は列をなして行つたり來たりした。
この土地を守護せんとするが如くに四圍を圍む山竝み、
忍び寄る暮色、
空を舞ふ家鳩の群、風にそよぐ棕櫚の葉、彼らの目はそれらを見た。
銀の喇叭の音が聞こえる事もあつた――
祭に呼び出さんとて、僧が喇叭を吹いたのだ。
何と仕合せだつた事か。正にユダ王國の全盛の時代であつた。
しかるに、見よ、末裔として生き殘つてゐる我々は、顏は青ざめ、
神殿から叩き出され、ここに泣き濡れてゐる――
シロの到來の時も待たずして、滅び去るしかないのだ。
　それら不幸せな人々のすぐそばに、
悲哀に滿ちた堅牢なる城壁に額を押しつけ、

寄り掛る人々のすぐそばに、
頭を垂れるいユダヤ人の姿をクラレルは認めた。
峻嚴なるシャダイ[6]に哀願する群衆の間から、
その聲が聞こえて來る。
もう一人、これまた熱心な態度で、そこに佇む男がゐた。
ヘブライ人の様には見えず、
田舍者めいた服裝を纏ひ、ごはついた淺い頰をして、
東洋人らしい雰圍氣は露程も無かつた。
見つめるクラレルの眼を、その眼が捉へた——
同國人であつた、それにしても、
不可思議な背教者だ。かくも對照的な二人が——
一人はく、一人は白い——
一人は人類の最古の種族で、一人は最新の血統の者——

6 〔シャダイ〕全能なる者。神。

その二人が主君たるイスラム教徒の背後を卑屈に歩み、
しかもまた偉大なるモーゼの足跡を追ふてもゐる——
クラレルは驚異の眼差で二人を見た、
大地が隆起するのを足下に感じて、
堅固な大地も欺く事があるのだと、
不快な氣持で悟つた時のやうな驚きだ。
　やがて、金曜日の嘆きの儀式が終つた。
書物を手にネヘミヤは、
侘びしげな老人のそばににじり寄り、
小册子を差し出し、「ご覽なさい、ヘブライの教へです」、さう云つて、
熱心に説いた。「これは道を、唯一の道を
指し示してゐるのです。よいかな、その道に從つて行けば、
『神殿』の再建も不可能ではない」。しかし、
イサクの貧しき息子はそれに答へようともせず、
なかば輕蔑するかのやうに、背中を向け、

むさ苦しい己れの家に向つて、のろのろと歩いて行つた。またもや、
一つの思ひに心を奪はれ、クラレルは暫し呆然と佇んでゐた。
「あのユダヤ人は信仰を持つてゐる。信仰は空しきものでもあり得るのか？
しかし、あれは本當に信仰なのか？　然り、信仰と呼ぶしかない――
他に呼びやうがあるか？　してみれば、最も信仰心の篤い者をも、
信仰は欺き得るといふ譯だ。酷い、餘りにも酷い！」
懷疑の群れが押し寄せて來て、クラレルと相見えた。
彼は懷疑と搭闘したが、相手は實に頑強で、
どうしても屈服しようとしなかつた。
　しかし、視線を移すとしよう。
儀式につき合はされてゐた乙女達の中、
一人の娘の上にクラレルの視線は落ちた。
娘の様子には偽り無き眞實が、そしてまた、
穢れ無き閲歴を持つ者の誓ひの中にこそ潜む、
心の調和が示されてゐて――

來世と同じく現世に於ても、
樂園は可能なのだと保證する、
教皇特使よろしくの雰圍氣が漂つてゐた。その優美な様子は、
「自然」の黎明の時にこそ相應しいもので、イヴのやうな顔と
海の精ネーレーイス[7]さながらの兩眼とが、處女ならではの魅力を湛へ、
眞晝のごとく率直で、しかもまた、惜しみなく注ぐ晝の光の輝きゆゑに、
見る者を困惑させずにはおかない。
鳩のやうでもあつた。神殿もしくは
神殿の森で生まれ、そこで育てられた、
神殿の鳩。けれども、なほも深く觀察すると、
何かが幾分不都合に見える、それは一體何なのか？
やや損なはれた感じ、平安に缺くる印象は何ゆゑか？
無理矢理抑へつけた思ひ、

7 〔ネーレーイス〕（ギリシャ神話）海の女神。

悔恨と憧憬とでもつれ合ふ心、
乙女の胸中の祕められた鬱憤、原因はそれか。
　横顔の線は、どう見てもヘブライ人だ。
けれども、インド洋の珊瑚礁で外洋の危害から守られ、
椰子の樹木に周邊を縁取られた安全な港の中で、
そこに轉移して蕾をつけた赤い珊瑚が、
瓶の中の葡萄酒よろしく、すつかり安らいで、
穏やかな海水を通して頭上をこつそり覗き見る、
正にそんな風に、澄んだオリーヴ色の肌と、
ハガル[8]さながらの端正な容貌を通して、
祕められた思ひが赤い輝きを放つてゐた——
遙かなるクローヴァーの大地の六月の事を、
イスラエルの砂の大地にうかと洩らして仕舞ふ色合ひだ。

8〔ハガル〕アブラハムの妾でイシュマエルの母。舊約聖書「創世記」第十六章第一節參照。

やがて、ふと、乙女の視線が、
ネヘミヤの上に止まつた。その眼差は、
親しい知り合ひである事を物語り、
返す眼差も同じ事を物語つてゐた。さうするうちに、
人々の塊がほどけて思ひ思ひに家路についた。
その時、クラレルの眼に映じたのは、
娘がかの背教者と連れ立つて行く姿だつた。
父親らしい聲が娘を呼んだ、「ルツ！」
「教へて下さい」、嘆きの壁を立ち去りながら、
クラレルは熱心にさう云つた。
「二人は父娘なのですか？　何者です、
あの見慣れぬ背教者は？」
師は餘り氣の進まぬ様子で、
暫し思ひ惱んでゐたが、やがて、
悲しげな顔で話し出した——もつれた絲よろしく錯綜した話だつたが、

もつれを解いて、順序立てれば、
次章で語るやうな話となる。ただし、混ぜ合はせた話の多くは、
ネヘミヤなら附け加へはしなかつたかもしれぬ。

第十七章／ネイサン

ネイサンの先祖は立派な者達だつた——
峻嚴で、禁慾的で、それでゐて自由な精神を持ち、
荒波の打ち寄せる岩場から足を踏み出し、
森の世界や冬の季節に立ち向つて行つたのだ。
　彼ら巡禮者達の乘る船は、嵐や諸々の航海の難儀の折にも
踏み迷つたものだつたが、それは荒野に於ても變らなかつた。
けれども、先祖を支配した運命の力は、
子孫の全てをも同じ考へに導く事になるのであらうか？
最初の移民が發端をなし、
その子供達は開拓民となつて内陸へ進み、
次の世代もまた開拓民となつて西方へ向ふ。
子孫は次々に生れ、
移動する度に荷馬車は立派に、

心は大きく、土地は廣くなつて、
後には農場が遺産として遺される。
長い歳月が經ち、今や荷馬車は、
陽光の照り渡る谷間の草地や牧草地を、
そしてまた、自然がこの上ない慈愛を注ぐ、
エスドラエロン[1]の野さながらの暖かい平原を進んで行く。
そこに、すらりとした姿態が見るからに野生的で、
黄褐色の肌を斑點が飾る、
いかにも豹に似た獨特の百合が生えてゐる――
いはゆる「豹百合（レパード・リリー）」といふ奴だ。ここでは、
栂の森の不氣味な闇がよからぬ思念を釀成し、
惡意に滿ちた魔法の力を生み出さうとする事もない。
ここの森はあたかもギリシャの海に點々と浮かぶ、

1〔エスドラエロン〕イスラエル北部の平原。

かのスポラデス諸島[2]の小島のやうだ。
だが、その優美な魅力を誰が語る事が出來ようか――
廣大にしてのどやかな大地が際限もなく起伏する樣子を、
滑らかに大きくうねる大草原の有樣を。
　さういふ喜ばしき光景が、
遠來の冒險家達の眼を樂しませた。
彼らが生れたのは、海を渡つて來た先祖達にはお馴染みの、
より苛酷な星の下に於てであつたが。とまれ、結局、
イリノイへと――數々の都市が出で來る前の、
大いなる幸ひを約束する、
惠みに滿ちた廣大な緑野へと――ネイサンの父は、
セイコー[3]の流域の荒涼たる山岳地帶から、

2〔スポラデス諸島〕エーゲ海にあるギリシャ領の植民地。
3〔セイコー〕米國ニュー・ハンプシャー州の川。

妻と息子とを連れてやつて來た。
山嶽地帶を逃れ、
苛酷な運命を和らげようとした譯だ。彼らの住處は
山奥の谷の上にあつたのだが、谷の事などはきれいさつぱり忘れたかつた。
　數年經つて、父は死んだ。
アルゴンクィン・インディアン[4]の酋長達や、先史の昔、
「インディアン塚」[5]を築いた者達と共に、靜かに永遠の眠りについた。
息子は大きくなつてゐて、農地は彼が耕した。
未だ成年に達してゐなかつたが、男らしく、
頑健で質素で、息子の姿を見る母の眼は、
屢々稱贊の涙で一杯になつた。
一人息子だつたし、母のためにとも考へて、

4〔アルゴンクィン・インディアン〕もとオタワ川沿岸及びセント・ローレンス川北部支流沿ひに住んでゐた北米インディアン部族。
5〔インディアン〕先史時代のアメリカ・インディアンが、埋葬もしくは要塞用に築いた。

息子は母親と共に、クリスト教徒として振舞つた。
ただ、彼の胸に、招かれもしないのに、
大人びた懷疑の念が忍び込む事がよくあつた。
己れの嚴肅な生の重みを彼は感じ、
また、日毎、丸太小屋の戸口から、
廣大な空間の威力を目の邊りにした。三つのインディアン塚が、
どこまでも平らに延びてゆく地平線を背景に、
緑の草原の彼方にかすかに姿を見せてゐた。
丁度、ナイルのデルタの廣大な沃野が、
春の穀物にマントのやうに覆はれる時、その遙か遠くにピラミッドが、
本物とは思へぬくらゐ、ちつぽけにぼんやりと見える、
その様子とよく似てゐた。近くに寄つてみると、
塚の頂上に木立がある。
塚の墳墓に眠る大古のインディアンの族長達から、
生命の力を吸ひ取つてゐるのであらう、

いかにも緑したたる木立であつた。
　偶々すぐそばに行つた時、骨が幾つか轉つてゐた。
珊瑚のやうに見えた。白くなつた頭蓋骨には、
蔓が卷きつき、花が美しく咲き誇り、
まるで花瓶のやうだつた。彼は息を殺しつつ、
死の上で催される花の饗宴に手を觸れた。
　身内を戰慄が走るやうな他の光景もあつた。
よく知る小羊達が雷に擊たれて死んだ。
罪無き者達――裏切られたクリストを象徴する者達。
若き純粹な心を畏怖の念で滿たすには、
それらの光景だけでは十分でなかつたが、
ミントよろしく記憶が風味を加へ、彼の心は更に大きく搖り動かされた。
夏の盛り、大草原の黄昏時、
牛の乳を絞り終つて、一人、
納屋の庭の柵の側で夢見るやうな心持に耽つてゐると、

それと鮮やかな對照をなすかのやうに、酷烈にして壯大な光景が蘇つて來た。
山嶺に山嶺が連なり、セイコー及びアモヌーサック川[6]の水源をなす、
大いなるホワイト・マウンテンズ。[7]
九月の秋分の日に、
そこで自然が猛威を揮つた。
人が自らの母たる大地からさへ、
逃げ出したいと願ふ程の凄じい猛威を。岩床なんぞは、
土臺として少しも頼りになりはしなかつた。地滑りだ！　地滑りだ！
また、山腹が裂けて開くのも見た。彼は今再び、
山の影が落ちる昔の場所に佇む――
今は荒涼としてゐるが、かつては、人里からは遠かつたにせよ、
耕地として使はれてゐた場所だ――

6〔アモーヌサック川〕米國ニュー・ハンプシャー州の川
7〔ホワイト・マウンテンズ〕米國ニュー・ハンプシャー州の山脈。アパラチア山系の一支脈。

そこに、そのどこかに、彼の伯父が眠つてゐる。
夕べに墓堀人が埋葬してくれた譯ではない。塚も無い。
伯父は跡形も遺す事なく逝つたのだ。
天の破壞力はそれほどにも凄じかつた。
　この恐怖の記憶は、
彼の心を不安にした。ある日、
數マイル離れた開拓村の粉ひき場で、
月に一度の穀物の製粉をして貰つてゐると、
ふと、窓枠の上の、
粉だらけの本に目が止つた。その表紙の有樣たるや、
スコットランド人の粉屋の綾織の衣服が粉まみれになつてゐるに等しく、
それを見れば、粉だらけの持主の察しがついた。
讀書中に人に呼ばれて、うつかり、
そこに置いたままにしてゐたのだ。
今では殆ど讀む者とて無い本、

といふのも、より過激だが、より露骨でない本が、
當節は流行つて、そちらの世評の方が高いのだから。
それでもなほ、最初に浴びせられた悪評を、
その本が拭ひ去る事は決してあるまい。
尤も――今日の目で見るならば――
理不盡で醉狂としか思へぬ評價の仕方ではあつたが。
　無愛想で單刀直入なサクソン人の口調、
ネイサンその人にも似た、普段着のままの言葉遣ひ、
深くは無いが明快で、着實な考へ方、
心底からの眞率な懷疑、
それらが、肩をふと叩かれた時のやうに、
彼の關心を惹きつけた。そこに彼は、
懷疑する肉體と、無骨な主張とを見出した。
數頁にざつと目を通してから、
「これを貸して下さい」、と熱心な口調で云つた。

怜悧な顔附のスコットランド人が、角張つた頑丈さうな頭を巡らした――
本に眼をやつたが、困惑した様子だ。
こんな本を、若いネイサンに讀ませてよいのか、
粉挽き所のためにも、さうしてよいのか、
胸中に祕めたこの異端の思ひが、
云ひ廣められはすまいか。が、若者には、
年長者の懸念などはつきり見通せる筈もない。
讀むなと云つても無駄だらう。
口外しないと誓つて、ネイサンは本を貸して貰へる事になつた。
　その晩、朧ろな燭光の下、横になつて、
彼は讀み耽り、そして眠り、恐怖の裡に目を覺ました。
ホワイト・マウンテンズの地滑り！　インディアンの頭蓋骨！
だが、恐怖の念は次第に衰へ、やがて、
默從の念が彼の心に訪れた。鈍い感じの思ひだつたが、
心の安らぎは少しも得られなかつた。すつかり印象の變つた大地を、

彼は不機嫌な面持ちで耕した。エデンの園を追放され、
飢ゑ渇き、もはや祝福もされず、
恥辱の裡に賢くなつた、かのアダムさながらの心境で。
墮落して仕舞つたのだ！　しかも、この難局に際し、
ネイサンには己れの病を癒してくれるものが何一つなかつた。
子としての情愛を幾ら母親に示してみても、
癒しの役には立たなかつた。けれども、
かの理神論者の猛烈な威力は、大草原を覆ふ炎よろしく、
彼の胸中に花開いてゐたパンジーの數莖を燒き盡くして仕舞つたが、
それはただ、土地を綺麗にして、
新たな雜草が芽を出す準備をしただけの事だつた。
　事實、やがて、それ迄とは違ふ氣分が芽生えて來た。
神は從來の地位を追はれ、
凪と嵐の世界の只中へ出て行つた。
今や、小さな孤島さながらの森の近くで耕しながら、

夢現つで、孤獨な思ひが訪れるのを彼は感じた。
彼の手で初めて掘り返された土を、
夢現つで、そこに見た。さういふ風にして精神が養はれると、
汎神論の支配の芽が、必ずや、
しかも自然に、活氣づけられる事になる。
その影響は、必ずしも憂ふべきものではなく、
今、我らの新しい半球にも力を揮つてゐる。
あたかも、遙か昔、トラキア[8]の森の住處から追ひ立てられて、
ひそかにこの地に忍び込み、
この地に昔の支配の復活を試みんとする、
牧神パンや異教の神官さながらに。
　森の中、父の墓の上を、
穏やかに搖れる木立の間から、

8〔トラキア〕バルカン半島南東部、マケドニア北東地方の古名。後にローマ領となる。

西風の神ファボニウス[9]が低い息を吐いて、
玉蜀黍をそよがせる時、
如何に屡々、彼は鍬を動かす手を休め、
それに凭れ、耳を澄まし、
意に反して異教に引かれゆく心の戰慄を感じた事か。
　矢のやうに歳月は過ぎた。だが、歳月が經てば眞理が掴める譯ではないし、
長く生きれば益がある譯でもない。
それどころか、時は悲しみをもたらす。
彼の母親に――穀物よろしく死を取り入れる處から招きが來て、
取り入れの鎌がふるはれる收穫の頃、
彼女はかの自然の悪役、死神に刈り取られた。
　今は收穫の女神ケレース[10]の胸が豐かに膨らむままにして置かう――

9〔ファヴォニウス〕（ローマ神話）西風の神。
10〔ケレース〕（ローマ神話）穀物、實りの女神。

玉蜀黍の束が、樂しげな金色の穂をつけて、
丸太小屋の周りに豐饒の勝利の印を、
輝かせるままにして置かう。だが、
豐作を壽ぐ死神と、お前は折り合ひがつけられるのか？　――信じる事だ、
信仰を得て、もはや悲しまなくなる事だ！
しかし、如何にして？　ネイサンの家の周邊の、
人口の稀薄な地域に、一つの宗派の人々が散在して暮してゐた。
奇怪な宗派で、最近も内部で抗爭を起したりして、
眞實で善良な生活とは無縁な信者も少くなかつた。
崇高な儀式や教義を憎み、
輕蔑する一方、
自らの愚劣極まる作り話にはしがみつく手合――
悲慘と云はうか、歴史に汚點を記す最新の輩だ。
ネイサンには不愉快なだけだつた。彼の心は、
道を踏み迷つてはゐたものの、下劣な性ではなかつたから。

ただ一人、「懷疑」の凍てつく極點で、
人間の始祖さながらに、
彼は原初の信仰の様々な形と搭闘した。
胸中の嵐ゆゑに、思考は纏まらなかつたが、
やがて彼の魂は成熟し、
具體的な形態や觀念を形造るのを待つまでになつた。
思ひもかけぬ處から、
彼を大きく動かす力が到來した。
　湖岸に新しく出來た港町の穀物市場で、
偶然、ネイサンは一人のユダヤ人女性に出遭つた。
彼女が彼の身邊に投げかけたのは、海の精ネーレーイスの愛の網や、
怪しげな恋の罠ではなかつた。彼女はモーゼの姉ミリアム[11]のともがらだつた。

11〔ミリアム〕モーゼとアーロンの姉で女預言者。舊約聖書「出エジプト記」第十五節第二十節、及び同「民數紀略」第二十六章第五十九節參照。

彼女、アガルの淑やかさの裡には預言者がゐた——
紛れもない預言者だが、女らしい女でもあつた。
旱魃に苦しむレパイム[12]の谷やラマ[13]の野に、
惠みの雨が降つた時さながらに、彼は彼女を有り難く感じた。
云ひ寄られる前に、自ら愛を求めて來た。
「おいでになつて、あたし達の處に」。愛は力だ。
應じる氣になつてゐた正にその時、その不思議な申し出がなされた。
それどころか、いつそヘブライ人になつたら？　いいではないか？
崩れ行く信仰といふ、現代人の運命の背後に横たはる現實を、
どこまでも遡つて探求して行つたら、深奥に立ちはだかる壁として、
ローマとルターの遙か背後に存在するのは——一體何か？
シナイの岩山ではないか。しからばそこに、

12〔レパイム〕エルサレム南方の平原。
13〔ラマ〕ベツレヘム近郊の地名。

汝をしかと落ち着かせるがいい。堅牢この上なしの場所だ。
　なほもアガルはシオンの地の事を物語る。
輝かしい魅力がネイサンの心を捉へる。
全ては儚いものではないか――
この愛と、愛する人のエルサレムとを除けば。
アガルがダビデの歌を唱ふと、
大祭司を戴く民族への興味と、
彼らへの畏怖の念とが、
感受性の強い心を滿たした。
　確かに情熱の働きだつた。けれども、
それは彼の血の中に潜むピューリタン的な情熱で――
明らかにヘブライなるものに源がある譯だが――
その力の向きがここで變つて、
大きく屈曲したのだ――それしか道はなかつたのかもしれぬ。
かてて加へて、生眞面目な性格だつたから、

當初は不信の念に苦しんだ譯だが、
今や、反動が起り、自然の勢ひに驅り立てられて、
強い信仰の虜となつた――かつて、不信の念ゆゑに斥けたものより多くを、
信仰するに至つたのだ。
あたかも、信仰の方向に向き直るや、
そこからの餘りの距離の大きさゆゑに、突進力に彈みがついて、
的を飛び越えて仕舞つたかの様な按配だつた。
アガルは大いに喜んだ。彼女には解らなかつたのだ、
ネイサンのやうな性格の男が情熱の虜になると、
彼女の守つてゐる適切な限界なんぞ、
踏み越え兼ねないといふ事が。苦樂を共にせんとて、
二人は結婚した。心情に於ても教義に於ても一つとなつた。
權利書もろとも農地を讓り渡し、
田園生活から完全に身を引き、
商賣をたつきとして、繁盛した。二人の子供に惠まれた。

彼の心は落ち着き、妻も悲しむ理由を持たなかつた。
けれども、歳月は破壞する。もしくは、彼の心が、
（依然、神話を悉く確信する一方）
ユダヤ人の地道な考へ方に飽き足らなくなつた。
精力、活力、冒險心、意志力に充ち滿ちた、
彼の北部人らしい氣象が、
ヘブライなるものを強く好むに至つた今、
とりたてて活動もせず、
空しく慣習を守るだけでは詰らなくなつたのだ。
どうにかして神祕の光輝を力あらしめ、
はやり立つ活力の捌け口を見出さねばならぬ。
　ヘブライの預言者達は告げてゐる、
やがてユダ王國が盛時の力を恢復すると。
それは間近に起る、さう考へるクリスト教徒もゐる。
さてこそ、目的が出來た、あとは立ち上つて實行あるのみ！

種を蒔き土を耕し、聖地を新たならしめ、
その復活の手助けをするのだ。
　異境に住む熱烈なユダヤ人の中には、
今なほ非ユダヤ人の慣はしを忌み嫌ひ、
夢に忠實であり續け、
過越の祭日に、かう挨拶を交はす者もゐる、
來年こそは、エルサレムで！
今や、ネイサンが妻の方に顏を差し向け、
過越の祭の日、朝の光線を浴びながら、
それらの言葉を呟いた。
妻は驚き、無言のまま、横になつてゐた。
その古い言葉の中には新しい意味が、
夫の陽氣な調子の中には、聲を落として語らざるを得ぬやうな、
嚴肅な氣分が潜んでゐた。
彼女は夫の嚴しい精神を知つてゐた。

それまで、深刻な夢想に耽る夫を見守つて來た。
感傷的な氣分を振り回す夫ではなかつた。
では、どうしたらいい？　どうやつて思ひ止まらせれば？
嗤ひのめしてやつたら？　が、そんな事をしたら、信仰を否定して仕舞ふ事になる。
立ちはだかつて沮止したら？　しかし、彼女は優しく夫を愛してゐた。
とどの詰り、よくある事だが、
アガルの場合も、
大膽な意慾が強い懸念を壓倒する事になつた。
　美しい田園も團欒の魅力も、もう十分味はつたとて、
夫婦はそれらを打ち捨て、一切を賣り拂ひ、
娘のルツ及び腕に抱いた幼子を連れて、海を渡つた。
シャロンの平原に土地を確保し、
小屋を幾つか建て、土地を守るべく、
防壁を築いた。苛酷な仕事だつたが、結局は徒勞でしかなかつた。
堅固な砂漠の修道院も、

梯子を使つて破つてしまふ、さまよへるアラブ人達が、
（そんな事は犯罪とも罪とも思つてゐない）
いつもの巧妙なやり口で、ネイサンの防壁を急襲し、
財産を奪ひ去つたのだ。補償も何もありはしない。
法律などありはしなかつたし、あつたにしても、
誰も本當の證言などしはしない。ネイサンは決斷して、
アガルをルツ及び幼子と共に、
城壁で守られたシオンの町に住まはせ、
自らは心を家族から引き離し、
シャロンの野で最惡の事態に立ち向ふ覺悟を決めた。
忠實な三名の從者と共に、
武裝せる農夫となつた。ピークォッドの荒野に埋められた、
かつての彼の父祖達がやはりさうだつた。

父祖達はピークォッド・インディアン[14]をヒッタイト[15]と、
神に敵對する有害な輩と看做してゐた。
ネイサンもこの地のアラブ人を同樣に看做した——
懲罰の鞭に値する奴隷どもと。
そしてそれを彼は公言し、ために憎まれ、
自らの境遇を一層危險なものとした。
　今や從者達は銃を抱いて眠つた。
敵に圍まれた土地を、
晝夜交替で彼らは見張つた。それでも、
シオンの城壁の中の家族を訪れる回數を、

14〔〔ピークォッド・インディアン〕十七世紀初頭、米國ニュウー・イングランド南部に住んでゐた好戰的なアルゴンクィン族インディアン。
15〔ヒッタイト〕小アジア及びシリアに強大な帝國を築いた古代民族。

ネイサンは減らしはしなかつた。
アガルは涙ながらに、
城壁の中に一緒に住んでほしいと訴へた。「お願ひ、
行かないで！　一緒にゐて。家族は一緒でなければ。
あたし達の間に隔たりを作らないで。恐しい不安の影があるからといつて、
どうして分かれて暮らさなければいけないのですか？
お願ひ、シャロンを捨てて。子供達の許に戻つて。
あたしと子供達を守りながら、
神様にお仕へして。あなたの命にかかはるやうな爭ひが起りでもしたら――
そんな豫感がする――だめ、行かないで！」云ふや否や、
彼女は夫に抱きかかつて、しがみついた。
　妻の哀願を、ネイサンは心で感じる事は出來たものの、
その心は熱情に凝り固まつてゐた。
やがて幼子が死んだ。
彼の胸は痛んだが、目的を放棄する事はなかつた。

けれども、時間といふ殘酷な力は、
小枝よろしくか細い生にしがみつく獲物を、
猫のやうにしなやかに、そして辛抱強く待ち受けてゐる。
そして、宿命は、待ち伏せの場所から飛び出して、
そこらをうろついてゐる者をいづれは捕まへ、
豫期し得ぬ歸結へと引き摺つて行く。
正にさうしてネイサンの運命は定まり、その生は短く斷ち切られた。
だが、その前に、まづ、アガルの心は、
夫が優先して支配出來るものではなくなり、
續いて、思慮分別が好ましい結果をもたらさず――
信頼が壞れる事態を迎へるに至つた。けれども、時の流れの彼方、
行手に待ち受ける斷崖について、ここではまだ語るまい。
これから物語る出來事が、自ずとそれを語るであらう。
　かうしてネヘミヤは、
スケッチ風に物語を語つてから、

クラレルと宿屋で別れた。
やがて、夕暮れ時となつた。

第十八章／夜

凪のせゐで船出の遅れた幾艘もの帆船が、晴れた日に、
格好のよく似た二つの岬の沖合に集結する、
まるでそんな風に、緑の大海原さながらのダマスコの平原に、
白い船隊よろしく、
森や庭園に圍まれた邸宅が、
立ち竝んでゐる。
　太陽がセント・ソフィア大聖堂[1]を金色に照らす頃、
ダマスコの平原では、尖塔に陽光が當る事はない。
それが面白くないとて、尖塔は後に陽光をたつぷり奪ひ取る事になるのだが、

1〔セント・ソフィア大聖堂〕コンスタンティノープルにある寺院。紀元前五三七年に建てられ、ビザンティン建築の典型として有名。

それはともかく、未だ尖塔に日が當らない頃、むしろ平安を求める心は滿たされる。
夕暮れの和らいだ雰圍氣の中、果樹園で、
緑色のターバンを頭に卷いた預言者の息子が、
穩やかに、族長らしい雰圍氣を漂はせつつ、
果物を取り入れる。
エデンさながらの果樹園の、枝分かれした幾つもの小川が、
處々で小徑の蔭に隱れたり、顏を覗かせたりしてゐる。
清冽な小川、それはあの日、アブラムの下僕の——
例へば穩和なエリエゼル[2]が、物思ひに耽りつつ、
同じ小川の土手を通つて、
カナーンに張られた天幕へと赴いた、
あの日と何も變つてはゐない。ヘルモン山[3]から、

2〔エリエゼル〕舊約聖書「創世記」第十五章第二節參照。
3〔ヘルモン山〕シリア南西部とレバノン國境の山。

冷氣が漂つて來て、夢の中に雪が現れるやうになると、
薔薇の熱情は靜められる。
その一方、人間の聲音を和らげて、
それを超越した音調に達しようといふのか、
森の修道院から、夕べの祈りを唱へる無垢なる者達の聲が、
いとも祕やかに忍び寄つて來る。
その歌の調べは、色彩に喩へるならば、
アンジェリコ[4]よ、汝の壁畫の全體を彩る色彩のやう、
そしてその優しい色は溶けて見えなくなつて行く――
夕日の光のやうに、衰弱して、消え失せて仕舞ふのだ。
　だが、見るがいい、高い木々の梢でかさこそと鳴る音に誘はれて、
老いも若きも、人々が屋上に登つて來る。
高い處が好きなのだ！　彼らの群がる様を見よ。

4〔アンジェリコ〕（一三八七～一四五五）イタリアの宗教畫家にして、ドミニコ會士。

やがて、月が樂園から昇つて來る。

けれども、ここ、エルサレムでは、
薄暮の頃、人々がそんなに足繁く、
屋上に登る事はない。たまに、少人數の塊りが、
二つ、三つと、遠方に認められるか、
或は誰かが連れもなくたつた一人で、
檣頭に立つ若い水夫よろしく、
星が出るのを見つめてゐる。クラレルもまた、
そんな風にして、默然と佇んでゐた。視界の開けたテラスに面して、
丸天井の部屋があり、
テラスの下には、小さな丸屋根が、勾配をなして竝んでゐる。「嘆きの日」[5]の黄昏が、

5〔嘆きの日〕毎週金曜日、ユダヤ人が「嘆きの壁」の前に集まつて、聖なる都の荒廢を嘆き、その恢復を祈る。

いつのまにか過ぎて行く。
記憶に新鮮に殘るかの背教者の物語を、
今、クラレルは考へようとした。
が、彼の思ひは寧ろルツの運命に、
どこまでも不幸の纏はりつく彼女の身の上に向けられた。
しかし、奇怪にも、彼女について何を考へても、
考へてゐる心の底には、チェリオの面影があつた。チェリオ——
現身を求めても得られなかつた彼が、今や、立ち現れたのだ、
あたかも、彼の靈魂が、
大氣の中や心の中を彷徨つてでもゐるかのやうに。
　クラレルは室内に戻り、不安な氣持が請ひ求めてやまぬ、
かの眠りといふ施し物を手に入れようとした。
が、それは彼には得られなかつた。
といふのも、眞夜中は己が全ての墓所を打ち壞し、
遙か遠く、朦朧たる幻影の中に、

なほもチェリオの姿を浮かび上がらせたからだ――
おぼろな影の如き惡鬼や天使が爭ひ犇めく中、
青ざめて打ちひしがれ、今にも氣を失ひさうなチェリオの姿を。
やがて、クラレルは再び屋上に出て、
ぎくりとした。と云ふのも、さして遠からぬ邊りに、
何やら怪しげない物體を目にしたからだ。
丸くなつて、頭巾を被り、頭を垂れ、
胸ぐらゐの高さの胸壁の下に蹲り、
明滅するかすかな光を放つてゐる。
それは動いて、低い聲で呟いた。タリト[6]を纏つて、
深い祈りの最中にゐるアブドンであつた。
祈祷に用ゐるその珍しい肩掛けは、古いインドの織物で、

6〔タリト〕ユダヤ教徒の男子が朝の禮拜の時、頭や肩に掛ける毛織や絹織の肩衣。

謎めいた文字が金絲で編み込まれてゐる。
かの「きユダヤ人」は、
祈りは眠りに優る、との云ひ傳へを守つてゐたのであらうか。
イスラム教ではさう云ふのだ。アブドンが立ち上つた。
星空の光に照らされて、タリトが微光を放ち、
刺繍の文字が流れるやうな神祕の動きを見せる。
それを肩から外して、
こちらを向いたが、クラレルが近くにゐる事には氣づかない。
クラレルに見られてゐなかつたら、そのまま通り過ぎてゐただらう。
けれども、クラレルが聲を掛けた。相手は迷惑さうな樣子をした——
中東に生きるユダヤ教徒が祈りに夢中になつてゐる所を、
ユダヤ人ならざる者に見られたからだ。だが、こちらの一言を耳にするや、
不信は拂拭され、善意は恢復された。
「待つて下さい」、とクラレルは云つた、「まだ行かないで。
何か影のやうなものが、正體は解りませんが、

僕につきまとつて離れないのです。何かの豫兆なのかしらん？　ほら！
あの、暗闇をつんざくやうな叫び聲！」
「あれは、今しがた世を去つた靈魂のためのもの。
この町の習はしで、ああいふ叫び聲を上げるのです。
死の一撃が振り下ろされるや、
看取つた者が息を吐き出す」。
「まただ！　まるで、裂け目から踊り出る、
火炎の舌さながらだ」、さう云つて、クラレルはひつそりと佇んだ。
「かうして運命が不吉な豫兆を成就する、それはあり得る事なのか？
その種の兆なるものを否定する事にかけて、
僕は人後に落ちない。――けれども、ほら、震える聲が云つてゐる、
すべては終つた。でも、僕等は知り合へたかもしれなかつた――
ほら、聞いて。また叫び聲が。
彼のために叫んでゐる――やつと見つけた――いや、違ふ、逝つて仕舞つたのだ！」

第十九章／成就

何たる激烈な情熱か！　――けれども、言葉など無くても、
人は心の絆を作り得る事を忘れたか？
魂の共感は、
生きる社會を共にするが故の共感を凌駕する。さればこそ、
クラレルは何かしらを豫感し、
不安に戰き、
それが的中したのであつた。
　然り、實はチェリオは、
嚴重に閉ざされたテラ・サンタ[1]の中庭よりも、

1〔テラ・サンタ〕エルサレムにあるローマ・カソリック系修道院。

更に隔離された避難所を求め、
町の奥深き處に己れを埋めて隱遁生活を送るべく、
隱れ家を見つけ、
そこで、ひどい呼吸困難に苦しんでゐたが――
佝僂がよく襲はれるやつだ――
三日後、病勢が悪化した。
チェリオはそれを身體に感じ、最期の時が來た事を知り、
壁の方に身體を向け、とはの眠りに就いた。
　今際の時を看取つたのは、シリア人達だつた――
シリア人の女達が、死者を悼むべく、
耳をつんざく叫び聲を上げたのだ。さういふ事以外にも、
クラレルは隨分多くの事柄を知つた。そして、他の何を措いても、
死せるチェリオの遺した物を手に入れようとした。
昂奮の餘り、恐怖も感じず、
躊躇など覺える暇もなかつた。チェリオの持つてゐた本の頁をめくり、

手がかりになるかも知れぬ頁を見つけ、
餘白に書留められた日々の思ひを辿つた。
第二の自己を、そこにクラレルは見出した。
しかも、より強靱な自己を――といふのも、下げ潮よろしく信仰の波が引いて行き、
むき出しになつた原初の大地にありとある問題が蘇つたが、
チェリオの心は臆する事なく、それらに立向つてゐたからだ。
しかるに、見よ、運命の手にからめ取られ、
冥府へ下る急峻な坂を、彼は驅け下りて仕舞つた。
歳月が恐らくはより多くの展開をもたらす前に、
前進の途上で生命を斷ち切られて仕舞つたのだ。
夭折する者は人生の物語を半分しか語らない。
で、それからどうなるのか？　死とは書物の卷末の遊び紙か？
その先には何も無いのか？　もしあるとして、
死は如何なる記録を踏みにじる事になるのか？　いかにして、
永遠の中に解き放たれる事や、

時代を超えて前進し續ける事を沮止するのか？
永遠の世界では、木は倒れたままの格好で轉がつてゐる事はない。
といふのも、神の御言葉と御心とが、
人間共の言葉を通じて、その眞意を如何に歪められる事になつたとしても、
完璧な成就に至らぬものは、何であれ、天の定める所ではないからだ。
以上の如き想念が、クラレルの腦裏を走り抜けた。

第二十章／灰の谷間

人影もまばらな市街地の彼方、
エフライム門[1]の北方に、
「灰の谷間」はある。
乾いた谷間に川水が流れる時もあつて、
それが溢れると、キドロン川[2]の源流となる。
歩ける道も無く、人が踏み込む事も滅多に無い小さな谷間。
それに沿つてかなりの距離を南下すると、
舊市街の城壁の側で勾配が急に嶮しくなり、
深い溪谷に降りて行く事になる。

1〔エフライム門〕ダマスコ門の別名
2〔キドロン川〕エルサレム東部のヨルダンの峡谷に發する小川。東流して死海に注ぐ。

そこで――預言者ヨエル[3]の熱烈な物云ひを、
謎めいた夢物語と見なさぬならば――
大天使の喇叭が死せる國々の民を廢滅から呼び出し、
メルキデゼクの窪地[4]と稱せられる、
一つの裁きの場[5]に集めたのだ。
　古い碎石場の側にある、かの上流の谷間は、
疲れた者達のためには憩ひの場となる――
日差しを遮る洞窟の入口や、ひんやりする石のベンチ、それらは、
灼熱の風土では實に有難いものだ。
この人里離れた森嚴なる場所に、
僧達は――タルムードの記録によれば――
祭壇から灰を運んで來て、ここに置いた。

3〔ヨエル〕紀元前五世紀のヘブライの預言者。
4〔メルキデゼクの窪地〕ヨシャパテの谷の事。
5〔裁きの場〕舊約聖書『ヨエル書』第三章參照。

灰は塵埃を離れた場所で淨められ、
平安な林間の空地で吹きすさぶ風から守られてゐる。

棺が終着地に着くのを見屆けてから、
クラレルは今度はこちらに向かつてやつて來る。
チェリオの墓から遠く離れたこの谷間に。
といふのも、死者のために口を開いたばかりの地面から、
暫し遠ざかりたかつたし、異邦人達がうろつき、
陰鬱な儀式の雰圍氣が漂つてゐるその場所に、
長居をしてゐたくなかつたのだ。
　この靜かな谷懷に引きこもると、
鎭痛劑よろしく、自然の影響が
クラレルの全身の血管に行き渡り、
心臓にも達して、心と腦髄に落ち着きがもたらされた。
かの老いたる同志も傍らにゐて、

慰めの氣持を分かち合つた。しかし、その氣持もやがては消え失せ、
丘陵の草地を覆ふ秋の雲の影よろしく、
その上に暗い影が忍び寄らうとした時、
老人の氣分が一變した。
獨り言を云ひつつ彼は聖書に讀み耽り、
それから振り向いて、顔をぱつと明るくして云つた。
「聞こえる、聞こえる、心の中に。
クリストに於ける友よ、音がどんどん大きくなる——
インマヌエル[6]の喇叭の音が」。
無論、幻聽でしかない。だが、
彼が屢々、未來の時がもたらす筈の繁榮や歡喜について、
天與の贈物としての平安に充ち滿ちた世界について、

6〔インマヌエル〕イザヤによつて誕生を預言された救世主の名。舊約聖書『イザヤ書』第七章第十四節參照。また、イエス・キリストを呼んだ名。新約聖書『マタイ傳』第一章第二十三節參照。

豫告するやうな事をした場合には、
世人の關心をより強く惹きつける事もあつたのだ。
それにしても、この孤獨な男が、
人の世について夢を掻き立てる事は出來たとしても、
信仰の至福について自ら何を知つてゐたのであらうか。
しかも――生涯の終りに近づいた今――
自ら請け合つた當のものすら、彼には掴まへられさうもなかつた。
　二人は靜かな林間の空地を通つて歸途についた。
道々、上に記したやうな樣々な思ひが、
クラレルの心を漠然とながらかき亂した。
だが、城門を潛るとネヘミヤが云つた。
「まだおいでになつてゐないが、
私の宿はなかなか快適な處です――いかがです、ご一緒に」。

第二十一章／陋巷

エルサレムの人目につかぬ處に、
むさ苦しい通路や細道や路地が走る、地面の荒れ果てた一帶がある。
さういふ處には、普通の案内人を雇つた場合、
巡禮者は滅多に近づけないし、足を踏み入れる事もない。
地元の案内人すら、そこでは慎しやかになる。
諸君も慎しい態度でついて行かねばならぬ。
しかも徒歩で。なぜなら、そこは駱駝が通らない——
市内の他の場所では、駱駝は街路を闊歩し、
通行人の上着をこすつたりするが、
そこは、駱駝も、馬も、騾馬も、小さい驢馬さへ通らない。
兩側から壁の迫る幾つかの脇道は、
あたかも狹い谷間のやう。家々はみな、そこかしこが破れたり壞れたりしてゐて、

今にも崩れ落ちさうな危險な有様――荒涼にして險悪、
ホレブ山[1]さながらだ。或は、ホーン岬の枝角とも云ふべき、
ハーミット島[2]と稱せられる、かの岩山のやうだ――
さういふ家の中の、汚れた部屋や廊下で、
顎髭の生えた牧夫が顎髭の生えた山羊達を飼つてゐる。
完全に見捨てられた家もあつて、略奪された墓穴さながらに、
不氣味にも、口をぱつくりと開けてゐる。
この場所では、一人切りの場合には、氣をしつかり持たうとしても、
誰かに出會つたりすると、ぎくりとせずにはゐられない。
けれども、ここに隱れ潜む者もゐる、人間が潜むのだ――
乾いた井戸に棲む蜥蜴のやうに、もしくは、

1〔ホレブ山〕シナイ山の別稱と云はれる山。モーゼが神から十戒を授かつた場所。舊約聖書『出エジプト記』第三章第一節參照。

2〔ハーミット島〕ホーン岬の北西十六キロの處にある島。

海を行く船の、船底の龍骨の邊りに隠れる密航者のやうに。
罪を犯した者、罪を悔いる者、惨めに破滅した者、
世を捨てた者、身よりの無い者、
身内に捨てられた者、
追手を恐れ苦悩する者。
マムルーク王朝[3]のエミム・ベイがさうだつた[4]——
武装してゐたし、幸ひ、馬術が巧みだつたから——
カイロの恐るべき城塞を飛び越えて、
逃亡した。血を流しつつ、

3〔マルムーク王朝〕昔、エジプトで勢力を揮つた武士階級。元來、イスラム教に改宗した白人奴隷階級であつたのが、十三世紀中葉以降、その隊長を王として支配階級となる。一八一一年、エジプトの太守メヘメット・アリに絶滅または潰走せしめられる。

4〔エミム・ベイ〕メヘメット・アリの手を逃れ、カイロの城塞から逃亡した、マルムーク王朝派の一人。

騷然となつた小道を息を切らして走り拔け、
砂漠に至り、なほも活路を切り開き、
狐さながらに突つ走り、
シオンの町でつひに追ひ詰められ、そこで深手を負ひ、
身體が動けなくなり、穴藏に踞り、
その儘の姿勢で死んだ――さうしてゐるのが一番安全だつたから。
　この種の人々は、程度こそ異なれ、それぞれに、
何らかの信條によつてもたらされた、熱狂の虜になつてゐる。
彼らは、畏怖すべき神話を心に信じ、
この地に、生まれた土地に、世界の中心を見出す。
そして、狡猾な世間を後ろに殘し、
目を見開いた儘、恍惚感に身を委ねる。
あたかも、聖書に登場する預言者が、
夢遊病者よろしく、戸外を歩き回る時の如くに。

第二十二章／隱遁者の住まひ

人々が隱れ棲む、怪しげな裏町を、
聖者と學生は歩いて行く。
道に積つた埃が足許から舞ひ上がる。
テーバイの墓の中で久しく眠るミイラの上に、
澤山積つてゐるやうな埃だ。小道を拔け、
小さな廣場に出る。荒れ果てた場所。
塔に周りを閉ざされてゐて、物音一つせず、窓もなく、
人の氣配もしない。餘りに荒涼としてゐるので、
ふと、奇怪な想念が心に浮かぶ。
塔の蔭を、何かが秘かにうろついてゐるのではあるまいか。
　アーチ門があつて、丁度、顎が落ちた時のやうな格好で、
要石が半ばずれ落ちてゐる。二人は門を潛つた。

拒絶する者も歡迎する者もゐない。
階段を上つて、二階にある部屋に入り、
低い小さな窓から外を覗くと、
やはり閉ざされた侘びしげな中庭が見える。
崩れ掛けた壁、その物悲しげな表情が漂はせてゐるのは、
罪ゆゑに生じると云はれる絶望感であらうか。
懲罰の鞭の下にひれ伏しながら、か弱い聲で訴へた者への、
かの預言[1]が成就したのだ。
なにゆゑ何時までも忘れてゐたまふのか――
かくも久しきに亙つて見捨てたまふのか、おお、神よ。
しかし、クラレルは身體を巡らし、

1〔かの預言〕舊約聖書『イザヤ書』第六章第十一～第十二節參照。「こゝに我いひけるは、主よいつまでかくあらんか。主こたへたまはく、邑はあれすたれて住むものなく、家に人なく、邦ことごとく荒地となり、人々エホバに遠き方までうつされ、廢りたるところ國中におほくならん時まで、かくあるべし」。

今度は室内により注意深い目を向けた。
床にはタイルがぞんざいに張つてあり、
人の憩ひの場所らしいしるしは殆ど無く、
ただ、貧弱な衣服箱と、寢椅子と、椅子とだけがあつた。
何と安らぎのない隱遁者の家であることか。
天井は低く、剥き出しの梁は、
ヨッパ[2]の海岸に流れ着いた難破船の木材だ。
木材に使へる樹木は、この土地に殆ど生える事はない。
寢椅子の上に、部屋の主人が腰を下ろした。
歩き疲れて、息が荒い。それでも、
額と頭の天邊から玉のやうな汗を拭ひつつ、
親切な心で、微笑みかけようとした。
　と、その時、小さな足音が、

2〔ヨッパ〕ヤッファの古名。ヤッファはイスラエル中部の舊港市。一九五〇年、テル・アヴィヴと合併。

輕やかに聞こえて來た。靜寂の中、
ウヅ[3]の地に聞こえる駱駝の鈴の音さながらに、
足音は鳴つた。「ほら、彼女がやつて來る――私の鳥が」。
豫期せぬ喜びに、ネヘミヤが叫んだ。
「クリストに於ける友よ、神の御使ひが來るのです。
私のために食べ物を持つて」。
やがてノックする音がして、
ネヘミヤは扉を開けた。
ルツが一人で立つてゐた。
粗末ながら清潔なナプキンにくるんだパンの塊を抱へてゐる。
他には水差しだけを持つてゐた。
それらの施し物とか、雪のやうに白くゆつたりとした衣服とか、

3〔ウヅ〕死海とアカバ湾との間の古代の地域、エドムの荒野のさびれた一帶。

編んだ髪の部分をすつかり隠してゐるヴェールとかは、
女神ウェスタに身を捧げた乙女の純白、もしくは、
尼僧の慈愛のしるしなのかも知れない。
　ルツの口から聲が出掛かつた。が、視線が、
親しげに挨拶を交はさうとして、そこで停止し、
言葉が口から出るのを抑へた。そして、廣々とした空を背にしつつ、その視線は、
見知らぬ人間の姿の上に落ちた。ルツの持參して來たものを受け取りながら、
部屋の主人が云つた。「私の鳥よ、お入りなさい。
善き行ひが罪であつた例はない。
神様の祝福がありますやうに」。涙が一杯にあふれてきて、
彼の目は曇つた。が、彼を避けるやうにして、
ルツはその場から離れて行つた。「はて、飛び去つて仕舞つたか」、と彼は呟いた。
「あれは毎日、私の處に來てくれる鴉[4]なのです。

4〔鴉〕舊約聖書『列王紀略上』第十七章參照。エホバの命により、預言者エリヤは鴉に養はれる。

でも、今日はどうして、あんなに恥づかしがり屋になつたのだらう」。
パンを一緒に食べようと、
彼は手で合圖をした。クラレルは、
その申し出を斷つた。かくて、絶海の孤島に捨てられて、
一人暮しをかこつロビンソン・クルーソーといつた態で、
隱遁者は一人パンをちぎつた——
もつとも、その前に、
左手にパンを持ち、右手をより高く擧げ、
目は天を見詰めつつ、祈りを捧げた。
　やがて——食事が済むと——若者はうまく話を持ちかけ、
色々な事柄を聞き出し、
つひにルツと彼ら自身とが結びつく所にまで話は及んだ。
彼女の父親についても、老人は語つた。すると、不思議な事に、
この熱情家の顔にある種の微妙な變化が訪れた——
穩やかではあるが、確かに優越感を示す表情の變化が。

「ネイサンといふ男、哀れとしか云ひやうがない。なんたる錯亂であらうか。
今のこの時代に、ユダヤ教に改宗するとは。
クリストの錫杖がアーロン[5]の牧杖に屈服するなどと考へるとは。
刈り入れ時に、輝かしい喜びに充たされながら、
ソロモンの草刈鎌が穂を刈る様が見たいなどと思つて、
自らの畑を耕すとは。なんともはや――
救はれぬ男と思ふしかない。夢を、ただの夢を見てゐるのだ――――夢、正に夢でしかない」。
「しかし、あなたも、あなたにしても、ユダヤ民族の再興を、
強く眞面目に信じてゐる」。
「その通り、我らの主の先觸れとしてな。――
氣の毒な男だ。弱い、正にここが」――
指で額に触れながらネヘミヤは云つた、「あの男は間違つてゐる」。

5〔アーロン〕モーゼの兄で、ユダヤの最初の大祭司。舊約聖書『出エジプト記』參照。

クラレルは返事の仕様が無かつた。
ただ、内心、ネイサンにしてもネヘミヤについて、
同じやうに考へてゐる筈だと思つた。
後日、それは證據によつて確認される事となる。
が、今は、またもや様々に思ひ惑ひたくなかつたので、
クラレルは氣持を切り替へ、
娘についての夢のやうな思ひに浸らうとした。
つひ今しがた、彼女は部屋に光を投げかけてくれた。
ペテロを救ひに[6]、夜、
牢獄に姿を現した天使さながらに。と思ふまもなく、
人の呼吸する音が聞こえて、クラレルは振り返つた。
老人が寢息を立ててゐた。その顔は、

6〔ペテロを救ひに〕新約聖書『使徒行傳』第十二章第一節〜第十九節參照。

忘我の境にある事を示してゐたが、自我を喪失して、
全てが硬直した、かの死の印象とは違つてゐた。一切が凍りついた、
死の假面。なんぴとも、それを刺し貫いて、
假面の下にあるものを推し量る事は許されない。
死は凍らせる、が、眠りは解きほぐしてくれる。そんな雰圍氣を漂はせつつ、
この部屋の住人は横たはつてゐた。顏に皺が幾筋か見えてゐた——
眠りから覺め、生氣が蘇る時、それは消えて見えなくなる。
この皺は一體何を意味してゐるのか。が、それを問ふのは、今は止めて置くとしよう。
けれども、クラレルは強い恐怖を感じた。
幻が目を前を通り過ぎ、何事かを口にした時、
あのテマン人エリファズ[7]が感じたのと同じ恐怖を。

7〔テマン人エリパズ〕舊約聖書『ヨブ記』參照。ヨブを慰めに訪れた三人の友人の一人。「即ち人の熟睡する頃我夜のまぼろしによりて思ひ煩ひをりける時、身におそれをもよほして戰き骨節ことごとく振ふ。時に靈ありて我面の前を過ぎければ我は身の毛よだちたり」(『ヨブ記』第四章第十三〜十四節)。

己が思念と戦ひながら、彼は部屋を忍び出た。
ネヘミヤは眠つたままだつた――
ただ一人、鍵もかけられてゐない部屋に、
空の墓穴の中に置かれた石のやうに、安全に。
石には誰も手出しはしない。なにしろ、それは無なのだから。

第二十三章／路地裏

翌日、さまよへる老人は近附いて來て、
いつものやうに謙虚かつ陽氣に挨拶をして、
クラレルを驚かせた。つい昨夜、
眠りながら浮かべてゐたあの表情は、今は何處へ。
あれは俺が夢に見てゐただけだつたのか。今や跡形もない。
　けれども、聖者の頭には、何やら別の考へが浮かんでゐて、
きつと良い結果をもたらすに違ひないと思つたものだから、
自らその意味がよく解らぬながら、強く驅り立てられたやうな氣持になり、
再びクラレルを導いて、
自らのねぐらから遠ざかる事になりながらも、
更にうらぶれた狹苦しい裏道を通り抜け、
蔦の這ふ壁が片側に立つ、

とある路地裏にやつて來た。
窓の下枠に小さな植木鉢が竝べられ、
草花が植えてある。日陰があつて、日の當る處もあつて——
干からびてゐるばかりのこの町に、何と喜ばしい驚きか。
老人が囁いた。「ここに住んでゐるのです——
アガルと、私の可愛い鴉の、ルツとがな。
ほら、ご覽なさい。ネイサンもゐる。嬉しさうだ。
今日は家族と會へる日で、シャロンから戻つて來たところらしい。
ラビもゐる。ちよつと立ち寄つたのだらう」。
　蔦の這ひ寄る、
大きく開かれた扉のすぐ内側に、人々はゐた。
それぞれの椅子を間近に引き寄せ、
半ばもたれかかつてゐる乙女の頭を、
母親が膝に載せて撫でさすつてゐる。
その正面に、眞つ直ぐに父親が立つ。

頬はこけてゐるが、逞しく、肌は褐色に燒け——
靴にはシャロンの赤い土がついてゐる——
いかにも熱狂家らしい仕草で、何かしら強く云ひ立ててゐたが、
それを聽くアガルの目に喜びは殆どなく、
その母の目にルツは自らの目を向けた。白髪のラビは、
家族の様子を凝視しつつ、座つてゐた。
表情を現さない、皺深い顔。如何にも賢者と云つた趣
（底深い狡智が賢さといふものならば）。その裝ひはと云へば、
瑪瑙の頭飾りで編んだ髪の毛を縛り、
神祕の房のついた黒い長衣を纏ひ、その留金は、
組み合せ文字さながらの模様に縫ひつけられてゐる。

ランプの火がついたままになつてゐる。
炎の動きは殆ど見えない。
朝露が降りる頃まで燃えてゐて、

昔から變らぬユダヤ人の安息日たる土曜日を迎へたために、
今もなほ消されてゐないのかもしれない。
クラレルは人々の様子を見て、その光景に強い印象を受けた。
餘所者の自分がしやしやり出て、
無遠慮にその間に入り込む氣は無かつたが、
その一方、これまで知らなかつた不可思議な感情に包まれ、
生涯初めて、ルツへの戀慕の情ゆゑの、胸のときめきを覺えた。
彼はどぎまぎしながら佇んでゐたが、
その頬には、初々しい變化が現れてゐた。
　だが、ネヘミヤが抑制された仕草で、
自らの存在を知らせた。すると、ルツは振り向き、
アガルも振り向いて、餘所者の存在に氣附き、
長椅子を勸めた。
母親と娘とは嬉しげに二人の客を迎へ、
旅の話などが話題になると、

心の重荷をしばし下ろす事が出來て、
ほつとしたやうな顏付を見せた。
けれども、ラビはクラレルに對し、
石のやうに頑なで冷たい眼差しを向けてゐた――
審問するかの如く、ひたと見据ゑるその視線は、耐へ難いものだつた。
そして、相手の當惑に氣づいて、
ラビの視線は一層冷酷になつた。
だが、その視線から救ひ出してくれるかのやうに――
何とも惠み深い救出――
乙女の視線がクラレルの上に落ちた。
我々が求め尊ぶ全てが宿る清らかな視線、
そのしつとりとした輝きが、
レヴィ人の灰色の乾いた眼を遮つた――
だが、クラレルは湧き上る思ひを言葉にする舌は持ち合はせてゐない。
彼の心に大きな感情のうねりが押し寄せて來た。

あたかも、朝、潮が滿ちて陸地に押し寄せ、
海の深みの出來事を告げ知らせる時の如くに。
　その後、當り障りのないやり取り以外、
殆ど會話は交はされなかつた。
そんな折にも、件の熱狂家は――
身も心も奇拔な想念の虜になつてゐたものだから――
いとも口數が少なかつた。一方、冷酷な賢者の方は、
人を痺れさせようとでもいふ積りか、痺れえひよろしくの形相で、
座り續けてゐた。恐らく、クラレルをして、己が會衆から遠ざけようと、
せめて、二人の女からは遠ざけようとしてゐたのであらう。
といふのも、二人の場合――僧たる彼は、
その祕められた願ひをほぼ見破つてゐた――エルサレムを厭ふ氣持が、
屢々あふれ出る事があつたから。それでも、
アガルの身内からは、神祕の力を祕めた母親らしい優しさが、
かすかに湧き出てゐた。

悲しむべき人の輪の忌はしい束縛を貫いて、
彼女の女らしい物腰からは今もなほ、
その強い個性が、その善意が滲み出てゐた。
そしてつひに客が暇を告げた時、
もう一人の女の目には、少なくとも、
好意の標が現れてゐた。

第二十四章／嘲弄

モリアとシオンの二つの丘[1]に挾まれた窪地を、
低い南側城壁が東西に横切つてゐる、
その邊りの、塵芥の山がそこかしこに見える頗るわびしい光景の中に、
小さな出入口がある。
いかにもみすぼらしくて、
正に家畜小屋にこそふさはしい。
普段は閂がかけられてゐて、渇水期が始る頃、
ロゲル[2]から水を運んでやつて來る驢馬を出入りさせる時しか、
開けられる事はない。

1〔モリアとシオン〕エルサレムの南部地區がその上に築かれた二つの丘の名。
2〔ロゲル〕エルサレム南郊の地名。「ヨブの井戸」がある。

ここそは、聖書に記された門、
即ち、かの糞門[3]のある場所だ――
そしてまた（昔から云ひ傳へられてゐる所では）、
法廷警吏達は松明の明りを頼りにイエスを導き、
キドロンの細流を越えてから、この門を通つて城内に入り――といふのも、
より人目に立つ近道を利用した場合、
救出の手があらはれる事を懸念したのだ――
しかる後、裏通り傳ひに道を急ぎ、
ピラトの許に至つたといふ。傳承においても、
悪臭を放つてゐる門だが、さてもさても、
事實に於てもその通り。
塵芥を投げ捨てるために用ゐられた、

3〔糞門〕舊約聖書「ネヘミヤ記」第二章第十三節參照。

古代ローマのエスクィリヌス門[4]さながらの有様なのだ。
翌日、
聖者とクラレルの二人が、
城壁の外側、シオンの丘の裏手の邊りを登つてゐると、
大きな聲で呼びかけられ、足を止めた。
件の小さな出入口の側に、一人の男が佇んでゐた。
「おーい、そこの巡禮さん達よ、
この邊りのことは詳しいかい。
ここはどういふ町なんだい。ダヴィデの美しい町なのかい。
なにせ、餘所者なんでね。
ここはひどく物價が高い。
高級住宅地となつたら、地價はどのくらゐするだらう。

4〔エスクィリヌス門〕ローマの七つの丘の一つ、エスクィリヌス丘にある城門。ごみ捨て場や貧困者のための墓地の近くにある。

ここの景氣はどうかね」、浮かれた調子で、そんな事を話し續ける。
　二人が眼下の不潔な場所に目をやると、
そこにゐた男は、
髪は鐵灰色で、背が低く、顔付はいかつく、
猫背で、たくましい骨骼をしてゐた。
槌を手にぶらさげ、
脇腹には小物入れ、といつた格好で、汚らしい門のそばに立つてゐる。
いつか二人が行き遭つた事のある男、
といふより、どこかの丘で遠くから見かけたのだ。
素振りも目つきも尋常ではなく——
敬虔な夢想に耽つてゐるとか、
悲しくも謙虚な思ひに浸つてゐるとかいふ風には見えないが——
屈み込んで、地面をじつと見つめてゐる。
二人を驚かせた事に氣づくと、
頭を振り動かして、再び大聲を擧げた。

「ここはどういふ町なんだい。ダビデの美しい――」
それ以上、二人は聞かうとしなかつた。男の聲から逃れるために、
クラレルは聖者と一緒に速やかに向きを轉じ、
避難の場所を求めて、
城壁の角を曲つた。
　やがて、二人は歩調を緩めて歩いた。
見ると、穢れなき同行者は、
さも滿足げに聖書の頁を繰つてゐたが、
間もなく立ち止つて、云つた。「息子よ、
聖書の言葉が、今日、成就されたのです。
『哀歌』[5]に何と書いてあるか。
第二章第十四節、
預言者が滅亡について何と歌つてゐるか。

5〔『哀歌』〕舊約聖書「エレミヤ哀歌」の事

『すべて往來の人なんぢにむかひて手を拍ち
嘲りわらひ、かつ頭をふりて言ふ、
その邑（まち）がこれなるかと』――お讀みなさい、
それ、ここを、書いてある通りに、自分でお讀みなさい」。
　好奇心をそそられて、クラレルはすぐに云はれたとほりにした。
それから、元氣無く元の歩調に戻り、何も云はずに歩いた。
ただし、心の中では、更に思ひに耽りつつ、
乾き切つた谷底を横目に見ながら、
苦勞して斜面を登り續けた。――
さあ、ここにこそシオンの永遠の記念碑があると、
信仰が告げ知らせようとするならば、
手を觸れて感じられる如何なる物象、もしくは、書物に引用された如何なる事實に、
信仰は依據したらよいのか。
信仰の實體は衰微して行く――見るがよい、晝となく夜となく、
高地の砂は低地へ向つて流れて行き、

やがて、海に呑み込まれ、新たに海底を作る手助けをして、
そこに、海鼠や海草が生息する事になるだらう。
「門だ」、とネヘミヤが叫んだ。「ダビデの門だ[6]」。
狹い通路を通り拔けると、
日照りが續いてゐるせゐで、
門の外と同じく門の内も、地面は黄色く乾いてゐた。
クラレルは内心思つた。見よ、砂漠は、
門の處で終るのではない。忍びやかに、
まるで我々につき從ふ豹のやうに、
竝んで門内に入つて來る——滑るやうに入つて來て、
人間の住まひの中に身體を落ち着けようとする。
しかし、聞け。あの、如何にも悲しげな泣き聲を。
果てしなき缺乏感ゆゑに、魂はしかく嘆き悲しむ。

6〔ダビデの門〕南側城壁シオン門の別名。

けれども、何と人間的な——地上の存在ならではの——聲であらうか。

第二十五章／小屋

高く聳える衝立のやうに、石の城壁がこの町を圍み、
その内側に面して、石の小屋が立ち竝んでゐる。
城壁と小屋との間を、曲りくねつた小路が通る。
小路に面した小屋の側面には、小窓一つ無い。
龜裂も無ければ、ほんの僅かな隙間すら無い。
かくもおぞましい姿を人目にさらしたくはないとて、
悲しくも過剰なまでに氣を遣ひ、
癩者及びその忌はしい隱れ家は、
外の眺めを自らに禁じてゐるのだ。
誰一人訪れるものもない。慰めの言葉をかけられる事もない。

月面に存在するかの溶岩の谷[1]は、
地上の如何なる谷よりも寂しげだが――
人々はそれにティコ[2]といふ名をつけた――
さればとて、この石の小路以上に、
訪問者から引き裂かれてゐる譯ではない。
　それにしても、そこに蹲つてゐるのは誰なのか。
人間として生きて來た者達なのか。同胞として、
人々は一度でも彼らに挨拶した事があるのか。その幻影の如き光景は――
時の流れの中に漂ふ、束の間の蜃氣樓のやうだ。
乾いた瓦礫の山や腐敗物の上――
雜草の緑さへ生へない場所――

1〔溶岩の谷〕月の有名な圓形火口。
2〔ティコ〕デンマークの天文學者ティコ・ブラーエ（一五四六～一六〇一）の名に因んで、「溶岩の谷」は「ティコ」と名附けられた。

そこに、自らの住處に背を向けて、彼らは蹲つてゐる。
その汚らしい者達の仲間について、幾つかの話がある。
　昔、ボードゥアンの王冠が支配してゐた地域では、
この種の連中に對し聖なる教會が、
手厚く面倒をみてやつた時期があつた。それも、イエスゆゑに。
といふのも（古人の讀み方に從ふと）、
イエスは癩者として豫示されてゐたからだ。[3]
教會は彼らの住む場所を隔離したが、
それは嚴肅な儀式によつて執り行はれ、
神意を示す諸々の形式が彩りを添えた。
まづ、病める者のためのミサが行はれ、次に、
病苦に悶える人間の上に、

3〔イエスは癩者として豫示されてゐた〕註（5）參照。

聖水が注がれる。しかる後、彼は、
人里離れた家へと導かれる。以後は、
そこが住まひとなるのだ。そしてそこで、
廃滅の標として、墓地の土が幾ばくか、
頭に振りかけられた。「この世には死するがよい、
この世の希望や恐怖の翼は疊み込んでしまふのだ。
兄弟よ、これより後は神のためにのみ生きよ」。
人々の間から、歌聲が湧き起る。
「我が魂は動搖し、喜びは抑へつけられ、
我が全身は不安に戰く。
神よ、どうかお力とお慈悲とを」。
續いて、司祭が然るべき順序に從つて、
衣服と用具に一つづつ祝福を與へる——
馬巣織りの服、樽、拍子木、手袋、
それらが一つづつ手渡され、

法に基く恐るべき命令が愛の裡に云ひ渡され、
この世と生とを繋ぐ鎖の輪は、一つ一つ、斷ち切られ――
癩者は新しき住まひへ向つて行く。
　昔、ユリアヌス帝[4]の異教の心を惱ませた、
かのいかにも感情を抑制した聖書の言葉こそは、
この孤獨の谷にふさはしく、そこに住む人の心を慰め、
更には（人を超えるものに人がなり得るものとして）
幾分かは谷を愛する氣持さへ起させる――
ああ、その言葉の意味を、曇りなく理解する者がゐたら。
　「彼は我らが顔をおほひて
避くることをせらるる者のごとく生きたり。
彼を慕ふ心はなく、不義を正す者もなし。

4〔ユリアヌス帝〕古代ローマの皇帝（在位三三一～三六三）。背教者として有名。

我らが見るべき麗しき容なく、美しき貌なし。
咎ある者とともに數へられたればなり。
見よ、彼は病患を移されし者、
神に碎かれ、人に捨てられし者[5]」。
　とまれ、儀式は淀みなく進行する。
割り當てられた小屋に赴くと、
司祭の傍らで、癩者はかう云ふ。
「私がここを選びました。ここに私は住むのです」。
彼は一人殘される。小屋の戸口に、
司祭が十字架と空罐とを置く。最初の僅かな施し物が、
その中に落ち、平信徒達がそれに施物を増し加へる。
人々は禮拜の場所に戻り、跪き、

5〔彼は病患を移されし者、神に碎かれ、人に捨てられし者〕引用部分は、キリストの苦しみに關するイザヤの預言を書き直したもの。舊約聖書「イザヤ書」第五十三章第二～三節、及び第十二節參照。

胸に突き刺さるやうな叫び聲で、嘆き、訴へて、儀式が終る。
　しかし、儀式が終つたからとて、祈りの言葉と共に、
嚴肅にして慈母の如き介護の手をさしのべる事まで、
終つてしまつた譯ではない。それどころか、治癒の手をさしのべるべく、
ローマは躊躇しなかつた。氣弱になつてなどはゐられなかつた。
多くの心優しい聖徒達とか、
寡婦や乙女の奉仕者達とかに、手をさしのべるやう、奬勵これ努めたのだ。
けれども、ここで言及すべき人物としては、
かのシビラ[6]こそが相應しからう。
この女伯爵は、シオンの丘の麓なる、

6〔シビラ〕二十五歳で癩病で死んだ、エルサレムのボードゥワン四世の妹。一一九〇年沒。

「施しを行ふ聖ヨハネ」[7]の家において、
多年にわたつて不具者達の世話をした。
　かの病患は、ヨーロッパの風土には久しく見かける事がない。
それは既に滅び去つた時代に、
かくも愛情に滿ちた介護の手を惹きつける事が出來た。
けれども、東洋では、今なほ腐蝕の力を揮ひ續けてゐる、が、それなのに、
シリアの癩者は、友もなくその日を送る。
ただ、人あつて、（目をそむけながら）
氣紛れに小錢を與へる事もあるが、
すぐに背を向けて、世間と嫌惡感を共にする。
　共鳴し合ふ絆が、これら三つを――

7〔「施しを行ふ聖ヨハネ」の家〕十一世紀に、聖墳墓の近くに建てられた病院の一つ。聖ヨハネ騎士團、即ちホスピタル騎士團はここから始まる。

「信仰」と「畏敬」と「愛」とを結びつける。[8]
が、「信仰」の力が弱まるや、銷沈した氣分は
——必ずや——この姉妹のやうな絆に悪影響を與へずにはおかない。

8〔「信仰」と「畏敬」と「愛」〕パウロの有名な「信仰と、希望と、愛」を云ひ變へたもの。新約聖書「コリント前書」第十三章第十三節參照。

第二十六章／シオン門

クラレルとネヘミヤの二人が門内に入るや、
かの悲しき人々の群に取り圍まれ――
わけの解らぬ喚き聲が浴びせられた。
顏といふ顏が、腐り爛れて顏とも云へぬ顏までが、
しきりに訴へかけた。しかし、何を訴へたいのかは解らなかつた。
未だ感じる心を失つてゐない、我々と同じ人間が、
その人間としての性を地中深く埋葬されてしまつたかのやうに、
聲も表情も悉く失つてなほ、何事かを冀つてゐるのだ。
　しかと見るがよい、誇り高き蟲けらよ（そのやうな者があり得るとして）、
汝に對しても、如何なる事が起り得るかを。
それを一體誰が知らうか。無限の時の間に降り掛る運命を、
誰が豫知し得ようか。自らを顧みてみるがよい。

汝は潔白なりや。しかし、これらの人々も罪を犯した譯ではない。
彼らは、紛れもなく、人間だ。では、汝は一體――何物なりや。
　驚き恐れて、クラレルは身體を背け、
晝間の光に目を閉ざしたいとさへ思つた。
けれども、ネヘミヤは穩やかに、動搖の素振りも示さず、
そのまま歩き續けた――訴へる者達の事など殆ど意に介さず、
業病の症狀を嘆き悲しむでもないやうに――
一心不亂の彼の魂は、
強烈な幻影に完全に支配されてゐて、
目の前の事物からは解き放たれてゐた――
神祕の時代、古へのシオンの壯麗、
その樣々な驚異の幻影しか、目に映らなかつたのだ。
それに、彼がこの場所にやつて來たのは、
癩者の小屋を見せるためではなかつた。ただ、
ここに來て、ダビデの丘と門とを

今一度訪れたかつたのである。
　石段を上り、
二人はダビデ門の上の高い胸壁に至る。
そこからは一望の下に、
コロセウムを取り圍む觀覽席さながら、
シオンを守つてその周圍を取り圍む幾多の段丘が見渡せる。
そこからはまた、
「ソロモンの罪の山」[1]とか、
「謀議の岩山」[2]とか、

1〔ソロモンの罪の山〕オリーヴ山の南端の丘。ここで、ソロモンがイスラエルの神エホバ以外の神ケモシとモレクを祭つた。舊約聖書「列王紀略上」第十一章第七節參照。

2〔謀議の岩山〕エルサレム南方の山。祭司長や長老達がイエスを滅ぼすために謀議をしたとされる場所。新約聖書「マタイ傳」第二十六章第五十九節參照。

イスカリオテ[3]の縊死した木の立つ高臺も見える。
奈落の如き穴も見える。遙か昔、
そこに町の塵芥が投棄され、ごみから鈍い炎が立ち上り、
それが燻りながら燃えて、
谷間の一帶を不潔な煙で覆ひ、
鎖に繫がれた陰鬱な囚人達の、
むさ苦しく、くすんだ姿を煤で汚した。
囚人達は、屈辱に苛まれつつ、蹴り込まれた塵芥を、
熊手でかき寄せてゐたのである。
そこはトペテ[4]と呼ばれてゐる——それは轉じて、
懲罰の地獄の謂ひとなつた。

3〔イスカリオテ〕イスカリオテのユダ。
4〔トペテ〕ユダヤ人がモロクへの生贄として子供を燒いたエルサレム近くの靈地。舊約聖書「エレミヤ記」第七章第三十一節、及び第十九章第十一節參照。轉じて、焦熱地獄を意味する。

けれども、ここには、
心に救ひを與へてくれるものは何もないのか。
いや、ある。喜ばしくも、より近い場所に、
かの白き食堂があり、
その二階の廣間は今も見る事が出來る――
夢物語とは云へ、正にそこで、
「主の晩餐」が初めて行はれ、
かの訣別の言葉を、イエスが口にしたと云ふ。
主の愛した聖ヨハネが、
かくも心をこめて記録した、かの愛の言葉を。ああ、
正にそれらは、我々の頭上に輝く星辰のやうだ、
「復活」を豫告する、それらの言葉は。[5]

5〔「復活」を豫告する、それらの言葉〕新約聖書「ヨハネ傳」第十三章～第十七章參照。

二人は胸壁を降り、
城壁の内側を歩いて行くと、
低い松葉杖に縋つて、「恐るべき姿」がびつこを引きながら
近づいて來た。が、手で觸れようとまではしない。
彼が聖者の前に身を低くして、
阿るやうな素振りを示すと、
こちらは優しく穏やかな視線を返した。クラレルはちぢみ上がつた。
この者は、一體、人間と云へる代物なのか。——
「知り合ひですか」と彼は訊ねた。「さうですとも」、
さう答へて、ネヘミヤはその醜悪極まる肉體に微笑みかけた。
「トゥーブ・レーブ[6](感謝する)、といふのかね。この私に。
それはあの方にのみ相應しい——私やあなたや、

6〔トゥーブ・レーブ〕ヘブライ語。

全ての人々の神様にのみ。神様の愛し子は、
天國で神様の許に行き、新しい衣服を宛はれ、
晴れ晴れとした朝のやうに、輝かしく姿を變へるのです。——
さうですとも。クリストに於ける友よ、この人を私は知つてゐる。
同胞たるこの人を」。——後になつて、
クラレルは信頼すべき筋からかういふ話を聞いた。
修道女達がつひに見捨ててしまつた後にも、
ネヘミヤはこの悲哀の胴體の、
ただ一人の友人であつたといふ話を。

第二十七章／母と娘

月日は飛ぶやうに過ぎて行く。何かしら強い魅力が、
クラレルをアガルの家に引き寄せる。
アガルの機略が勝つて、どうやら、ラビはその嚴格な意思を、
實行に移せなかつたらしい。そして、ネイサンはますます、
心を貪り食らふ奇想の虜となつて、
以前にも増して留守がちになつた。
母親はいつでもクラレルを歡迎した。
なにしろ、この若者は、自分が心底愛した大地から、
やつて來たばかりの者ではないか。
故國を離れ、憂ひに沈む人間が、
雛菊の花が挾まれた手紙を受け取り、
はるばる屆けられたその花を目にしただけで、

故國での喜ばしい思ひ出に、
胸をふくらませるとするならば――
それならば、見知らぬ人間とは云へ、
同國人の顔を目の邊りにして、
同じやうな思ひに驅られぬ筈はあるまいが。彼女はユダヤ女ではあつたが、
ユダの地の不毛ゆゑに、心は寂寥感に苛まれてゐた。
彼女の生まれた異邦人の土地では、
原初の創造の活力が、自然の花輪から發散してゐたものだつた。
クラレルは、民族の血を同じくしてゐる譯ではないが、
精神の絆の點に於ては、
アガルが師と呼ぶ男よりも遙かに近しい存在なのだ。さうして、
彼は益々好意を以て迎へられるやうになり、
ルツの心の中にも益々深く入り込み、
二人の女が如何に自由を冀つてゐるかを知り、
苦しい試煉に耐へてゐる母娘が、

未だ語らずにゐる多くの事柄についてもあれこれと思ひを巡らした。
　世を捨てた者が他人に云へぬ悲しみに胸を痛め、
落ち着かず、弱々しく、不安に心が張りつめた様子を示し、
羞恥の心が纏ふのと同じギャバジンのマントを己が心に纏ふ時、
鈍感な手合がその様子から如何なる徴候を讀み取るにせよ、
或はまた、外に示すその様子が、
とどの詰りは破滅に至る、
痛ましい自己抑制の姿に見えるにせよ、
本物の苦悩を、諸々の桎梏ゆゑに沈默を強いられた悲哀を、
深い洞察者たる愛の心が、眞實の愛の心が、
捉へ損つた例はない。
　ここで、暫し、
母娘の來し方を辿つてみよう。
アガルの血縁の者達は誰一人、長い歳月、
カナンの地を目にした事はなかつた。

皆、異邦人の土地に繫ぎ留められてゐたからだ。
それゆゑ、彼らはモーゼの傳承に執着してはゐたものの、
モーゼに從ふ一團が辿り着いた土地からは遠く離れた場所で、
往古の物語として、家傳の皿の如く貴重な寶物として、
それを重んじて來たのである。詰り、
モーゼの傳承とは、ユダヤ人の家族感情を上品かつ優美に飾る、
裝飾品の如きもので、
折々の祭儀がその感情を神聖ならしめた結果、
家庭は神殿となり、さればこそ、ナオミ[1]もまた、
己が試煉に出會ふ前に、悅びの涙を流したのだ。
　シオンを目指して、海を越える前、
アガルは幸せだつた。誇るべきものを持つてゐた。

1〔ナオミもまた、己が試煉に出會ふ前に〕ナオミは、舊約聖書「ルツ記」に出るモアブの女ルツの姑。「試煉」とは、夫、エリメレクの死を意味する。舊約聖書

ささやかな幸福にまつはるものでしかなかつたが、
例へば、小さな庭園は彼女の誇りだつた。
朝顔の花々が戸口を飾り、
庭園の中はさつぱりとして氣持よく、外には芳しい香りが漂つてゐた。
よく晴れた朝の穏やかな食事時、
彼女がダマスコ織りの食卓布に目を落とすと、
へりの部分の、刺繍の組み合せ文字や模様の中に、
ヘブライ語の聖句が縫ひ込まれてゐた。
「エルサレムよ、もし我なんぢをわすれなば」[2]。
涙に濡れた彼女の目に、
遠く、虹の如く彩り豊かに、樂園の幻影が見えた。
恍惚となつて、超自然の至福のうちに、

2〔「エルサレムよ、もし我なんぢをわすれなば」〕舊約聖書「詩編」第百三十七章第五節參照。

信仰は「空想」の道を辿つた。
けれども、あらうことか、夢を實行によつて檢證し、
理想を操る方法を追求し、
心の思ひを夢の必要に奉仕せしめようとするとは。
即ち、非現實を現實たらしめようとするとは。
アガルは頭でさう考へたのではない——さうではない、
ただ、いかにも女らしく、心で感じたのだ。
實際、友人たちや血族たちから遠く離れて、
いかなる慰めを砂漠から得たか。
神にどれほど近づいたか。歌に歌はれたシオンが見せてくれたのは、
墓場であつた。しかも、そこで喘ぎ、事切れるための墓場。
　ネイサンのために、自らが改宗させた男のために、
彼女は久しく悲しみをこらへて來た。しかし、今、
いとしい乳呑兒は青ざめて、死んだ。
石の下によこたはる、蛹のやうなその顔を、

彼女は屡々思つた。心は沈み、
何ともやるせない苦しみの中、かう嘆いた。
「可哀想な赤ちやん、お前の墓には、草も貧弱にしか生えないのね」。

ルツもまた、この地に來た時は子供だつたから、
いかにも子供らしく無頓着に、心に思ふままを口にした、
「本當にひどい處」。が、悲しい顔の母親が、
それを制した。娘は成長すると、
母の云ひつけを守つた——多くの事が、解りすぎるくらゐに解つたから。
けれども、自らの感情を自由に遊ばせる術を、彼女は身につけたであらうか。
一所懸命、草花を植えた鉢の面倒をみて、
飢え乾いた心を慰めようとした。
葉の一枚一枚が、異邦人の土地を慕ふ涙で濡れた。
おう、戀しい、緑の大地よ。
シナゴーグの中の、男女を隔てる格子の背後に、

母と娘は屡々座つたが、
さうして何を思つたか。
心の中は、いかにも冷え切つてゐて、樂しい思ひなど少しもなかつた。
かくも冷やかな態度で、
天に祈りが捧げられた事はない。——しかし、クラレルと一緒に、
故郷の野原から、風に乘つて何かが運ばれて來たやうだつた。
ユダの砂漠から舞ひ上がる風を突つ切つて、はるばるそれは到來し、
アガルを蘇生させたのみならず、やがて花開く時の約束を與へつつ、
ルツの内なる蕾をふくらませた。

第二十八章／墓と泉

クラレルとルツの二人に――例へば、こんな風な事が起つてくれたら。
二人がの高原を自由に歩きまはり、
華やいだ果樹園の側をとほると、春の蕾がどつさりと、
婚禮の贈物のやうに降り注がれる。
明け初める空に夢見るやうに浮かぶ、
夜の淑女、月は、
ほころびる花のやうに麗しい。
春と自然とが優しく調和して、
エデンの園を奪ひ返し、かの十字架にかけられた「苦しみの王」、
イエス・クリストの深遠なる物語は、まるで場違ひで、
本當らしくなく、いかにも不自然に思へてしまふ、例へば、そんな風な事が。
　かの東洋の掟の々の制約ゆゑに、

乙女は家に閉ぢこもつてばかりゐた。
ごくたまに遠出する事があつても、ユダヤ人の女といつも一で、
ユダヤ人の男を伴ふ事は滅多になかつた。
それゆゑ、以前と同じやうに、
ネヘミヤがなほもクラレルの道連れだつた。
クラレルはこの道連れが段々好きになつた。そして、
ルツの事を妙な聲で、「私の小鳥—の小鳥」、などと呼ぶこの男と、
一にゐるのに滿足した。
　ある穩やかな朝、
二人は荒野に出かけた。そこには、二度までも滅びを知つた洞穴、
すなはち、略奪された「王たちの墓」[1]があつて、
その入口にまつはりつくやうに、美しい葡萄の模様が刻まれてゐた。

1〔王たちの墓〕ダマスコ門の北方にある古代の墓。巨大な岩を抉つて作られてゐる。

岩を抉つて作られた、地面より一段下つた空間の奥に、
墓があつて、その上方の壁に、花にふさはしい花輪模様が、
浮き彫りになつてゐる。
棕櫚の葉、パイナップル、葡萄。それらが、荒廢の情景の中に、
眞つ盛りの賑ひを見せる――正に當惑せざるを得ない――
あたかも、テオクリトス[2]よ、汝の詩行が、
暗きヨエル[3]の恐るべき言葉の中に織り交ぜられてゐるかのやうだ。
しかり、不思議な事だ、古き信仰に屬する相反する二つのもの――
ヘレニズムの快活とヘブライズムの悲哀とが、
ポカホンタス[4]の婚姻よろしく、結びついてゐる。

2〔テオクリトス〕紀元前270年頃のギリシャの詩人。牧歌の創始者とされる。
3〔ヨエル〕紀元前五世紀のヘブライの預言者。
4ポカホンタス〕アメリカ・インディアンの酋長ポウハタンの娘で、ジョン・スミス船長を處刑から救つたと傳へられ、後に英國人と結婚した。

人々が主張するところによれば、
殺人者たるヘロデの親子は、その花輪の蔭に葬られたといふ。
　が、誰だ、今、そこに姿を見せたのは。
墓に寄り掛かり、その影に紛れて、
思ひに耽る様子で、
トレイサリー模様[5]を見つめてゐたのは。
その男のリュディア[6]風の頭髪を、かすかな風がそよがせる。
いかにも悲しげだが、とても容貌が美しい――
喪に服する菫の美しさ、とでも云はうか。
　浮き彫りの模様とこの隱遁的な男とは、
それぞれが異る調子を保持しつつ、
美しく、しかも優雅な調和を示してゐて、

5〔トレイサリー模様〕ゴシック建築の窓の上部などの曲線模様。刺繍などの網目模様。
6〔リュディア〕小アジア西部の古王國。ペルシャに滅ぼされる。

この場所の荒涼たる雰圍氣とは強い對照をなしてゐる。
けれども、姿を見られた事に氣づくと、
見知らぬ男は會釋をし、身體の向きを轉じ、
内氣さうな様子で立ち去つた。
人と交はるのが、いかにも嫌ひらしかつた。
墓の中の小室を見てまはつた後、
二人は谷あひの道を下つて、モリア山の城壁に至り、
腰をおろした。クラレルは思ひ出す、
ヘロデが――かの堂々たるエドム人のヘロデが[7]――
そこに見える柱廊を歩んだといふ。
山腹に沿つて建つ大理石の柱廊、

7〔エドム人のヘロデ〕ユダヤの王（在位、紀元前三七～四）。「ヘロデ大王」と呼ばれる。クリストの誕生を恐れ、ベツレヘムの二歳以下の幼兒全員の殺害を命じた。新約聖書「マタイ傳」第二章參照。彼の父アンティパスはエドム人で、ジュリアス・シーザーにユダヤの支配を委ねられた。

テュロペオン[8]の谷を見下ろしつつ、
石柱が重疊たる列をなしてゐる。
　東の方、ヨシャパテの谷の彼方、
高い岩山の斜面に、墓や小屋の群れが見える。
二人はそこへ向ふ積りだが、暫くはのんびりと、
麓を歩みながら、列をなす墓を眺めてゐた。
のしかかる舷側のやうな、陰鬱な急斜面に、
光りのする戰艦の舷窓さながらに、
四角に削られた穴が竝んでゐる。
　二人は登り始める。クラレルがふりかへると、
さきほど訪れた掟の丘――モリア山が、
キドロンの谷底を見下ろし、
ダビデ王の城壁の角から、

8〔テュロペオンの谷〕エルサレム舊市街中央部からシロアムの池にかけて、南北に走る谷。

王の老いたる頭部を思はせる、角櫓が張り出してゐる。
そこに立つとそれがくつきりと見え、また、その全貌が一番よく見渡せる。
フランコニア山[9]で見ることのできる、
かの斷崖の光景のやうだ。さして高くもなく、
風雨に削られた様子もないのに、
驚異としか云ひ様のない、かの「峠」の光景そつくりなのだ。
　ふと、
背後から呼ばはる聲がした。無遠慮な調子で、
男の聲だ。いかにもぶつきら棒で、しかも、
墓の中から聞えて來る聲のやうに、
妙にうつろに響く。
實際、そこは墓で、入口の暗がりの中にゐる男が、
立ち去れと二人に命じたのだ。

9〔フランコニア山〕米國ニューハンプシャー州、ホワイト・マウンテンズのフランコニア峠のこと。

よちよち歩きの子供が男の膝に手をのばし、困惑したやうな様子で、
小さな手に繪入りの印刷物を持つて――ネヘミヤの贈物だ――
日差しの中に默つて立つてゐる。
すると、アラブ人の男は不機嫌さうに子供の方に向き直り、
贈物をつかみとり、地面に投げ捨て、蹴飛ばした。
　かくて、二人は岩山を降る道をたどる事になつたが、
さうしながらも、クラレルは背後に一瞥をくれた。
汝、「死」の家の客人よ、夜毎、
「死」の家で眠る汝は、「死」の娘、「平安」を、
どうして妻にしてはいけないのか。
　二人は身體を傾けながら石段を降つた。
それは、岩かげに隱れるやうにして、

シロアムの池[10]に降りて行く石段だつた。
谷間の急な傾斜面から照り返す、
眞晝時の熱い光線から守られて、
濕つた岩棚が幾重にも重なり合ひ、
地底深く、丸天井の岩室を作つてゐた。
　地底に、またしても、かの見知らぬ男の姿が見えた。
眠つてでもゐるかのやうに、ひつそりとしてゐる。
一番低い石段に腰をおろし、
干滿をくりかへす泉の波立つ水面をみつめてゐた。
水は引いた後、目に見えない洞窟から、
ゴボゴボと音を立てて流れ出す。一時の靜けさ、
それは、激しい水流によつて破られるが、何とも絶妙といふしかない。

10〔シロアムの池〕エルサレム付近の泉の名。クリストにより、この池で盲人が目を開く奇跡が起こつたと傳へられる。新約聖書「ヨハネ傳」第九章第七節參照。

この現象を科學は説明してゐるが、それでも、
それが本質的に孕んでゐる、眞の祕的性格が消滅したわけではない。
五つの廊のあるベテスダの池[11]に、天使が降りる、その幻影が、
その時、そこにゐた男の腦裏をよぎりはしなかつたか。
天使が池の水を動かすと、そこで水浴びをした者は、
如何なる病からも癒されたといふ。
それとも、彼は、それに類する夢想に耽りつつ、
泉の嘆く聲に聽き入つてゐただけだつたのか。
リビアの砂漠でアムモーン[12]に與へられた、
詩的靈感も託も、もはや、この自分に與へられる事はない、さう嘆く泉の聲に。
と、何かの拍子で、地表の小石がはねとばされ、

11〔ベテスダの池〕エルサレムの靈泉。新約聖書「ヨハネ傳」第五章第一節〜第九節參照。
12〔アムモーン〕古代エジプトの主アメンのギリシャ及びローマ名。ギリシャ人はゼウスと、ローマ人はユピテルと同一視した。

石段をころがり落ち、
耳障りな音を立て――儚い呪縛の雰圍氣を破つた。
シロアムは、田舍によく見かける、水を汲む池でしかなかつた。
　隱遁を好む男に、わざわざ、
己れを押しつけるまでもないと、またも思つて、
クラレルは踵をめぐらし、立ち去らうとした。――すると、
ネヘミヤが云つた、「ちよつと、下に降りさせてはくれまいか。
元々目がかすむのだが、このところ、々ひどい。
だから、あそこの冷たい水で目を洗つてみたい。
主があそこに行かせ給ふた、例の盲人と同じやうに。
盲人は目が見えるやうになつて、池から戻つて來たといふのでな」。
さう云つて、ネヘミヤは岩室の石段を降りて行つた。
　件の見知らぬ男は、石段を登らうとしたところだつたが、足を止めた。
そして、信仰者が目を洗ふのを見、上を見上げ、クラレルを見た。
二人はすばやく、ほんの一瞬ではあつたが、

共感のこもる視線を交はした。現實を聖なるものに變容せしむるほどの、
強い信仰を抱いた男の行爲に、ともに動かされたのだ。
二人の間に、或る種の絆が結ばれたやうだつた。
やがて三人は
キドロンの谷を越え、
みな、靜かで淨められた氣持になつて、
かの聖なる傳承の場所に、久しく、
「我らが主」の園と云ひ傳へられてゐる場所に、近づいて行つた。

第二十九章／隱遁者

三人が園に着くまへに、
見知らぬ男について話しておかう。名前は――ヴァインとしようか。
血縁とか家系とか身分とかいふ――彼の家庭にまつはる事を話しても、
何の役にも立ちはすまい。なべて獨特の才能といふものは、
樹木に寄生する宿り木よろしく、
偶然、天から落下して來るものだ。宿命を擔ふ種となり、
風に運ばれ、あちこちと移動して、
臺木と接合する事になるのだから。
　ヴァインの内氣さうな態度は、
ある種の鬱屈を、心の障害のごときものを、暗示してゐるのかもしれない。
談話の習慣が彼には缺如してゐた。
しかし、心の深層に根をおろした、眞に氣高い品性は、

上邊の見せかけなんぞ、齒牙にもかけないだらうし、
また、さういふ態度を執るのも、至極尤もな事だ。
人生航路の半ばを渡つて來た年齡なのに、
情念ゆゑの傷の跡も、金錢ゆゑの穢れの跡も一切ない。
恐らく、彼は利に仕へる生き方を好まず、それを遠ざけようとした――
そして、贅澤で強烈な刺戟には乏しくても、さういふ悠然たる生き方を、
今なほ心から求めてゐるのかもしれない。
アポロンともあらう者が、マモン[1]の鑛山で奴隷として働けようか？
アドメートス[2]の羊でゐる方が、どれほどましか、といふわけだ。
いはく云ひ難い純潔な魅力ゆゑに、
人たるものが誰しも冀つてやまぬ、強い感化力が彼にはあつた。
それが何に由來するのか、それを語るのは難しい。

1〔マモン〕富の。
2〔アドメートス〕ギリシャ話に出るテッサリアの王。

天使達が聖チェチリア[3]のまはりに育てた、
目に見えぬ樂園の花々の、
かのかぐはしい魔法の魅力を語る事が、いかにも難しいのと同じ事だ。
　してみると、我々がここに示さうとしてゐるのは、聖者にも等しい人間なのか。
さうではない。ふくよかで、血色のよい、ヴェネチア人風の風采が物語るのは、
聖者のごとき氣高い品性といふよりは、むしろ、
ヴェスヴィオ[4]産のずんだ葡萄酒にも似た、血の色の印象だつた。
一體何が、その血の流れを冷却せしめたのか。
肉づきがよく、柔和で明な外貌の下、
彼を支配してゐたのは嚴しい自己抑制の意志だつた。自尊心まではともかくとしても、
肉を彼は抑壓し、慾望を克服した。
しかし、それも、倫理的意志に支配されたため、といふよりは、

3〔聖チェチリア〕紀元二三〇年頃、ローマで殉した修道女。音樂の守護聖者。
4〔ヴェスヴィオ〕イタリア南西部、ナポリ東方の活火山。

肉體を通じて幸に至る道などといふものが、信じられないためだつた。
粗布を身に纏つて、悔悛の苦行に耐へようとする人間では、彼はなかつた。
とはいへ、放埒なシバリス人[5]の血を引きながら、
カルトゥジオ修道會[6]の、嚴格この上なき修道士のごとき雰圍氣をも漂はせてゐた。
それでゐて、必ずしも美を忘却してゐる譯ではなかつた。
この世の美を、そして魅力を知つてゐた。そのために、
心が燃え上る事は滅多になかつたが、それでもそれを大事にした。
　尼僧院に住む者に語りかける場合のやうに、
彼のらかな魂は、小さな格子窓を通してのみ、
人々と交はつた。さういふ控へ目な態度は、
恐怖とは――恐怖や不安感とは、明らかに、全く違ふものだつた。
隱遁者めいた引つ込み思案の態度とも、

5〔シバリス人〕古代ギリシャの市。放恣かつ奢侈な生活で有名。
6〔カルトゥジオ修道會〕カトリック修道會の一つ。嚴格な規律と長期にわたる孤獨な生活で知られる。

それは必ずしも同じではなかつた。
彼の與へる全ての印象の背後に、何かしら名状し難い、
變幻自在の、妖のごとき存在が隱れ潛んでゐた。
得體の知れぬ、エーリアル[7]さながらの存在が。
彼の言葉の調子そのものが、普段、喋る機會に乏しい事を、
示してゐるやうに思はれた。雜沓は、ヴァインを昂奮させたが、
修道院は、より豐かな滿足を彼に與へた。
さればとて、彼が修道僧のごとき人間だつたと云ひたいのではない。
さにあらず、周圍の闇が濃ければ濃いほど、彼は一際輝く人間であつた、
と云ひたいのだ。かのヴェルギリウスの森の中の、陰鬱な空地に光り輝く、
シュビレーの「金色の枝」[8]さながらに。

7〔エーリアル〕シェイクスピアの『あらし』に出る妖。
8〔シュビレーの「金色の枝」〕ヴェルギリウスの『アイネイアース』中、巫女シュビレーが主人公アイネイアースにへる、聖な枝のこと。暗い森の中で、金色に光つてゐるといふ。

第三十章／受難の場所

修道院の建物のそばには、どうしてきまつて、
園があるのか。苦行僧達が薔薇の花輪でも作るのか。
さうではない。忘れられぬ記憶があるのだ。
まづ、エホバは、怒りつつ、園の中を歩み給ふた。[1] また、
葡萄とオリーヴの木や枝が絡み合ひ、色の墳墓のやうな、
こんもりとした木陰を作つてゐる邊り、宵闇が迫る頃、そこで——
我々を絶望から守るべく、蒼白の貌をして、
ただ一人、受難に耐へてゐたのは、
誰であつたか。しかり、記憶は、

1〔園の中を歩み給ふた〕舊約聖書「創世記」第三章第八節參照。

エデンとゲッセマネ[2]とをしかと結びつけるのだ。
されば、灰色の修道院の隣りにいつも園があるのは、
決して意味の無い事ではない。
　ソロモンの榮華の時代、サレムの丘の上の町は、
何と幸に充ち滿ちてゐたか。
人々は連れ立つて、三々五々、坂をゆつくりと下り、
キドロンの谷を渡り、今は悲劇の木立が見える邊りを、
輕やかに、そぞろ歩いた。
當時、そこは繁華な、歡樂の巷であつた。
　クラレルとその同行者達は、
修道院の格子戸の前にやつて來て――足をとめ、中に入つた。
オリーヴの木々が立つてゐる。根が幾重にも卷きついて――

2〔ゲッセマネ〕エルサレム東方、キドロン川近くの園。イエスが苦惱しつつ祈り、その後、ユダの裏切りにより捕らへられた場所。

ねぢ曲り、ふしくれだち、瘤が澤山ついてゐる――
往古を偲ばせる、その重厚な木々に、
二人は、かの「苦悶」の名殘りを見る。
しなびたい果實が、一つ、木から落ちた。
エルサレムでつみ取られた收穫、といふ譯だ。
物云ひたげな樣子で、クラレルはヴァインの方に顏を向けた。
出來れば話しかけたかつた。が、地の口に呑み込まれた、
かのダタン[3]に話しかけた方がましだつた――
傳承や傳説に心を奪はれ、
彼は遙か遠くの世界にゐた。
　一方、オリーヴの木陰に、
ネヘミヤは物思はしげに座り込み、

3〔ダタン〕モーゼに逆らひ、裂けた大地の口に呑み込まれた人物の名。舊約聖書「民數紀略」第十六章參照。

ヨハネ音書のかの章[4]の頁をめくつてゐた。
　クラレルの心は、何を思はうとしたか。
彼はかの夜の光景を心に描いた――
罪なき者の血を求め、劍や棒を手にした一隊が、
やつて來た。大勢だつた。
彼らが木の小枝を拂ひのけると、小鳥達が飛び立つた。
枯れた大枝が音を立てて裂け、幾つものカンテラが搖れた。
つひに、見よ、木立を通して、彼らはイエス達の姿をみつける。
「先生」、と一人が叫ぶ――ユダだ。そして、かの接吻[5]。
イエスはと云へば、たぢろぐ樣子もない――
一言も發する事なく、あくまでも從順だ。
黏液で頰をけがす、忌はしい蛇。

4〔ヨハネ音書のかの章〕新約聖書「ヨハネ傳」第十八章第一節～第十四節參照。
5〔かの接吻〕新約聖書「マタイ傳」第二十六章第四十七節～第五十節參照。

柔和を超える忍耐――
豫知してゐた背信と、
人の心中の惡魔とへの忍耐。
と思ふや、かの豹のやつめが、クラレルに飛びかかる。
受難の劇の物語が、心に針を突き刺す。
　それらの思ひを斷ち切るべく、クラレルが身體の向きを轉じると、
白髪の聖者が、オリーヴの木の下で、身體をかがめ、
聖書を一心に讀みふけつてゐた。クラレルが聲をかける。
「讀んでゐる箇所を、讀してみてくれませんか」。
聖者は顏をあげる。が、途方に暮れたやうなその目つきは、
心ここにあらずといつた風で、いかにもうつろだ。
　一つには時間つぶしのため、一つには仕事のため、
老いたる羊が何か物を讀んでゐたとする――例へば、
苦勞して財を蓄へた過ぎし日々の、
古い農事記録のやうなものを。

をりから、誰かが來かかつて、訊ねる――
「何を讀んでゐるのかね？」すると、羊は顔を向けるが、
讀んでゐるものの内容など、まるで解つてゐないらしい。
或は、解つてゐても、散漫にしか讀んでゐないとか、
殆ど記憶してゐないとか、さういふ場合があつたとする。
ネヘミヤの場合が正にさうだつた。茫然たる有様で、いかにも活氣がない。
やがて――クラレルの思念を遮るかのやうに――
奇怪な無力感が、クラレルの上にもしのび寄つて來た。
　この地所の管理人たる、
一人の修道士が近づいて來て、急な坂の傍らの、
傳説の小岩山を指し示した。
ヤコブとペテロが眠り込んでしまつたといふ、[6] 例の場所だ。

6〔ヤコブとペテロが眠り込んでしまつた〕新約聖書「マタイ傳」第二十六章第四十五節參照。

巡禮者達は力なくそこに目をやつたが、
何も語らなかつた。――「二人を眠り込ませてしまつたのは、
實は悲しみであつたと、さうは思ひませんか。
だらしなくて眠つてしまつたなどと、聖ルカは一言も云ひ立ててゐない。
それどころか、過剰なまでの感情に壓しひしがれ、
苦痛すら感じなくなり、無感覺の状態に陷つてしまつた、それが眞相だと」。
クラレルにとつて、それは空しい言葉ではなかつた。
經驗からも、證明し得る事だつた。
ヴァインはと云ふと、超然たる態度で附近をうろつき――
一人の世界に閉ぢこもり、修道士を避けてゐた。
クラレルが待つてゐると、彼はやつて來た――
最前の様子が、僅かに影のやうな痕跡をとどめながらも、
今は落ち着いた、角張らない心の状態と融け合つてゐる――
或は、そんな風に裝つてゐるのかもしれない。クラレルが抱く共感の一切を、
ヴァインは否定しようとするであらうか。

その場を去らうとして、二人が振り返り
つひ先程まで聖書に沒入してゐた男をさがす。
彼は座り込んで眠つてゐた。伏せた顔が、
組んだ兩腕の間にすつかり隱れてゐる。
片手が聖書の上にだらりと垂れ、
あらゆる惱み事を忘れた平安の裡に憩つてゐる。
すると、ヴァインの樣子から、さきほどの影の痕跡がすつかり消えた。
幸ひならざるところなき靈さながらに、
彼は修道士に默つて合圖をした。
どうか邪魔をしないで。
この夢見る哀れな者に休息を與へてやつて下さい。
心ゆくまでの休息を。
　しかし、その折も折、
何者か、男が一人、「苦き杯」なる岩屋のそばに立ち止まつて、
抜け目のない目附で、上を見上げてゐた。——

粹な身形をして、洒落た裝釘の薄つぺらな本を手に持つてゐる。
今しがた、何かを調べようとて、目を走らせてゐた本だ。
詮索好きなペリシテ人[7]、と云つたところか。立ち去らうとする巡禮達に代つて、
觀光客達が乘り込んで來たのだ。
　めかし込んで、威勢のよい男の姿を一目見るや、
ヴァインの顏に、奇妙な嘲弄の波紋が、
いたづらつぽい妖の光の波紋が走つた。
それをクラレルは何と見たらよいのか。
おお、天使達よ、この光景を何とかしてくれ。
ポール・プライ[8]の奴ばらが？　ところもあらうに、このゲッセマネに？

7〔ペリシテ人〕マシュー・アーノルドが『養と無秩序』で唱へた人間類型。美的感覺に缺ける實利主義者、養のない俗物を云ふ。
8〔ポール・プライ〕ジョン・プールの喜劇『ポール・プライ』の主人公の名に因む。詮索好きでお節介な人間を云ふ。

が、さういふ感情を、クラレルはかき立てようとは思はなかつた。
また、表情に何かの暗示を込めようとした、ヴァインの奇妙な態度を、
好ましいとも思はなかつた。その暗示は、
恐れ戦くクラレルの心を打つものでもあつたから。

第三十一章／ロルフ

園を見渡す丘を、
彼らはさまよふ。やがて、偶然、
二人目の見知らぬ男に出遭ふ。場違ひなくらゐ、
活氣のある男で、ユダの地に踏み迷つた、
罠獵師か開拓者のやうだ――
あるひは、熱帯の空の下で働く、
海の男のやうでもある。
三人が近づいて行くのに氣づくと、
男は立ち上り、帽子を脱いで挨拶した。
褐色に燒けた顔の上部は、
格好のよい額で、大理石のやうな色をしてゐる。

スーニオン岬[1]の頂に聳える、
石の殿さながらだ。
この人物の特徴は、明瞭に見てとれる――
優しい心、嚴しい頭腦――
のみならず、見たところ、
研究心がすこぶる旺盛だが、それでゐて、
象牙の塔にこもつて、學を衒ふやうなところは微塵もなく、
空論を弄ぶ事も好まない。
それどころか、舟や天幕で千變萬化の生活を送りつつ、
大自然と親しく交はり、それを、
プラトンの主題を豐かならしめる補ひとする、そんな人物のやうに思はれた。
だが、心の方は、面構へほど日燒けのせゐで不敵になつてはゐない。

---

1 〔スーニオン岬〕ギリシャ東部、アッティカ半島の岬。海ポセイドンを祀る古い殿の石柱が立つ。

彼は纖細な心を持ち續け、親切な氣持をいとも率直に現した——
恐らくは、餘りに率直で、餘りに包むところがなく、
無分別なまでに、正直だつた。
　けれども、今、彼が漂はせてゐる、
かすかな穢れの印象は、一體、何を暗示してゐるのか——
ピサロ[2]が略奪した、かのペルーの大皿は、
材質はすこぶる上等だが、造りは荒つぽく、その表面には、
かすかな曇りが見られたといふが、それに類する、
何かしら全體とそぐはない感じは何なのか。
見たところ、ひねくれた印象は少しも見られないのだが。
　新たな滯在先を求めて、バアルベク[3]からユダヤ人の街へと、
極まりなき不毛の地へと、

2〔ピサロ〕南米ペルーにあつたインカ帝國を滅ぼしたスペイン軍人（一四七一～一五四一）
3〔バアルベク〕レバノン東部の村。バールの殿など、ローマ時代の遺蹟が遺る。

ロルフは戻つて來てゐたのだつた。
未來永劫、その地に潜む何物かを、
彼は己が手に掴みたいと願つてゐた――
人々が鸚鵡よろしく口眞似をする、
云ひ古された傳承の背後に深く忍び入つて、
あはよくば――何を手に入れようとしてゐたのか？
　この見知らぬ男の態度が示す、
明示的な、もしくは暗示的な徵のそれぞれに強く刺戟されつつ、
クラレルは男からヴァインに視線を移した。
いづれ劣らぬ二人であつた。實に、好個の一對と云はねばならぬ。
クラレルはいかにも若かつた。が、例外的な天性を備へた二人の男が、
幸ひにも、彼のまへで、ここに初めて出遭つたのだ。
いはば、ごわついた手でやせた土地を耕し、
日々の糧を稼いでゐた男のまへに、
木も鳥も魚も空も海も、すべてが未知のものたる、

正に見も知らぬ熱帶の土地に生きる二人の男が、一に出現したやうなものだ。
これから、はたして、何が起るのか。如何なる新たな結果が、
眞のふれあひからもたらされるのか――
二人の率直かつ眞率なふれ合ひから？　そんな事を、
クラレルは臭く考へてはみたものの、とどのつまり、無駄な思案であつた。
凡庸な人間同士の場合、たとひ人づき合ひがよい者の間でも、
二つに切つた甘い林檎がぴたりと重なり合ふやうに、
眞實、心と心がふれあふ事は殆どない――しからば、
希有なる人間同士の場合は、いかなる事になるのであらうか？
　格式張らない挨拶がすむと、
ヴァインは沈默の城の中に引きこもつた――
とは云へ、話しをするのは一切ご免、といふ風ではない。
胸壁の上から下を見下ろし、
必要とあらば、相手の言葉に應對するのも、
吝かではない、といつた風だ――

相手を拒絶したい、といふのとは全く違ふ。
何らかの意圖がない譯でもない樣な、曖昧な態度であつた。
恐らく、意圖はあつた。――
「ご覽なさい、クリストの鐘樓[4]の傍らに、
イスラム徒の尖塔が見える」――
話の接ぎ穂を自ら提供するつもりで――
さうロルフが叫び、キドロンの深く狹い谷間の彼方、
市街地の方を指さした。
そこには、修道院の堂々たる建造物が建ち竝んでゐた。
その、したたるこんもりした木立に乏しい風景の中、
サラセン人の尖塔とノルマン人の塔[5]とが、
仲良く警護に立ち、その傍らに、

4〔クリストの鐘樓〕聖墳墓會の鐘塔。
5〔ノルマン人の塔〕十字軍の建てた巨大な五階建の鐘塔。三階分までが殘つてゐる。

聖墳墓會を覆ふ天蓋があつた。
「あの塔は、頭部を切り落とされたやうな格好をしてゐて、何だか侘びしげに見える。天邊の部分を剪定されて、成長が止まつた樫の木のやうだ。
しかし、イスラム寺院の尖塔の方は、棕櫚の木のやうにそびえ立ち、ノルマン人の塔を見下ろしてゐます」。
「あの尖塔は」とクラレルは云つた、「場所が相應しくないやうに思へますが」。
「確かに、さう思へる。でも、あの場所に建てられたのには理由があつて、ああする事で、オマール[6]に纏はる有名な話を後世に傳へようとしたのです。ギリシャ人にとつて大切だつたと同じく、彼にとつても聖だつたこの町が、意氣地なく降伏した後、
オマールは駱駝の毛で作られた粗末な衣服を身につけ、
長衣をまとつた威風堂々たるギリシャ正の總主と竝んで、
聖なドームの下を歩き、

6〔オマール〕イスラムの第二代カリフ（?〜六四四）

イスラムの祈祷の刻限が來るや、
會の中に敷かれた上等の絨毯を使ふのを斷り、
會の外の、丁度、
あの歴史に殘る尖塔が、
今、建つてゐる場所に立ち、
心底、哀れみを冀ふ氣持で、胸を叩きながら、
かう叫んだ。『どこまでもお仕へします。
アラーよ、どうか私にお慈悲を』。
彼は勝者でしたが、勝者の誇りは殆ど持ち合はせてゐなかつた。
さうして、彼はイスラム徒の心に強く刻まれた掟から、
意圖的に、あの會を救つた譯です。なにしろ、掟によれば、
一度、アラーの儀式が執り行はれた會は、すべて、
直ちに、アラーのみの支配下に入る決まりでしたから。
しかし、はるか後になつて、クリスト徒の騎士達がこの町に攻め込んだ時、
オマールの祈りや大な心とはまるで懸け離れた、

いかに許し難い蠻行に耽つたか。
が、その話はやめませう」。

皆が反應を示したやうに見えたので、ロルフの口調は熱を帶びた。
「あそこに、聖墳墓會の灰色の大聖堂が見えますが、
あれを最初に建てたのは誰であつたか？　弱き女、
第二のマリアとも云ふべき女、
異の暗闇が支配してゐた中にあつて、
主がたへられた場所を、誰よりも最初に探しもとめた女、さう、
かの王妃ヘレナ[7]です。彼女はその場所を突き止め、
附近から邪魔なもの一切を除去し、熱情の提供し得るありつたけをもつて、
その地を光輝に滿ちたものとした。

7〔王妃ヘレナ〕ローマ皇帝コンスタンティヌス一世の母（二四七頃～三二七）。

けれども、息子のコンスタンティヌス一世[8]となると――早くも暗い影が。
母親の熱く情的な心は、むしろ、
息子の冷淡な部分を助長したのでせうか。
いかにも冷靜な彼でしたから、時流に巧みに調子をあはせ、
ユピテルが新たな宗の足取りに、遲れを取り始めるやうになつてやうやく、
『十字架』の刺繍を、
ローマの最高の旗に縫ひつけたのです。
そして、ヘレナしても――恐らくは、
かの聖女その人にしても、例へば過ぎし昔、
かの麗しきド・マントノン[9]のごとき、
フランスの堂々たる貴婦人達に、

---

8 〔コンスタンティヌス一世〕ローマ皇帝（在位三〇六～三三七）。クリストを公認し、ビザンティウムに新首コンスタンティノープルを建設。

9 〔ド・マントノン〕フランス國王ルイ十四世の後妻（一六三五～一七一九）。貧困貴族の子女のための、サンシール學園建設に情熱を注ぐ。

眞珠のロザリオを作らせたり、
壯麗なチャペルを建てさせたりした、
かの甘美な浪漫的心情を、借物の卷毛で頭を飾る女達の遊び心を、
免れてゐたとは云ひ切れないのではありますまいか。――
何だか、私ばかりが喋つてゐる」。
「いえ、そんな事は――どうぞ續けて」、
とクラレルは云つた。だが、聲の調子には、
内心の動搖が現れてゐた。――
「しかし、彼女を賞贊しないではゐられない。
彼女の會は、いかなる運命にも怯む事がなかつた。
來る年も、來る年も、破壞の手が襲ひかかり、
包圍が續き、劍と炎によつて脅かされても、まるで屈する事がなかつた。
倒れても――再建され、再び、倒れた。
軍隊に脅かされ、地震にも搖さぶられた。
が、ご覽なさい、持ち堪へ續けてゐる――建物は同じではないが、

全く同じ場所に建つてゐる。最後に燒けた時、[10]
合理主義者の手合は訓を學ぶ事になつた。
しかし、皆さん、全てご存知の話だ」。——
「いえ、最後の事までは知りません」、とヴァインが云つた。
「拜聽します」、とクラレルも云つた。
「では、燒けた翌朝の事ですが、
燒け落ちたドームの下敷きとなつて、
怪我をしたり、不具の身となつた者までゐたのですが、
かの意志強固なる高僧は、平生と變らず、典禮を執り行ひました。
壁はしつかりと立つてゐた。修道士達の申し立てによると、
（虚僞のものとは云へません）中心部にある部屋に——
クリストの墓及び信仰の最後の砦である部屋に——
炎は輕く觸れたばかりで、痛めつける事をしなかつた。

10〔最後に燒けた時〕一八〇八年の大火の折に燒失。

他方、煙の熏る梁は、
地面に交差するやうに崩れ落ち、
ゴルゴダをく輝かせた。けれども、
長衣を纏ふ一團によつて、の儀式は執り行はれ、
司冠を戴いた高僧が燃えかすの熏る地面を踏み、
焼けた祭壇の前で人々の奮起を促すと、
讃美歌と祈りの言葉とが、
灰燼の中から立ちのぼつた。灰燼は、
冷え切らないうちに掃き出され、
煉瓦職人が金鏝や煉瓦箱やハンマーを運び込み、
けたたましい音を立てて立ち働いた。
六十年ほど前の事です。
　リマの最初の大地震[11]の時にも、

11〔リマの最初の大地震〕一七四六年のこと。

激烈な搖れが續いて、幾百もの寺院が、
跡形もなくなるほど破壞されたといひます。しかも――
虐待と抑壓ゆゑに、一切の不平を封じられた、
リマといふ市自體の表情が帶びる、
惡意に滿ちた雰圍氣の中――どすい雲が、
瓦礫の上に立ち込め、海はもとより、
陸地まで、一旦はその中に沒した死體を呼び返し――
それらは再び姿を現すに至つた。
アンデス山脈に至る道を、
羊や人々の群れが逃げ走り、しかる後、
高位の聖職者が、勇敢な一團とともに、
白い灰の雨の降りしきる中、
讃美歌を大聲で歌ひつつ、進んだ。搖れ動く平原にあつて、
南にも北にも、彼らは新たに境界線の杭を打ち込んだ。
より廣大な會堂の敷地を確保するためで、それらの建物は今もあります。

聖職者は嬉々として、その搖れ動く地域を開發したが、
その地を聖職者は保ち續けるでせう、この悲劇の星が、
この罪の球體が、回轉し續ける限り」。
「私には、さうは思へません」とクラレルが云つた。
「ローマの聖職者が永遠に世界を支配するでせうか？」
「ローマの、とは、私は云つてゐない。いかにも、錨を切られ、
遠くへ投げ出されたり、避難の港を見失つたりする聖職者も、中にはゐるでせう。
しかし、それでも、宗といふ古來よりの港は、
最後の審判の日まで、荒天の折の、
人類のみの綱に他なりません。
しかり、暗闇の中で子供達が恐怖を感じ續ける限り、
人々はなる存在を恐れるでせう。
雛菊が喜びを齎し續ける限り、
人々は芝土にの足跡を見るでせう。
それは無知といふものでせうか。その種の無知を、

科學は斷然解明しようとする――
それを深く探究し、擴大して檢證しようとする。けれども、
の不在が證明されたとして――
それでどうなるといふのか。何が變るといふのか。
幽靈の出沒はやまず、それを墓に戻らせる事など出來はしない」。
　熱つぽくロルフは語り、そのい目の色は、
異樣な色彩に變つた。曇天の日の、
ティレニア海[12]さながらに。
ヴァインはそれに氣づき、何やら浮かない氣分になつた。
浮標もなく大洋を漂ふこの男は、
熱意を浪費してゐる、さう思つたのだ。
尤も、後に親しく交はるやうになつてからは、
ヴァインはその思ひを捨てた、

12〔ティレニア海〕イタリア西部、コルシカ、サルディニア及びシシリーに圍まれた地中海の一部。

もしくは、修正した。
　クラレルは心が落ち着かなかつた。
　ロルフはと云へば、
半ば挽歌形式の詩を詠むやうな口調で、かう續けた。
「フィラエ島[13]よ、汝の聖なる土地に、
オシリス[14]の碎かれた墓が見出される。
いかにも善良なだつた。が、とどのつまり、その善良は空しかつた——
暴れ者のピュートーン[15]と爭つて、殺された。
かの祕の石のそばで、長い間、
巡禮達は儀式の歌を歌ひ、嘆きの聲を發し續けた。

13〔フィラエ〕古代エジプト宗の聖なる島。ナイル川上流にある。
14〔オシリス〕古代エジプトの主の一人。殺されてから復活し、死者を裁く王となる。
15〔ピュートーン〕ギリシャ話に出る大蛇。パルナッソス山の洞穴に棲んでゐたが、デルフォイでアポロンに退治された。

今だつて變はらない、
同じやうな最期を迎へた者には、
痛切な祈りに滿ちた祈祷書の言葉を、人々は捧げるのだ――時は移り、
クリストの番となり、彼も墓に納められ、あそこで人々に崇拜されてゐる」、
さう云つて、ロルフは聖墳墓會を指さした。――「つまりあなたは」、
とヴァインが訊ねた、「クリストに於て、オシリスは新たな死を經驗したと、
さう云ひたいのですか」――「いや、さういふ譯では。しかし、
我エジプトより我が子を呼び出せり[16]、といふ、
聖マタイが陰鬱なるホセア[17]から借りたあの一節は、
明らかに、妙です」。
　クラレルが口を開いた。熱心な口調ではあつたが、
必ずしも確信がある譯ではなく、戸惑ひ氣味でもあつた。

16〔我エジプトより我が子を呼び出せり〕新約聖書「マタイ傳」第二章第十五章。
17〔ホセア〕紀元前八世紀のヘブライの小預言者。

「しかし、マタイがあそこで云つてゐるのは、
逃亡生活、つまり、エジプトでの逃亡生活から戻つて來る、
さういふ事でしかないのでは?」――「多分、さうでせう」、
とロルフは云つた。「しかし、それなら、ホセアの場合は?――いや、
やめませう」。――會話は進まなくなり、
みなが默り込んで、思ひに耽つた。
突然、ロルフが云つた、
「マタイとキケロとの間には、無論、
大きな懸隔があります。しかし、
なぜか、ここでキケロが想ひ出される――彼と彼の立派な書物は、
（々を取り替へるならば）現代に書かれた文章として、
立派に讀む事が出來る。實際、
キケロの時代は現代ととてもよく似てゐた。懷疑がはびこり、
信仰は衰微し、各種の否定的想念が、
法律家、聖職者、政治家、及び身分のある者達の心に適ふものとなつたが、

未だ一般大衆によつて尊重されてはゐなかつた。
それゆゑ、占ひ師の類もある種の地位を保つてゐて――
文盲達のために役立つてゐた。
けれども、信仰の衰退の足取りは、
段階を踏んで急速に進み、信ずる事は、
奴隷や職人以外にとつては、
邪同然に思はれた。懷疑思想ですら、
當初は恐怖をもつて迎へられたが、十年も經つと、
時代遲れとなつた。至高の父なる存在への確固たる信を奪ひ取るのが、
天職とみなされた。詭辯家達が跋扈し――
おのがじし、夢のか細い絲を織つて、
ローマ王ヌマ[18]の奉じたユピテルのための經帷子を作らうとした。
カエサルは元老院で、

18〔ローマ王ヌマ〕傳説的なローマ第二代の王。

無論の思想を公言した。が、
こんなに澤山例を擧げるには及ばない。要するに、々は去つたのです。
々が再び信を取り戻せるやうになるなどとは、
キケロは夢想だにしなかつた。況や、地上が、
より強力なの誕生を知る事が出來るなどとは。
は死んだ。ところが、クリストが到來した。
そして、やがて、かの不信心なローマが、
巨大な廢墟と汚辱の中から立ち上り、
クリストの先頭に立つた。
以上から推測される事は？　訓は？——こんなのはどうです。
愚者をして信仰の弔鐘を恃ましめよ——
時間、すなはちは、盡きる事なし。——
どうでせう？　熱し過ぎましたかな？　どうも、いつものくせで」。
「噴泉が湯水を噴き出さずにゐるのは難しい」と、
ヴァインがささやいた。ただの皮肉の積りだつたのか？

少くとも、聲の調子に惡意はなかつた。
ロルフは殆ど氣づかなかつた。或は、それを無視した。
　クラレルはと云へば――例へば、君が砂漠でバクダッドの隊商に出遭ひ、
それをじつと眺めてゐたとする。
騎馬で行く者、駱駝、徒歩で行く者、
兵士、商人、自由の身の者、奴隷の身の者、
皆が、潮流のごとく行列をなして通り過ぎ、
寂寥の地は一轉、ニネヴェ[19]の雜沓、
喧騒、塵埃、騒音の巷となる。
ロルフが次々に繰り出す數々の思念は、初學者たるクラレルにとつて、
眼前を移動して行く隊商の群れのごときもので、大いに困惑せずにはゐられなかつた。
それらの思念の支配をクラレルは認めた。けれども、いかにしてか、ヴァインは――
僅かの言葉をささやくか、仕種で思ひを傳へただけだつたが――

19〔ニネヴェ〕古代アッシリア帝國の首。

クラレルをより強く魅惑した。何やら、海賊キッド[20]のダブロン金貨さながらの、
より貴重な寶物を、より珍奇な貯藏物を、
祕匿してゐるやうに思へたのだ。それらの金貨は、
魔法の杖がないために、久しく發見されなかつたといふ。
　鐵玉のついた鎖を引きずる囚人よろしく、
思考の重荷を引きずりながら、
一行は斜めに丘を登り――ゆつくりと、
物も云はず、進んで行き、やうやくある地點に到達した。
敬虔な人々が佇んで、恐らくは、
優しさといふものを知る處。しからば、ここで、
これら巡禮者達がしばらく佇んでゐる間、
その時を一つの壁龕として利用して、そこに、
新奇なるを具へたある像を納めるとしよう。

20〔海賊キッド〕ウィリアム・キッド。スコットランドの海賊（一六四五？～一七〇一）。

第三十二章／ラーマ[1]について

インド人が歌に歌つたかのラーマ――
彼は神の身であつたが、自らはそれと知らなかつた。
それゆゑ、過つて人間の仲間に入れられても、
その不當に徒らに困惑するしかなかつた。
己が權利の削減に、抗辯するより、むしろ、
黙つてそれに耐へた。が、彼の従順な態度は、
かへつて人々の嘲弄を招いた。
不當を正される事もなく、逃亡する身となつたが、
精霊を悲しませる事はつひぞなく、

1〔ラーマ〕インドの叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公でコーサラ國王子。ビシュヌ神の第七化身として神格化される。

内なる神性を剥奪される事もなかつた。
尤も、神性の何たるかを、推し量らうとさへしなかつたらうが。

ラーマほどにも、けがれなきままに、全うな道を逸脱させられ、
名誉を失墜させられた者が――すなはち、
ラーマほどにも、心ならずも、法の埒外に身を置かされた者が、
この實人生に存在し得ようか？
それ程にも神話と現實とが一致する事があり得ようか？

霊妙なまでに純潔で、
法の埒外にあつて無垢を保つ妖精にも、
自我の意識は存在する。
き霜は草木を枯らし、白き霜は凍らしめる、
が、白き霜もき霜も、
忍耐強い根までは殺せない。
草木が冬を耐へ拔くやうに、春の感覺が、

過酷な経験を耐へ抜くのだ。かの神の呪ひすら[2]——
胆汁と苦よもぎを一緒に飲み込むべしとの呪ひをかけられたと云ふが——
もつと辛い目に遭はされてもをかしくはない——
が、人の内なる獣性にとつては天與の贈り物であつた——
とまれ、かかる神の呪ひすら、耐へ抜く力を持つ者を打ち倒せない。
　さういふ活力のある者は、
とかく衝動に身を任せたり、
安逸な生活に耽つたりしがちなものだが、
さればとて、悲しみの杯を、
わざと他人に飲ませたりはしない。

2〔かの神の呪ひ〕舊約聖書エレミヤ哀歌第三章第十五節～十六節にかうある。「かれ我をして苦き物に飽かしめ茵?を飲ましめ、小石をもてわが齒をくだき灰をもて我を蒙ひたまへり」。

彼らは惡巧みを知らないし、羨望に胸を疼かせる事もない。
海中深く潜りもし、海面をなめらかに滑りもする、それが彼らの思索の特徴だ。
溢れ落ちんばかりの香り高い涙は、彼らのものだ。
氣持のよいえくぼと、快活で氣まぐれな心は、彼らのものだ。
　他ならぬさういふ性格の者達だけが、
死すべき人間のうちに抑壓されて隱れ潛む、
不可思議なる事どもを深く知るに至り、
平々凡々たる人々の心の謎の數々を語るのだ。
　汝は信仰のために、天國の美名のために、
言葉遣ひを加減するや？　それこそは、上邊の虚飾こそは、
正に彼らが反逆する當のものだ。
　アダムやイヴの心の秘密を、
暴き出す事實が記された書物を、
彼らはじつくりと精讀する。それが眞實であるならば、
いかに忌はしい眞實であつても、敢へて異を唱へようとはしない。

彼らの内なる富は、
鉱石の含有物のやうなもので、賣り物にはならぬ代物だ。
一向にかまはない。「鉱坑は誰にでも開かれてゐる。
堀るがいい。汝ら、金を見つけて、己れのものにするがいい。
知恵と才覺に惠まれてゐるならば、
溶解して鋳型を作れ。汝の努力は必ずや報われよう」。

地上に生れながら、かつてこのやうな者が存在したか。
しかり――恐らく、詩の中に。

第三十三章／石塊のそばで

ここ、神殿の眞向ひに、
久しい昔に崩壊した修道院が――
その名は我らが主の預言[1]に因んで付けられた――
修復もされぬまま放置してあり、すぐ外側には、
石塊が幾つか殘つてゐて、格好な腰掛となつてゐる。
優しい心映えを偲ばせる云ひ傳へによれば、
その一つに救ひ主が腰を降ろして預言をし、
劍と炎の下、傲れるエルサレムが、
いかなる運命に陷るかを思ひ、

1〔主の預言〕新約聖書ルカ傳第十九章第四一節～四四節參照。

悲痛な氣持になられたといふ。
陽光が降り注ぐその時、主の眼前には、
美しい光景が展開してゐた――
石柱の列と棕櫚の木立――白と緑――
青葉に包まれた大理石。
しかるに、今――ここに見えるのは、あたかも、
発掘されたポンペイの遺跡さながら、いかにも色彩の稀薄な光景だ。

ロルフは長い間、膝に肘を載せ、
まつすぐに立てた顔を両手でしつかりと支へ、
身じろぎもせず、この光景を見つめながら、
緩慢に荒廃してゆくエルサレムの町に思ひをめぐらしてゐた。
「ここに」と彼は云つた。「ここにあの方は腰を降ろし――
つまり、木陰に身を隠して――都を見やり、
之がために泣いた。

ルカはさう語つてゐる。これ以上の表現は難しい。
正に簡潔この上ない云ひ方で、
眞實を語つてゐる」。——いかにも眞劍な様子で、
そんな話を續けた。
クラレルは黙つて考へた。
ロルフは場所や人の名を恭しく口にし、
話し振りも率直だつたが、ただそれだけの事で、
信仰の升目を滿たすには至らなかつた——今や標準の規格となつた、
いともちつぽけな一ジル升[2]を滿たすまでにも至らなかつた。
トロイの平野で（とクラレルは思つた）、

2〔ジル〕ヤード・ポンド法の液量單位。四分の一パイント。約0.118リットル。

ガルガロス[3]の山頂から下を見下ろし、
ホメロスに纏はる遺跡の數々の場所を確かめ、
秘かに喜びを覺えるやうな事は確かにある、が、さればとて、
ヴィーナスの冠の事とか、彼女が自らの從順な息子を救つたといふ、
かのトロイ戰役の救出劇の事とかを、
本當の出來事として信じるのは難しい。
ロルフにしても同じ思ひで、これら輝きに乏しい高所から、
クリスト教徒にとつて大切な、あれらの城壁や斜面を眺めてゐるのだ。
クラレルは甚しく困惑せざるを得なかつた。
かくも率直かつ眞面目な容認の態度は――
史跡や聖書の文言を思へば、ふさはしい態度とも云へようが――
寧ろ明確に異議を申し立てる以上に、

3〔ガルガロス〕イーダ山の事。小アジアの北西部にあり、ギリシャの神々が山頂からトロイ戰爭を見物したと傳へられる。

否定の意思を表明してゐるやうに思へたからだ。
　しかし、やがて、
ヨシャパテの谷を望む門のすぐ側に群がる、
ヘブライ人の市民の姿に、
一行は氣づく。
「連中が町の外に出て來るのは、驚くに當りません。
何しろ、町の中に快適な家を持つ者など、ほとんどゐないのだから」、
とロルフが云つた。「連中、腰を降ろしてお喋りをしてゐるが、
町中の通りで噂話に興じる事など滅多にない。
忙しさうにしてゐる者など、一人も見えないでせう。
當然です。ここには、する事が何もないのだから。
どうやつて暮らしを立ててゐるのか。どんなパンを食べてゐるのか。
實は、地上のありとある國に、
裕福なイスラエル人の親戚がゐるのです。
帽子が世界中を經めぐる譯だ。が、ご覧なさい」。

ロルフの言葉に動かされ、皆がその生氣のない集團に、
より注意深い目を向けた。遠い距離を隔てて小さく見える、
悲しい幻のやうな光景の中で、あたかも連中は、
パタゴニア[4]岸邊に打ち上げられたペンギンのやうだつた。

「おう、都よ」とロルフが叫んだ。「鎧戸は破れ、
扉も壞れて荒野に立つ、家の有様さながらではないか、
汝の姿は。そして嵐は、
なほも汝のまはりに、泣き叫ぶバンシー[5]の聲を響かせる。
「悲しいかな、我らは死ぬ」
聲を聽いて、神殿の祭司が震え上るのも無理はない。

4〔パタゴニア〕アンデス山脈から大西洋にのび、アルゼンチン・チリ兩國にまたがる南米大陸の南端地方。
5〔バンシー〕アイルランド民話。家に死人が出る時、恐ろしい泣き聲でそれを知らせる女の妖精。

クラレルは耳を傾けてゐたが、
目は控へ目にヴァインの顔の動きを追つた。
熱烈な話し手の言葉が、
無口なもう一人の方の顔にいかなる反應を惹き起すか、
專らそれが氣になつてゐたからだ。
かすかな風のそよぎにも立ちどころに反應を示す、
いかにも纖細で樣々な意味に覆はれた顔、それは、
他人の視線を避け、恐れた、といふより、
親しげに見つめられる事に、我慢がならないのであつた。
ロルフは話を續けた。
「この町に生まれた當の者達が、
町に背を向け、どこかに逃れ去りたいと思つてゐる。
尤も、町の王冠ともいふべきかの呪ひに責められてゐては、それも無理だが——
行動をかくも制約するかの呪ひ、すなはち、貧困に責め立てられてゐては。
ご覽なさい、彼らを。蹲つてゐる男達を。

正に雛だ――雌鳥のゐない雛だ」――

「都よ、預言者を石にて撃つ者よ、
汝らを恐るべき裁きから守らんとて、
我のものたる汝らを、我が翼のうちに集むべく、
翼をひろげしこと幾度ぞや。
されど、汝らは好まざりき。ああ汝、汝もし、
汝の平和に關はることを知りたらんには」[6]。

さう叫んだのは、再び合流してゐたネヘミヤだつた――
古き都エルサレムと同じく、老いたる姿をさらしながら、
彼はいとも熱心に都の方に身を乗り出した。
けれども、腰をおろして聽いてゐた者達は、

6〔「都よ・・・知りたらんには」〕新約聖書ルカ傳第十三章第三四節及び第十九章第四二節參照。

あたかも彼が、消滅した部族や世界の、
ただ一人の生存者でもあるかのごとくに、無遠慮な視線を浴びせた。
ネヘミヤの顔から光が消え、
活氣はまるで失はれ、何かしら心配事でもあるかのやうに、
彼は皆から離れ、あてもなくうろついた。

第三十四章／歩みをとどめて

「この都は、なんと寂しく、獨り、
丘の上に座してゐる事か。しかも、なんと靜かに――
本當に、なんと靜かに！」さう、ヴァインが呟いた――
あたかも、その光景の沈黙の主張に、
無理強いされたかのやうな聲の調子だ。
それだけ云ふと、彼は再び靜かになつた。
霧雨の中、山間の小川に佇んで、
身じろぎもしない、孤獨な釣人さながらの様子。
が、ロルフが口を開いた。「それは、
エレミヤの言葉[1]ですね。いかにもこの場にふさはしい。

1〔エレミヤの言葉〕舊約聖書エレミヤ哀歌第一章參照。

しかり、アナトテの預言者[2]よ、見るがよい、
彼方の光景は、汝の言葉と一致する。
で、どういふ事になるのか？　理性は少しも困惑を覺えずにゐられるか？
ここでは、預言が成就したからとて、心が浮き立ちはしない。
胸に抱きしめたくなるほどの確乎たる證據が、
變化や消滅に晒されてゐる物象の有様から、
いかにして引き出され得ようか。
しかし、その事は今は措かう。今や全てが變つてしまつた。
ローマと同じく、シオンはニーブール[3]の支配下にある。
しかり、懷疑が見張つてゐる。懷疑の重い手が、
我々に向けられる。そしてその劍が、
ふさはしい主君――平凡といふ王――のために戰ふのだ。その忌むべき支配下、

2〔アナトテの預言者〕古代イスラエルの代表的預言者の一人エレミヤは、エルサレム近郊アナトテのレヴィ人司祭の子として生れた。

3〔ニーブール〕Barthold Niebuhr 一七七六～一八三一、ドイツの實證主義的な古代史家。

卑俗なる權力は年を追つて擴大し、
アトランティスをも、支那をも併呑してしまふ。
そればかりか、女神ダイアナ[4]の月世界にまで手を伸ばし、
月とは溶岩の塊、ただの汚點にすぎぬと斷じ、
青ざめたエンディミオン[5]をあざ笑ふ。
しかく萬物を水平化しようといふのだから、
今に銀河をも引きずり降ろし、
アッピア[6]よろしく、己が都に至る街道にしてしまふだらう。
されば、語れ、パレスティナよ、語つてくれ、
古き「幻想」の棺を載せて、數多の棺臺が墓地に向ふ今、
汝の驚異が墓穴に埋葬されてしまふのを、
如何なる魔力が食ひ止めようといふのか。一體、如何なる魔力が。

4〔女神ダイアナ〕古代ローマの月の女神。處女性と狩獵の守護神。
5〔エンディミオン〕月の女神に愛され、永久に眠つたままにされる羊飼の美少年。
6〔アッピア〕アッピア街道。ローマからブルンディシウムに至る古代ローマの有名な道路。

おお、不遜なる變化よ――良俗にも、
慈悲深い神々にも、楯突かうといふのだ。
新しき物が、意気消沈する古き物を尻目に、
得意滿面、枯れた葉鞘を突き破るかの如くに、
強引に生れ出る。ここに豫告されるのは、
過去の終焉、そしてまた、
ぎらぎらと輝く、一日の夜明け、
その日が眞晝を迎へるのを、聖者も止めようとは思はない――
私にしても、恐らくは。クリストと愛の朝食を共にしたものが――
如何なる未知の主君と夕食を共にしようといふのか。
時間が新手の豫備の兵力を續々と繰り出して來るかのやうだ。
否、それは違ふ。如何なる胚種も新くはない以上、
全く新奇なものなどあり得ようか。しかし、運命の命ずる所に從つて、
地球の中樞部は、今も息づきながら、
變化を重ねてゐるのではないか。何か異常な成分や、

機能が發生した事はないか？　地表が大きく割れたり、
海淵から何かが吐き出されたり、
神の大釜の中で諸大陸が作られたりした事はないか？
けれども、さればとて、
過去が無力化された譯ではない。
過去の執拗な根本原理は、水の流れさながらに、
善をも惡をも――
ソロモンが慨嘆したかの穢れ[7]をも、
代々代々に亙つて傳へるのだ。
運命の香油の壺か！　汝の仕業か？
蠅の王、蛆虫の神よ、甘美なるもののすべてを、
どうしても汚さねばならぬのか、汝、ベルゼブブ[8]よ」。

7〔ソロモンが慨嘆したかの穢れ〕舊約聖書傳道之書第十章第一節參照。
8〔ベルゼブブ〕魔王。原義は「蠅の王」。

ロルフは語り終へた。――繊細な資質の者にとつては、
苛酷に過ぎる推論を逃れようとて、或いは和らげようとて、
クラレルは以前ロルフの語つた言葉の一つ一つを思ひ起こしたが、
今しがた語られた言葉の多くとは、
殆ど一致しないやうに思はれた。
ヴァインはと云へば、地面から雑草を引つこぬき、
種を一粒づつ、摘み取つてゐた。
やがて一同は立ち上り、坂道を上りながら、
今もなほ人々の心を動かす云ひ傳へのある、
卓絶したある物に目を向けた。
それを見て、一人が、
中世のある出來事について語つた――
次にそれを記さう。が、その際、
これまでの漫然たる語り方はやめ、
中斷をなくし、淀みなく、

流れるやうに語り、簡潔な物語によつて、
その遺跡を豫示するとしよう。

第三十五章／アルクルフ[1]とアダムナン[2]

數多の人々が崇敬を捧げる處、
傳承によれば、そこから、インマヌエル[3]が天に――
當時は未だ受容力に富んでゐた天に――昇つたといふ。
そこには、漆喰を塗られた小塔が、
シリアの地特有の光の中、
オリーヴ山頂にほの白く立つてゐる。
塔は現代のもので――長い歳月が積み重ねられた後、

1〔アルクルフ〕八世紀のフランスの司教。聖地巡禮を行ひ、その記録を遺した。巡禮の歸途、スコットランドのヘブリディーズ諸島のアイオーナ島付近で難破する。
2〔アダムナン〕アイオーナ島にあるセント・コルンバ大聖堂の修道院長。アルクルフの世話をした。
3〔インマヌエル〕イザヤによつて誕生を預言された救世主の名。舊約聖書イザヤ書第七章第十四節參照。またはイエス・クリストが呼ばれた名。新約聖書マタイ傳第一章第二三節參照。

そこに建てられたが、
狭隘な敷地に立つその様子は、人間の信仰の、
小粒となつた今の有様に、似つかはしくなくもない。
それはハーキム[4]の仕業だつた。狂へるカリフたる彼が（しかも、
（諸種族に遍く、かつ久しく信奉された教義の創始者でもあつた彼が）、
こののどかな高臺の頂から、初めて、
ヘレナの教會[5]を追ひ落としたのだ。教會堂にとつても、
他の多くの立派な禮拜堂にとつても、實に悲しむべき出來事だつた。
幼子のやうな昔日のクリスト教國の巡禮の群を、
この地に強く引きつけたのは、他ならぬヘレナの教會だつたのだから。
かつてはいかにも美しく――
オリーヴ山頂の祝福された目印だつた――

4〔ハーキム〕エル・ハーキム。イスラム教の一宗派ドゥルーズ派の創始者。ファーティマ朝第三代カリフ。
5〔ヘレナの教會〕コンスタンティン大帝の母、聖ヘレナがオリーヴ山上に建てた有名な教會堂。

正しくそのヘレナの教會について、
アルクルフはアイオーナ島で語つたのだ。
聖地巡禮者たる彼の乗つた船が、アイオーナ島の近くで難破すると、
島の美しい修道院、セント・コルンバ大聖堂の「神の僕」達が、
泡立つ海から救ひ出し、
避難所と家とを與へてくれた。
大聖堂が示してくれた、
愛情と心遣ひに應へようとて、
クリスマスの前夜、アルクルフは旅の話を語つて、
「神の僕」達を樂しませた。
　外は激しい嵐となり、
大聖堂の土臺は震へ、
壁にかかる十字架が騒々しい音を立てた。
破風の瓦ががらがらと落ちる音が、
三度聞えた。けれども、主人と客、

修道院長と聖地巡禮者は、丈の高い暖炉のある部屋の中で、
安らいでゐた。
彼らにとつて、荒れ狂ふ海が何であつたらうか。
パトモス島[6]にせよ、ヘブリディーズ諸島にせよ、
一切はすべて、神のものだ。
　當時、
ユダヤの地のその教會は、平安を樂しんでゐた。
オマール[7]の全盛期だつたから、アラブが支配してゐたが、
それでも、未だ素朴な情熱の生きてゐる、最後から二番目の時期だつた。
クリスト教國家全體にわたつて、
福音は未だ死滅してはゐなかつた――
活力が衰へ、死の音を響かせながらも、

6〔パトモス島〕聖ヨハネが流されたと傳へられる、小アジア南西方沿岸沖にある島。
7〔オマール〕六三六年にエルサレムを占領して、「岩のドーム」と稱される有名なモスクを建設したカリフ。

遠のいて行く死の木霊となり果ててはをらず、
大いなる歓喜を傳へる喜ばしい知らせが、
草原の羊飼の胸をなほも躍らせてゐた。
「見よ、今日、汝らのために、
救主生れ給へり、これ主クリストなり」[8]。
教會堂や祭壇や神殿では、
新しい大理石の中で、雲母が、
露の滴のやうに、未だきらきらと輝いてゐた。
當時は、パレスティナが一つの大聖堂で、
全體が記念碑さながらだつた。
　アルクルフはまづ、
聖墳墓の驚異と、
ゴルゴタについて、更には、木々について語つた。

8 〔「見よ、・・・クリストなり」〕新約聖書ルカ傳第二章第十節～十一節參照。

オリーヴの木々が、黄昏時の微風の中、
修道院の物陰で――ゲッセマネの、
久しい以前に朽ち果てた修道院の物陰で――
もの悲しい吐息をついた事について。それから、かう語つた、「丘の上の――
イエスの恵み深い御業によつて啓示された場所に」――
（ここで二人は素早く十字を切つた）
「大いなる圓形の教會が、見事な技術を驅使して、
堂々たる姿に築かれました。朝には、三重の前廊を、
風に乘つて、かぐはしい香りが吹き抜けます。
が、『傷つける足』が最後に足跡を遺したといふ、
かの聖なる場所の眞上には、
屋根が空に向つて開いてゐて、
燕達がその邊りを嬉しげに飛び回る。
昇天祭の日――ミサが終ると、
風が、音を立てて、

禮拜する人々の中に吹き降りて來ます」。
修道院長がまた急いで十字を切つた。
アルクルフが續けた。「その夜の間中、
モリア山に面する、
山の寺院の西の側面には、
使徒達の光を偲んで、
十二の張出窓に、十二の色の灯がともされます。
キドロンの土手の塔の上や、
斜面と臺地とが段々をなしてゐる邊りから、
集つた町の人々がその方向を遙かに見やると、
十二の焔の花々が、
人々の顔面一杯に光の色を反射させ、
菫色、金色、朱色に染め上げます。
丁度、ナポリから見た光景がさうでした（船旅の途次、
壺や梱を積み込むために寄港した時の事）、

ヴェスヴィオ山の立ちのぼる火焔が、
ナポリ灣を朱色に染め、帆柱や尖塔も眞つ赤でした。
ところが、昇天祭の前夜には、
一つの光が現れます――しかも人の手が點じたのではない光が。
ご覧なさい」、暖炉を指さして、アルクルフが云つた、「ほら、
ここの灰褐色の燃えさしを。
火の粉が舞つて、焔が搖れてゐるでせう。
丁度こんな風に、オリーヴ山も輝くのです――
羊毛の様な焔に撫でられ、卷きつかれ、絡み合はされて、
それが象徴するのは、
おう、正に神の仔羊、世の光なのです」。
　恐怖、と云つても、神聖なる恐怖に戰きつつ、
「神の僕」はもう一度十字を切り、
聖地巡禮者の手を熱く握り――
あたかも妖精をめぐる不可思議にして胸躍る話に

興奮した子供よろしく、いつまでも手を離さず、
その光景を實際に眼にした相手から、
視線を引き離す事も出來ずにゐた。
けれども、何と不氣味に、
ピクト族[9]の嵐の王は、
アルクルフと善良なるアダムナンの頭上高く、
破風のまはりを嘲り嗤ひつつ、
リフレーンを歌ひ續けてゐた事か。

修道院長と聖地巡禮者は永遠の眠りにつき、
續いて、諸々の傳説も死滅する――
が、實を云へば、それらの傳説は、

9〔ピクト族〕スコットランドの北東部に三世紀末から九世紀頃まで定住し、スコット族に征服された民族。

天空を彼等の方へ引き寄せたのだ――
預言者や聖者が公言するあらゆる事柄について、
彼等の希望に近づくやうに天空を招き寄せたのだ――
しかるに、ガリレオの望遠鏡は、
天空をして、現代の散文的な「科學」に赴かしめるに過ぎない。

第三十六章／塔[1]

一行は塔に着いた。數人のギリシャ人の巡禮が、
默つて景色を眺めてゐる。
一組の家族が物憂げな様子で、
山を降りて行かうとしてゐる。
つひに皆立ち去つて、一行だけが殘された。
平地に立つ屋根の無い家の、
暖爐の石の傍にでも佇んでゐるやうな塩梅だ。彼らは、
胸中の曖昧な思ひを口にするのを恥ぢてでもゐるのか。
知性が心情に、從順な近親たる心情に、

1〔塔〕オリーヴ山頂に、ヘレナの教會に代つて建てられたもの。

逆らふ主張でもなしてゐるのか。
　しかるに、彼、彷徨へるネヘミヤだけは――
彼の姿を見るがいい。何ゆゑかくも喜ばしげなのか。
主が天に昇る様を心に描いてでもゐるのか。
拂暁の月さながらの蒼白の主が、
静謐な調和と恍惚の思ひを顔に浮かべた、
若く柔和な者達に守られて――
花飾りや、星々や、ハルシオン[2]の翼や、
主に仕へる多くのもの達と共に昇天する姿を。
　さうして心を燃やすネヘミヤを眺めながら、
他の三人は、いかなる暗示を、いかなる否定を、胸に秘めてゐる事か。
しかし、何も語らず、彼を殘して、
三人は塔の中に入り、岩に殘された跡を――

2〔ハルシオン〕カワセミと同一視される傳説上の鳥。

昇天の折、クリストが殘したとされる足跡を見る。
が、質問を發する者は誰もゐない。
それから、階段を昇り、屋上に出る。
エルサレムを見下ろすと、
その傍らにキドロンの谷がちぢ込んで見え、
石の小道が地圖の模様さながらに市街地を走つてゐる。
「あれに見えるのが、かのよそよそしいディーテの都[3]か」
とロルフが云つた。「いや、むしろ版畫と云つた方がいい。
古く、汚れて、皺のよつた銅版畫よろしくだ。
それに、ご覧なさい、その彼方には、何とも生氣に缺ける丘陵が。
小川や小鳥が神を讃へて歌ふ歌は遙か昔に死に絶えた。
木々も羊齒も生えてゐない。

3〔ディーテ〕地下界。死者の國。ダンテ『神曲』地獄篇第八曲參照。

キシュ[4]の子の血をく汚した、
邪悪なる谷間では、
地衣類が生育する事すら許されない」。
　遠くの方に眼をやると、
大釜のやうな形の幾つもの湖沼が、
鉛色の死の山々の間にぼんやりと姿を現してゐる、すなはち、
「ソドムの波」、「腐敗の海」、
「塩の海」、「五つの町」、
「ロトのアスファルト」もしくは「死のアスファルト」、
「阿魏」などと稱される類で、
誰もが忌み嫌ふ邪悪にして穢れた場所に、
手枷足枷よろしく、
しつかりはめ込まれた名前ばかりだ。

4〔キシュの子〕イスラエル初代の王、サウルの事。

あたかも、孤獨の時に心に宿る思ひが、
この光景によつて確證されたとでも云ふかのやうに、
ヴァインは口も利かず、思ひ詰めた表情で、
じつと見詰めて佇んでゐた。他の者達も、
それぞれの氣質に從つて、強く心を動かされた。
オリーヴ山と、はるか彼方の、
死せる波と――なんぴとが口に出して語り得ようか。
「希望」の丘が「絶望」の湖面を見下ろしてゐる、
そんな思ひが心をよぎる。が、三人は何も云はず、
塔を降りた。地面に降り立つと、
ネヘミヤが出迎へた。「いかがです、
少し散歩などしてみては。よろしければ、
あの丘を越えて行つてみませう――

ベタニヤ[5]はとても良い町です。
御案内しませう、道をよく知つてゐますから」。
　ネヘミヤの期待に滿ちた眼差はかう問ふてゐた、「行つてくれますか」。
かくも純朴にして眞率な表情を目のまへにして、
ヴァインは當惑げな顏附をした（クラレルも同じく）、
が、優しく感謝をこめて、それは有難いと答へた。
ロルフは意中を推し量り、
ネヘミヤに穩やかな口調で囁いた、
「いつか、別の日にでも」。
　恐らく、皆、塔から見た光景に、
心が大きく揺り動かされ、ために、
ベタニヤを訪ねる氣分にはなれなかつたのでもあらうか。

5〔ベタニヤ〕エルサレムに近く、オリーヴ山の麓にあつて、イエスの好んだ牧歌的な町。新約聖書マタイ傳第二十一章第十七節參照。

第三十七章／素描

彼らの胸底も知らず、
同行をいやがる譯も知らず、
ネヘミヤは落膽して離れて行き、
元氣なく枝を這ふナマケモノよろしく、
のろのろと、悲しげに足取りを運んだ。

一息つかうと、三人が地面に腰を降ろした。
するとロルフが、ゆつくりと歩くネヘミヤの姿を、
なほも眼で追ひながら、
クラレルに訊ねた、「何か知つてゐますか、
あの男が前にしてゐた事について」。
「いや」とクラレルが答へた。——「私はね」、

とロルフが云つた、「似たやうな船乗りの事を思ひ出します」。
「船乗りの事を」――「いかにも。恐るべき災厄を經驗して、
あそこをとぼとぼ歩く男と同じやうに、
いとも柔和になつた人間の事を」。この時、ヴァインが、
強い關心を示して、熱つぽく云つた。
「その人物の話とやらを、ぜひうかがひたいものです」。
　ロルフが話し始めた。「その船乗りが、
緑なす死者の國に、今、やうやく辿り着き、
そこを宿として、平安を享受してゐなければ、
彼の身にふりかかつた事を、
口にしはしないでせう――
とても多くの事柄が暗い雲に覆はれてゐる。
彼は頑健で、快活で、勇敢な、
船長だつた。夜の見張りをしてゐる時など、
船乗りが時にやる様に、

深刻な問題についての自らの考へを、
嚴格な信條を奉じる航海士に、
よく打ち明けたものだつた。
カルヴィンのものであれ、ゼノンのものであれ、
宿命論など、彼は常に輕蔑してゐた。
やりたい事を成し遂げる、人間の自由なる意志及び能力を、
いつも雄々しく辯護し、
それはよきものであると考へもし、口に出して語りもした。
航海士の方は、依然として天の力が意志をも出來事をも支配してゐると、
謙虚な態度で主張した。
「海圖制作者が測量した事もない、
僻遠の海域を、
樂々と滑るやうに航海しながら、
この逞しい船乘りは、夜の靜寂を破つて、
斷固たる闘ひの意志を強調した——

が、突如、よろめいた。船が大きく揺れて、
船も言葉も、完全に停止してしまつたのです。
暗礁だ。激しくぶつかつて、軋る音――
帆柱が倒れ、甲板に落ちかかる――
破損した箇所から、海水が渦を巻いて急速に流れ込む、
それと共に、えこひいきを知らぬ自然の力もまた。
難破だ。昔のその頃、
その海域は廣く知られてをらず、迷路のやうに思はれてゐて、
いづれの群島の島々も、ひどく恐れられてゐた。
廣大な大洋に挑み、
スパニッシュ・メイン[1]を目指し、
貿易風と闘つて漕ぎ進む方が、
餘り遠くない風の吹かない谷間や、

1〔スパニッシュ・メイン〕南米北部のカリブ海沿岸地方。

棕櫚の木陰に流れ着くよりましだ、
船長はさう考へたのだが、それが大きな間違ひだつた。
全員がボートに乗り移つた。天氣は良かつた。
空には一片の雲も無かつた。
いつも變らず穏やかな風が吹き、
一週、一週と過ぎて行つた。けれども、やがて絶望感が襲つて來た。
少しづつ分配されてゐたパンも、貯へてあつた水も、
段々少くなり――つひに底をついた。飢えと乾きに苛まれ――
いとも忌はしい罪も許されると思ふまでに、
追ひつめられた。おう、貿易風よ、どうか向きを變へてくれ。
「秘せられたままでゐた方がよい物事もある――
獨り生き殘つた者でも、語つてはならない物事もある。
船長が救出された時、上着を着た骸骨が、傍らに、
寄り添ふやうに横たはつてゐた。
他のボートの者は皆死に絶え、ただ獨り、生き殘つてゐたのだ――

遭難の合圖の旗はぼろ切れ同然になつてゐた。
「『しつかりなさい』と救助者が云つた。
『これほどの試練を獨りで耐へ拔いた貴方だ』。
『意志の力でやつたのだ』と、喘ぎながら船長は云つた。
そしてこの男は、
陸地で力を回復し、またもや海に出て行つた。
長旗を翻す船に乘つて、
南氷洋の海豹獵に、
彼は勇んで出て行つた。しかし、入江を出て行つた筈なのに、
餘りにも早く、陸地傳ひに港に戻つて來たのは誰か。
如何なる拒絶に出逢つて、呼び戻される事になつたのか。
彼を拒絶したのは、叛徒でも、岩礁でも、強風でも、
浸水でもなかつた。さうではなくて、鯨が、
わざわざ狙ひをつけて、船首を突き破つたのだ。
船は轉覆した。今や、

船の所有者も、隣人も、
船長は星まはりが良くないと云つた。彼の妻は――
優しいが、臆病だつた――可哀想に、
愛情と無知蒙昧との板挟みになつて、
激しく懊悩してゐた。夫は不運な星の下に生れた、
ヨナ[2]のやうな人ではあるまいか――
人々は船長の災難を云ひふらした。三度目の冒險を企てるやうにとは、
無論、誰も云はうとしない。やがて、
大いなる必要に迫られ、
やむなく彼は波止場の夜間巡回者となつた。
天氣が良からうが惡からうが、
朝まで船荷を見張る仕事です。微笑む事もなくなつた。
彼を呼べば、やつて來る。ふて腐れた感じではなく、

2〔ヨナ〕ヘブライの預言者。舊約聖書ヨナ書參照。

温和で、誰にも愛想がよい。
忍耐強く、誰に逆らふ譯でもない。
屡々、心中に秘めた何事かについて考へ込んでゐた。
手に入る物ならば、固くなつたパンのひとかけらでも食べた。
カルヴァンの教義を彼は信じた。
天を讃へ、神はよきものであり、
自らの苦難は正當だと語つた。
かのシルヴィオ・ペリコ[3]の場合もさうだつた。
久しく土牢で暮した後、よろめきながら扉から出て、
足は萎え、蒼白となり、仲間も皆死に絶えたのに、
彼は云つた。『有り難や。皇帝に感謝する』」。
　話をやめ、しばらく口を噤んでから、

3〔シルヴィオ・ペリコ〕Silvio Pellico 一七八九～一八五四。イタリアの詩人、愛國の志士。大逆罪の科で十年間の獄中生活を送る。

ロルフはネヘミヤに視線を向けて云つた。
「御覧なさい、あそこを、船長が姿を變へて歩いてゐる。
かくも實體の無い、空氣さながらの姿で」。
　ロルフが物云はぬヴァインと、
クラレルとの間に座つた。神秘の海から、
艶々しく美しいラオコーン[4]の蛇が姿を現し、
幾重にもとぐろを巻いて、
ねつとりと三人に巻きつくやうに思はれた。
すると三人の方に、かの青白い老人が
近づいて來た。が、三人はぼんやりと見てゐるだけだ。
彼は亡靈さながら、風は絶えず嘆き聲を上げてゐるのに、
實體は何もない、そんな世界からやつて來た者のやうに思はれた。

4〔ラオコーン〕トロイのアポロ神殿の神官。トロイ戰爭の際、ギリシャ軍の木馬の計略を見破り市民に警告したため、罰として、アテネから送られた海蛇により息子達と共に絞め殺された。

第三十八章／雀

ロルフに示唆を與へられた後、
ネヘミヤの從順な態度は、クラレルにとつて、
恐らく、二重の意味を持つやうになつた。
といふより、彼の貧しい住まひは――
二人は今そこへ向ふ所なのだが――
新たな意味を帶びるやうになつたらしい。
　砂地によく見かける貧弱な草が、
軒蛇腹の古い裂目に生えてゐるのを
クラレルは見た。
それは草を刈る者の手を一杯に滿たす事も、

束を縛る者のふところに抱へられる事もない。[1]
遙か彼方、不毛の大地に聳え立つ、切り立つやうな岩壁をも、
魔力で寝入らせてしまふやうな深い靜寂のただ中に、
よく知る鳥の囀りが、
小うるさく聞えて來た――エルサレムに澤山ゐて、
市場に出すために、
今も罠で捕へられてゐるといふ、
例の、二羽で一錢の値段の鳥[2]――
雀だ。近くのテラスで悲しげに歌ふ、
この一羽の雀は、あたかも、
友を失つて嘆き悲しむ、

1〔草を刈る者の・・・抱へられる事もない〕舊約聖書「詩編」第一二九章第七節參照。
2〔二羽で一錢の値段の鳥〕新約聖書「ルカ傳」第一二章第六節參照。

詩篇作者[3]でもあるかのやうだつた――誰からも見捨てられ、
屋根に止り、
目を見開き、寂しく鳴いてゐるのに、
誰一人答へてはくれない――しかるに、神殿を見上げれば、
日差しを浴びて、空高く、囀りながら、
蜂のやうに點々と、跳びかける者達が！
　だが、今や二人はかのアーチに至り、階段を昇り、部屋の中に座つた。
以前、心が落ち着いてゐた時、
クラレルはネヘミヤに來し方の話を語らせようと試みて、失敗した事があつた。
しかし、ロルフの暗示に富んだ話に強く興味をそそられて、
彼は再び試みてみる氣になつた。
所が、ネヘミヤは寄る年波のせゐで、

3〔詩編作者〕舊約聖書「詩編」第一〇二章第七節參照。

他の事柄については口も輕いのに、
隱された過去の出來事については、
警戒を解かうとしなかつた。
彼の衰へ行く精力は、正にその一點のみに集中し、
しつかりと扉を閉ざしてをり、
頑なに閉ざされた表情は、
非難の色を表しつつ、それ以上訊いてはならぬと、
クラレルにはつきりと語つてゐた。
もう少し留まつてゐるだけでも、
相手の心を蹂み躙る事になるのではあるまいかと懸念して、
クラレルは暇を告げる事にした。ゆつくりと立ち去りながら、
隱者の部屋が窮狀を呈しながらも、改善の徵を見せてゐるのに氣がついて、
喜ばしい氣持になつた。
　何者かが優しい心配りをしてくれたのだ。
誰が？　訝しく思ふ必要は、クラレルには殆ど無かつた。

第三十九章／クラレルとルツ

北の地方では、空にかかるしつとりとした「虹」の下、
草原がいかに優しげに見える事か。
夕立があがり、日が暮れ行く時、夕闇の中に、
水滴はなほも殘り、夜は近くても、
駒鳥は歌ふ。それと同じやうに、
愛の光が、ルツの心を滿たし、
悲しみの跡を覆ひ隱した。
尤も、完全に消し去る事は無かつたらうが。
　思索を刺激すべく遠出をしたり、
勉學の孤獨な靜寂に耽つたりしながらも、
クラレルは日ごとにかの路地裏を訪ねた。
　女らしく眞心のこもつた關心を示しつつ、

母親はその育ち行く愛の姿を見守つた。
彼女はそれを喜んだ。悲しみが深かつただけに、
一層明るい希望の存在が感じられたからだ。
空に舞ふ鴎は、海に浮かぶ雲を背にすると、
何と白く、白く、輝く事か。
　クラレルは隨分幼い頃に死別してゐたから、
母親も女兄弟も知らなかつたが、
アガルの率直で親切な物腰を見てゐて、
生來善良な氣性の女が、
家庭にあると、
いかに魅力的な存在になるかといふ事を、
初めて知つた。
それに勝るものは地上にない——
それは土でしかない存在を聖化する。
聖母マリアよ、汝への崇拝が生じたゆゑんだ。

一方、ルツはと云へば、「愛」が「運命」との絆を承認し、
最初の接吻でその事を確かめて以來、自らも、そしてまたアガルも、
異國にある悲哀から、大いに癒されたやうな感じがした。
新たな視界が開けたのだ。そして、依然、
父親の究極の運命にまつはる不吉な兆しは逃れられないにしても、
青春のものたる希望に、
胸を彈ませる事は出來た。
さういふ氣持を守り育てようとて、
クラレルはルツのゐる處では努めて不安な心を隠さうとした。
優しい愛の言葉を交してゐても、
不安な心が今なほ顔を覗かせる事があつたのだ。
底に潛む懸念を、ルツはある程度察知したが、
相手の抑制や、抑制の動機については、更にはつきりと察知した。
かくしてクラレルは愛情を一層豊かに受け取るやうになり、
愛着は一入深くなつた。とどの詰り、

「愛」の強い力が全てを屈服せしむる事になるのだとしか、
ルツには考へられなかつた。
彼女の世界を支配してゐた曇り空も、
今は薔薇色に輝く希望のオーロラに彩られ、
自ら償ひをするかのやうに、
時に、貝殻や、蜂鳥や、花など、とりどりの色彩を帶びるのだ。
二つの忠實な心を、天が裏切る事などあり得ようか。
髑髏模様の蛾なんぞには、己が住處だけを守らせて置けばよい。

第四十章／塚

シオンの丘に、黄昏とその影が落ちる前、
城壁の外、カトリック教徒が、
門から運び出される棺桶を置く場所に、すなはち、
敗北を知らぬ信仰の象徴たる十字架が、
剥き出しの土の塚の傍に立つその場所に――
立ち去りかねる様子で立つてゐるのは誰か。
それはクラレルだつた。チェリオの墓にやつて來たのだ。
蒼白だつたが、未だ冷たくなる前のチェリオを、
修道士達は己が會衆の一人だと云ひ張つて、
説得し、救濟すべく、躍起となつた。
儀式用の蝋燭の光に照らされながら、
抵抗しない唇に、

時を辨へぬ熱情に驅り立てられて、十字架を押しつけた。
最後には、ローマの正統の死者達の仲間として、
信仰によつて救はれる事もなかつた彼を、
教皇のローマの眞の息子でもなかつたチェリオを、横たへた。
生命の灯が消えんとしてゐる時を支配して、
死に行く「懷疑」の手に「信仰」の蝋燭を握らせた。
そんな風に、
噂をし、非難をし、陰口を云ふ、
他の宗派の者達もゐた。
　だが、さういふ話を聞いたために、クラレルは、
この塚に葬られた隱遁者を訪ねようとしたのではない。
さうではない、嘆き訴へる聲を、彼は心に感じたのだ――
地下からの哀れな訴への聲だ。
どうかこの自分を忘れないで。世の中が如何に騷がしからうと、
喧噪の中に、この私の記憶を溺れさせないでくれ。

そして、クラレルは考へた、
種族の違ふチェリオに對してではあつたが――未知なる者よ、
聲に出した言葉や、活き活きした表情を通して、
俺はお前を知る事はなかつた。が、ここにゐると、もつと親しめる感じが、
もつと近しい感じがする。生きてゐる間は、距離があつた――
生の目的が違ふせゐで、打ち解け合へないでゐた――
だが、死が、心の隔てを取り拂つてくれ、
かうして俺は瞑想に身を任せてゐられるのだ。
　溜息をつきながら、
彼は踵をめぐらし、ゆつくりと急な坂を上り、
やがて、眼下にギホンの谷を見渡す事の出來る、
かの平らかな高臺に辿りついた。
そこでは、今なほ、他の者達が、
「死神」と逢引をしてゐる――同胞から遠く離れて横たはる、
サレムで死んだプロテスタント達だ。

聖書の文句があちこちに刻まれた、
そこにある墓の土臺の石の前に、獨り、佇んで、
棺と語り合ふ男がゐた。
ロルフだつた。「この男、知つてゐる男だつた」と、
棺を指差しながら彼は云つた。「しかし、會つたのは、ここから遠い——
隨分、遠い處だつた」。間があつた。「でも、御覧なさい、
花輪の中のヨブの言葉は、何といふ信頼の言葉でせう。
『われ知る、我を贖ふ者は生く』[1]。
可哀想なエセルウォード。君は模索してゐただけだつた。
僕は君を知つてゐた。君は少ししか希望を持つてゐなかつた。
しかし、この、力盡き倒れた男の死の床で、
誰か親切な者が跪いて、聖書を讀んでやつたとしても——

1〔「われ知る、我を贖ふ者は生く」〕舊約聖書「ヨブ記」第十九章第二五節參照。

おお、認めるしかない、現代人にとつて、死はいかにも侘しい、
正に荒涼たるものだ。如何なる抵抗も示さず、
如何なる慰めの言葉にも從つて、我々は死ぬ——
儀式を願ひ求める事もなく、拒絶する事もない。
それは無力感ゆゑの無頓着か、
それとも、最期の、今生の最期の無關心か。
ある者にとつては、それは疑ひもなく、内心の平安の現れだが、
他の者にとつては、恐らくは、肉親への思ひやり。
生きてゐる間は模範的だつたのだから、死に際しても、
さうでありたい、不愉快にしたくはない、といふ譯だ」。
　半ば放心の顔付で、
ロルフは塚のまはりに目を走らせた。「人の思ひは彷徨ふものだ。
こんな事が思ひ出される。同じやうな安らかさで、
如何なる抵抗も示さずに、他の宗教の掟を守り、
それでゐて、その魔力に屈する事も殆ど無い男がゐた。

その男、誓つた仕事を完遂すべく、
トルコ人の間でトルコ人として扱はれながら、
病に倒れた。死の床で、
コーランが詠まれるのを默つて聽いた。
イスラムの嘆きが彼のために叫ばれ、
埋葬の飾りのついた屍衣にくるまれた。
そして、今、エジプトの荒野の端の、
埋葬されたスルタンの教會堂が立つ場所に、
絶えずメッカに顏を向けて、
この非の打ち所無き模倣者は横たはつてゐる。
ターバンを卷いたスイス人、シャイフ・イブラーヒム——
すなはち、ブルクハルトだ。[2]——が、雀が巢に戻つて行く。

2〔ブルクハルト〕ヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルト（一七八四～一八一七）スイスの探險家、東洋學者。

さあ、門から門番がゐなくならないうちに、
そしてまた、二度と門から入る事のない此處の連中もろとも、
閉め出されてしまふ事にならないうちに、そろそろ出發するとしませう」。

第四十一章／城壁[1]の上で

二人は城門のところで別れた。すぐ傍に、
胸壁に至る長い石段がある。
空中を走る回廊だ。
胸壁の上から眺め渡してみたくなつて、
クラレルは石段に足を向けた。
　太陽の最後の光線を受けて、
城門に近づいて來る一團のまはりに、
霞のやうに、塵や埃が舞ひ上る。
取り分け人目を惹くのは、一團の先頭に立つて、
馬を下りて裸足で歩く二人の男だ。一人は、

1〔城壁〕ヤッファ門の城壁。

深い謙遜の意をあらはす衣服を纏つてゐる。
社會的地位などは殆ど解らぬ――
彼の顔立がそんなものを拒絶してゐた。
むしろ、全體が苦痛に覆はれ――
運命に打ちひしがれた男の顔だ。
漫然と聖地にやつて來た人間ではない。
後ろで、馬飾りをつけた馬が飛び跳ねたが、
立派な仕着せを着た馬丁が取り押へた。
主人は一心に祈りを捧げながら歩を進め――
そのまま城門を入つて來た。
　一心に見入つてゐたクラレルは、その光景に強い印象を受け、
城壁を横切り――壁の内側のアーチから、
その人物が姿を現すのを見てゐると、
高位聖職者の上着を堅苦しく纏つた數人のギリシャ人が、
彼を出迎へ、兩頬に接吻し、

かの特別な愛情と、重々しい敬意とを示した。
かくも高められた愛情と敬意とは、
かの悲しめるラザロ[2]には無縁のもの、
彼等聖職者達も、未だ眞摯なる信仰を失つてゐないのだ。
　馬を下り、徒歩でやつて來た二人目の男は、
俗人の身分のままの信仰者で、
十字架とロザリオを持ち、
敬虔な心で黄昏時の平安を樂しんでゐた。
ローマ・カトリック教徒だが、
高い身分の者ではないらしかつた。
サレムの聖なる領域を通るに際し、
かくも深い敬虔の念を公けに示すのは、

2〔悲しめるラザロ〕新約聖書「ルカ傳」第十六章第十九節〜三一節參照。

近頃では隨分珍しい事なので、
道筋にゐる人々も、
靜かに視線を向けながら、
強い關心を表にあらはしてゐた。
　次に、二人のナザレ派のヘブライ人が、
先導者の一人に秘かに苛立ちを示しながら、馬に乘つてやつて來た。
温和しい驢馬の背の上の擔ひ籠の中で、
ロシア人の貴婦人が垂幕を左右に分けた。
城門が見えると、一人の騎乘者が馬を下り、
貴婦人に驢馬を下りるやう指圖した――
夫なのだ。續いて、彩りも取り取りに、
アダム以來の全人類の使節よろしく、
樣々な民族の人々が渾然となつて歩んで來た。
到着した滿員の蒸氣船から、
船客がヤッファの岩棚に降り立つ光景さながらの混雜だ。

他の連中が喋つたり祈つたり、いかにも騒々しい中に沈黙を守り、
皆が綺羅を競ふ中に地味な服装を纏つて、
こちらに近づいて來る三人の者は、何處の國の人間か。
彼等の冷靜な批判者の眼差は、
情念を載せる淺い海を否認してゐるかに見える。
或は、ニル・アドミラリ[3]なる賢明な教訓を、
誤つて自らに適用してゐるのか。もしくは、
騎乘の彼等は合理主義の信奉者で、
自己充足しつつ、孤立して生きんとする者達なのかもしれない。
が、さればとて、哀れむべき信仰者の誰彼に對しても、
大いなる寛容の心は示してゐる。

3〔ニル・アドミラリ〕（ラテン語）何事にも驚かない事。無關心。

　没する前の太陽の光線が斜めに差して來た頃、
最後に到着した男達が入つて來た。
やかましい音を立てて城門が閉る。
クラレルは未だ城壁の上にゐた。
近頃、彼の心に様々な疑念を喚び起したもの――
光景であれ、言葉であれ、事件であれ――その全てについて彼は考へてゐた。
秋の風が砂丘を吹き抜け、
灰色の空が夏の終りを告げる時、
燕は海峡の空を舞ふ――
長い旅路を控へて、
彼は躊躇ふ、飛び立つべきか、未だ舞つてゐるべきか。
しかし、とどの詰り、燕は海を越えて、
どうしても渡つて行かねばならぬ。同様に、クラレルもまた、
己が深淵を越え、懐疑をも越えて飛び立ち、
遠く、遙かなる結論を招き寄せようとするのであらうか。

疑念を引き摺つたまま、
彼は宿に戻り、從順な氣持で、
舊約の父なる者達の言葉を讀んでみようとした。
無駄だつた。心は當處なく彷徨ひ、苛立つた。
新約の福音史家達なら、求めに應じてくれるかもしれぬ。
美なるものの支配を心の底から彼は感じた。
しかし、やはり距離を感じない譯には行かなかつた。
時も、調子も、現代人の彼からは、
餘りにも懸け離れてゐた。座つてゐられなくなり、
立ち上つて、床の上を歩き、
心を決めかねるまま、佇んだ。ふと、
小さな部屋の、何の飾りもない壁が、
目の前の壁が、彼の目に止つた。
漆喰の上塗りをした部分が、
薄くはがれ——

白い薄片が床に落ちてゐた――
はがれた部分に、薄く鉛筆で、
詩が書かれてゐた。神經が昂ぶり忘我の境地にある時、
手近なものによつて遠くのものが思ひ起され、
卑近なものによつて超自然的な出來事が暗示される事がある。
かの女性、コラルトのクリスティーナ[4]が、
壁の中に埋め込まれてゐるのだと、ふと、クラレルは思つた。
隱されてゐた處から、今、その姿を現したその詩は――
形有る物ではなく、逗留したどこかの旅人が、
考へ出した想念に過ぎず――
落書きした處に漆喰を塗られ、今、再び人の目に曝された譯だが――
とまれ、その詩は、悲劇的事實を暴き出してゐるもののやうに思はれた。
氣分といふものは、しかく人の心を支配し得るものなのだ。

4〔コラルトのクリスティーナ〕不詳。

クラレルは讀んでみた。ぼやけてゐたが、次のやうに書いてあつた。

「大股の足取り、得意げな表情、敗者への愚弄、
それら勝者の不名譽となるものを、私は好まない——
それゆゑ、群衆が旗を掲げ、期待に顔を輝かせ、意氣盛んに前進しつつ——
『あの方』をかくも大膽に捨て去つた世界には背を向けて、
私の思念は、乳離れを知らぬまま、着實な貿易風の吹くままに、
『あの方』の方向に流れて行く。
破滅を齎す『無神論者』や『過激論者』が、
信仰の深まる宵闇を紅蓮の砲火で照すならば——
それならばなほの事、私は、悲哀の裡に、
シリアの聖墳墓の中で明滅する丈低いランプを慕はしく思ふ」。

「これはどういふ詩なのか——待てよ、ここに、ぼんやりと——

『聖墳墓より戻りて。B. L.』[5]とある」。――翌日、
クラレルは宿の亭主にざつくばらんに訊いてみた。
主人の答はかうだつた。「確か巡禮で――いや、
はて、どうだつたか、でも、確かにイギリス人だつた――
イギリス人の美しい若者でした。一寸、待つてゐて下さい」。
暫し席を外した後、二冊の本を手に、
亭主はゆつくり戻つて來た。「御覧なさい、これを――
たまたま、殘して行つたものです」。――一冊は、
司教冠を被る人物の肖像畫が附されてをり、
英國高教會派の事や、
告白、斷食、聖者を祭る日の事などを論じてゐて――
古い典禮執行規定が復活されない事を嘆いてゐた。
しかも、卷末の「完」とあるその下に、

5〔B. L.〕不詳。

その事を慨嘆する評言が書き付けてあつた。
　二冊目の本は違つた調子のもので――
まづシュトラウス[6]を論じ、ルナン[7]を侮蔑し――
急ぎ足で牧神パンにまで云ひ及び、
休む間もなく、そこで山羊足の神に赤い帽子を被せ、
プルードン[8]とコミュニストとを一つに編み合せてゐた。
だが、この本を讀んだ誰かが、
餘白のあちこちに書き込んだ、熱つぽい評言が示してゐるのは、
異議の表明といふよりは、悲嘆の思ひであつた。二冊の本のいづれにも、

6〔シュトラウス〕ダーヴィット・フリードリッヒ・シュトラウス（一八〇八～一八七四）ドイツの神學者・哲學者。イエスが神話的存在だとする『イエス傳』の著者。

7〔ルナン〕エルネスト・ルナン（一八二三～一八九二）フランスの歴史家・批評家。『イエス傳』の著者。イエスに關してシュトラウスと同様の見解を持つ。

8〔プルードン〕ピエール・ヨゼフ・プルードン（一八〇九～一八六五）フランスの社會主義者。無政府主義思想を展開。

鉛筆で小さく、署名が附されてゐた。
「B. L.　オックスフォード　セント・メアリーズ・ホール。[9]

本の持主が壁に殘したかの詩行を、
よりよく解釋する手懸りを與へてくれる、
何がしかの暗示を得ようとして、
クレレルがざつと目を通した二冊は、
あらまし、さういふ内容の本だつた。

9〔セント・メアリーズ・ホール〕オックスフォード大學オリエル・カレッジのホール。

第四十二章／「便り」

新しくやつて來た旅人達の何人かは、
アブドンの宿に泊つてゐたが、
町を見物し終へたら、
更に遠くへ足をのばし、
シディム[1]を訪ね、死海とサーバ[2]にも
赴くといふ話だつた。クラレルはどうしようか。
ほんの數日の旅だ。旅から戻る途中、
一行はベレヘムに立ち寄り、しばし足を留めてから、
シオンに歸つて來るといふ。

1〔シディム〕死海の傍らの平原。ソドムとゴモラの町がある。
2〔サーバ〕セント・サーバ修道院。死海の傍ら、キドロンの谷にある。

が、クラレルは心を決めかね、煮え切らない氣持のままでゐた。
たまたま、ヴァインとロルフも、
旅に參加すると知つたのだが。
　ルツと別れたくなかつたのだ。
とは云へ、同時に、ロトの地[3]や、
海や、ユダの地の恐るべき旱魃の様子を己が目で見て、
その有様をしかと心に留めたくもあつた。
洗禮者ヨハネに贖はれぬまま、[4]
かのヨハネの荒野が疑惑をいや増しつつあるのか、それを確かめたくもあつた。
　さうして搖れ動く心を抱へつつ、
靜まり返つた路地を歩いてゐると、
急に背後から、警告の叫びと、

3〔ロトの地〕アブラハムの甥ロトにまつはる土地。舊約聖書「創世記」第十九章第一節～二六節參照。
4〔ヨハネに贖はれぬまま〕舊約聖書「ルカ傳」第一章第八十節、第三章第三節～四節參照。

蹄の鳴る音とが聞えた。壁にしがみつき、
振り返ると、一瞬の間に、
土埃がふりかかり、晝の光を遮つた。
砂漠の色で覆はれた前進に、
砂漠の雰圍氣を漲らせ、
土埃を浴びて亡靈さながらの騎馬の男が、
投げ槍のやうに飛び去つて行つたのだ。
急を知らせる使ひだ。彼が向ふ方角には――
（後になつてクラレルは思ひ出した）
壁に圍まれたアガルの家がある。
　武具の立てる音、蹄の響、
警告の叫びもまた、
クラレルを打ちのめした。なぜかは解らぬ。
が、何時間かが素早く過ぎ去り、
かのユダヤ人の主が營む宿の邊りに近づくと、

アーチの下にネヘミヤが待つてゐて、
その顏は何事かを告げようとして、
暗い翳りを帶びてゐた。
クラレルの心臟が止つた——「運命」の使者なのか、ネヘミヤは？
「何が、一體、何があつたのです？」——聖者は躊躇つた——
「ルツですか？」——「ネイサンです」。教へられた話はかうだつた。
ネイサンは亂暴で容赦の無い敵から、如何に脅迫を受けても、
齒牙にもかけぬ誇り高い男だつたから、
惡態をついて撥ね返して來たが、
今回はただの脅迫ではなく、實際の行動だつた。
シャロンの野に、屋根は燒け落ち、
焦げの材木には、血の塊が染みとなつてついてゐた。
屍體は、運び去られるか、
身ぐるみ剥がれたまま殘されるか、もしくはもつと慘い有樣になつてゐた。
おう、ルツよ——痛ましいアガルよ、不幸は不幸を生む。

未來なき寡婦として放り出され、
恐らくは財産もなく、
悲嘆の霧に包まれた海原に、舵を取る腕とてない。
　彼女らと悲しみを共にし、力にもならうとて、
クラレルは二人の家に眞つ直ぐに進んで行く。
悲しみにくれるその家――が、悼まれるべき當の死者が、
横たはつてゐないため、悲しみはいや増さざるを得ない――
家は閉ざされてゐた。戸を叩いてみようか、
呼びかけてみようかと、心を決めかねてゐると――見よ、
かのラビが姿をあらはし、その後ろで、
戸が閉つた。一瞬、二人とも驚いて、
目と目を合はせたが、すぐに雙方の眼付きが變つた。
クラレルに對するラビの秘かな胸中の思ひは、
險しく高慢な眼差がはつきりと示してゐた。
他を譴責してやまぬ、權力の意識。

死――それこそはレヴィびとの領分だ、とでも云ひたいらしい。
ラビは一言も發する事なく、踵をめぐらし、立ち去つた。
　クラレルは立ち去りかねてゐた。戸外にゐた、
老いたる隣人が云つた。
心を和らげる事が決して無いのが、ユダヤ人の流儀だから、
この家は、ヘブライ人以外には、誰に對しても、
長く閉ざされる事になるだらう――悲しみの傍らには、
同じ民族の者がゐて、跪いて慰め、
共に勞り合ふのだ。足取りも重く、
クラレルは歩み去つた。ルツが引き籠つてゐる間、
どうやつて時間を過したらいい？　鬱陶しい無為の苦しみかｒ、
どうやつて逃れようか？
さうだ、例の巡禮の旅に參加しよう。

明日、エリコ[5]を經由し、
シディムに向つて出發する筈だ。
　しかし、まづ、彼は手紙を書き送つた。
短いが、心の命ずるがままの手紙を――
氣は進まぬが、やむなく思ひ立つた計畫だと告げ、
指輪を同封した。愛を誓ふためでもあり、
ルツにいつまでも忘れてほしくないためでもあつた

5〔エリコ〕死海北方のパレスティナの古都。

第四十三章／葬列

だが、一體、そんな事が――いや、出來る譯がない、
心をこめて、自らの口から、左様なら、と云ふ事もなく、
愛しい眞實の魂に別れを告げ――愛する人から離れてしまふなどといふ事が。
しかし、今の落ち著かない状況の下では、
行くのが正しいとも云へる。留まつた所で、
暫くは、彼女の傍から切り離されてゐるしかない。
彼女自身、いかに悲嘆に暮れてゐても、
かう囁くに相違ない、「お出でなさい――それが最善です」。

ああ、心が搖れる！　挨拶を交はす者とて殆どゐない、
半ばが丸天井に覆はれた街路を、
クラレルは歩く。やがて、ひつそりと壁に圍まれた泉が、

彼の足を止めた。噴水盤には、
サラセン風の意匠が刻まれてゐるが――
今は毀れ、乾き切つてゐて、
埃まみれの雜草が、這ひまはつたり絡みついたりしてゐる。
碎け毀れた「黄金の盞」や「吊瓶[1]」の事を思ひ出しつつ、
立ち去りかねてゐると、音樂が――
若々しい聲々が聞こえ、行列が現れた。
香しい花輪で飾られた、豪奢な擔ひ籠がやつて來る。
歌ひ手達、吊り香爐、そして垂れ幕。
花嫁だ。けれども、おう、何と青ざめた顔色か。
新郎はかの「青髭[2]」、殘忍なる「死神」、

1〔「黄金の盞」や「吊瓶」〕舊約聖書「傳道之書」第十二章第六節參照。
2〔青髭〕ヨーロッパ各地に古くから傳はる物語の主人公。妻を六度も迎へては次々に殺して秘密の部屋に隱して置くが、七度目の妻に發見され、彼女の兄達に殺される。

今日も今日とて、百萬人目の乙女を我物にしたのだ。
新婦はかのアルメニア風の棺臺に横たへられ、
我家をあとにし、慣れ親しんだ道を辿り――
新郎のために全てを捨てた。葬列は更に近づいて來る――
手に手に運ぶ、
蝋燭の弱々しい炎が見える。
西に沈む太陽の光にすら、見劣りする弱々しさだ。

だが、聞くがいい、應唱しつつ、進んで行く合唱隊の歌聲を。
長衣を纏ふ男達や少年達が、規則正しいリズムに從ひ、
優劣つけ難く競ひ合ふ。
低音がいとも深い悲しみの裡に、
深刻にして莊重なる思念を搔き立てると――
男達の聲音など齒牙にもかけず、
少年達が甲高い聲で叫び返す。

が、課せられた役割に忠實に、
顎髭の男達が、再び、哀歌を歌ふ。そんな風にして、うねりつつ進み、
城門をくぐり、葬列は、墓に向つて進んで行く。
　後に殘され、
隱遁者よろしく、自らの心と獨り向き合ひながら、
クラレウは何に惱み苦しんでゐるのか。見るがいい、
あたかも、空中に、何やら警告の言葉をでも、
聞き取つたかのやうな樣子ではないあ。愛はかくも恐しいものたり得るのか？
宿命に脅えてゐるのか？　それとも、未來に？
全てが意圖と食ひ違つて——禍ひがふりかかるとでも？　それどころか、
棺と墓穴が待ち受けてゐるとでも？　——否々、俺は彼女から離れないぞ。
斷じて、否。もう決めた事だ。もはや、動搖する事はない。
　けれども、またもや彼は考へ直した。
そして、自らを叱責し、嘲笑しつつ、心中、
かう獨りごちた。汝、迷信深き懷疑論者よ——認めるがよい、

棺臺はどうしても運ばれねばならない、といふ事を。
アルメニア風の棺臺が通つたからとて、何ゆゑさまで衝撃を受けねばならないか？
手紙は既に發せられた。あの中の言葉を取り消したいとでもいふのか？
ほんの暫く、會へなくなるだけの事ではないか。

第四十四章／出発

拂曉、星の光が消え、
聖燭祭の朝が訪れる。
　巡禮達が集つて、
宿の廣い段庭に至る。
アクラの丘の上に作られた、この段庭からは、
薄明りの中、坂をなして傾斜する町の様子が見える。
混血のアラブ人達が騒いでゐる——
巡禮のために引具をつけながら、
大聲を出して、叫んだり、罵つたり、
やかましい限り。
いかにもあの連中らしい——東洋の生活の特徴だ
怠惰から勞苦へと驅り立てられ、

憤然として動き出しては、爭ひに火をつける。
騷々しく爭つてゐるにも拘らず、危害を加へ合ふ事はないが、
狂つたやうに燃え立つので、激怒の絶頂にあるかのやうに見える。
そして、大きな氣苦勞の必要は少く、
倦怠の日々を延々と續けるのだ。
　人になつき、運命に慣れ從つて生きてゐる、
青みがかつた淡灰色の驢馬が、
小突かれながら、無骨な手で鞍をつけられてゐる間、
じつと大人しく立つてゐた。この驢馬については、いづれまた。

　以上の光景をクラレルは眺めてゐた。それから、
目を轉じて、町の彼方に目をやると、
朝の光の中、敏感に打ち震へる大空を背景に、
オリーヴ山が青白く、はにかむやうな姿を現はした。
クラレルは再び段庭を見た。

穏やかな山と云ひ爭ふ馬丁達――
いかにも對照的だが、それらがなぜ、
模糊たる不安を呼び覺し、溜息を誘ふのか？
心の重荷を増し加へ、定かならざる意味を與へて、
感覺を苛立たせようとするのか？
　馬に乘る刻限となつた。一人一人が、
門の傍に立つ宿の主人、かのいユダヤ人の前を通りながら、
重々しい見送りの挨拶を受け、
道中の安全を祈る堅苦しい言葉に應へる。活氣ある六月、
曙光の大氣を浴びて意氣盛んな者は、
活發で陽氣な反應に充ち滿ちてゐるものだが、
彼、このイスラエル人のみは、
エホヴァの町の雰圍氣を映し出してゐた。經驗を嘗め盡して、
徒らに意氣盛んな心など無くなつてしまつたのだ。
彼の皺深い顔に、かの曖昧な思念の影が走る。

冒險、青春、及び人生の盛時が過ぎ行く時、
老いたる者の顏に、時に見て取れる例の影だ。
作られた顏ではあるが、シニシズムまで現はしてはゐないが、
悲嘆の聲を洩らしてはゐないから、憐憫だけからなる表情とも云へぬ。

一行は出發する。シオンの地よ、いざ、さらば。
彼等が再びこの地にまみえるまでに、
クラレルの心はいかなる運命と出逢ふ事にならうか。
期間は短いが、この地を離れる事の意味は深い。

（第一部、完）